

日本への 回帰

第54集 平成30年 合宿教室レポート



大学教官有志協議会
公益社団法人国民文化研究会

日本への回帰
(第五十四集)

——第六十三回全国学生青年合宿教室（西日本・東日本）の記録——

はしがき

ことし平成三十一年四月三十日、今上陛下には御譲位遊ばされて、翌五月一日、皇太子殿下が百二十六代の天皇として御位を踐ふまれる。

三十年前の昭和六十四年一月七日、早曉の臨時ニュースで、数多あまた国民の御平癒の願ひも空しく、昭和天皇崩御の悲報がもたらされた。それ以来、「平成」の三十年間、世の平らぎと国民の安寧を祈られる大御心は、年頭に当り毎年御発表の御製、或いは列島の各地を毎年のやうに襲った台風や地震、洪水、土砂崩れなどの被災地を見舞はれるお姿、さらには沖縄県を初め国外のサイパン、パラオ、フィリピン等の激戦地まで及んだ御慰霊の行幸…等々に、われら国民は忝かたじけなきことと拝するばかりであった。

先帝陛下崩御の翌々日の一月九日、「即位後朝見の儀」で、陛下は「ここに、皇位を継承するに当たり、大行天皇の御遺徳に深く思いをいたし、いかなるときも国民とともにあることを念願された御心を心としつつ…」とお述べになった。一月三十一日、父帝に「昭和天皇」の諡おくりなが奉じられた「追号奉告の儀」では、「明仁謹んで 御父大行天皇の御霊に申し上げます。大行天皇には、御即位にあたり、国民の安寧と世界の平和を祈念されて昭和と改元

され、爾來、皇位におわしますこと六十有余年、ひたすらその実現に御心をお尽くしになりました。ここに、追号して昭和天皇と申し上げます」と奏上してをられる。

そして平成の御代の初め、御父昭和天皇を偲ばれて次のやうに詠まれてゐる。

一年祭近付きて

(平成二年年頭 御発表)

父君をしのび務むる日々たちてはや一年ひととせの暮れ近付きぬ

大嘗祭

(平成三年年頭 御発表)

父君のにひなめまつりしのびつつ我がおほにへのまつり行ふ

畏れ多いことながら、かくして平成の御代は父帝昭和天皇を仰がれる大御心のままの三十年であつたと、われら国民もまた陛下を仰ぎ奉るのである。

ここで新元号「平成」を戴く時代が始まった當時を少しく回顧してみたい。ことし五月一日からの新元号施行ともいささか関連するからである。

昭和六十四年一月七日、昭和天皇崩御を承けて同日午前十時、皇居正殿(松の間)での「劍璽等承継の儀」で皇位を践まれた今上陛下のもと、午後二時半過ぎ、「平成」の新元号が官房長官から発表された。併せて同日、翌一月八日午前零時から施行する旨の政令が公布された。この際、閣議での新元号決定の前に、新元号案が新陛下に上奏されて「ご聴許」を

賜つてゐる。これは「元号は、政令で定める」といふ元号法一項に依りながらも、新天皇による新元号おもんばかといふ伝統を慮つてのことであつた。

ところが、この度の御代替りに際しては、四月一日に新元号が閣議決定されて、その日に「五月一日から施行する」との政令が公布されるといふ。政令の公布は天皇の国事行為である（憲法第七条）から、今上陛下が次の新元号に関する政令に署名なされるといふことになつて、「元号は、皇位の継承があつた場合に限り改める」（新天皇による新元号施行）といふ元号法二項の趣旨にも抵触しかねないことになる。仮に百歩譲つて国民生活に混乱を生じさせないために事前に公表するにしても、新元号の五月一日施行といふ政令への御署名は御即位を待つて次の天皇にお願ひしなければならぬはずである。そもそも次の元号を前代の天皇が裁可されることなど、あり得ないことである。情報システムの改修に時間を要するといふのであれば、「五月一日閣議決定、新天皇による政令の公布」の手順で、施行日を例へば六月一日とするといふやうには、なぜならなかつたのか。

平成の以後も元号が続くのだから、細部にこだはるなど言ふなかれ！。四月一日に「五月一日新元号施行」の政令が公布されるといふことは、一見すると「五月一日御即位」と平ひょう仄ひやくが合ふやうにも見えるが、新天皇による新元号といふ元号制度の根幹に背馳はいちすること

なのある。ここには「平成」元号施行の際に見られたやうな周到な配慮がまったく感じられない。この三十年の落差は限りなく大きいと言はねばならないだらう。

ところで、平成の三十年とは、如何なる時代だったのだらうか。

災害列島・日本とも呼ばれるやうに、地異天変が毎年繰り返され、その度に陛下の御慰問を忝うしたと言っている。中でも六千四百人も犠牲者が出た平成七年一月の阪神淡路大震災、死者・行方不明者が二万二千余人にも上る平成二十三年三月の東日本大震災は、刮目す^{かつちく}るまでもなく歴史的な大惨事だった。ただし、かうした天災には事後の対処しか出来ない。しかし、人為である政治の世界で問題はなかっただらうか。

多くは触れられないが、一つだけ挙げるとすれば、平成七年が「戦後五十年」であるとして、同年六月、国会（衆院）が「深い反省」の決議を採択したことがある。「戦後六十年」の平成十七年八月にも同趣旨の反省決議を採択してゐる。戦争は不幸なことではあったが、既にすべての交戦国と平和関係回復の条約・協定が締結されてゐるにもかかはらず、事（言）改めて「アジアの諸国民に与えた苦痛を認識し、深い反省の念を表明する」などと決議するとは、どういふことだったのか。

朝日新聞などのマスメディアが咬^{そそのか}したとはいへ、今の自分らは「悪しき父祖たち」とは

違つて、その行為を反省してゐる「善良なる日本人です」と言ひつゝのるに等しい政治的愚行ではなかつたらうか（平成七年八月の村山首相談話、平成十六年八月の小泉首相談話、そして平成二十七年八月の安倍首相談話も、「反省」をベースにしたものだった）。かうした「国外に向けての迎合と卑屈」と「国内（わが父祖）に向けての不遜と傲慢」が背中合せの病的心理は、被占領期に吹聴された「戦争への罪悪感を日本人の心に植ゑつける宣伝計画」（WGIP、War Guilt Information Program）が未だに効いてゐることを示すものと言つていい。

昭和天皇を仰がれる陛下のお気持ちを押察する見識が国会議員諸氏に少しでもあつたら、「深い反省の念」の語を弄して、父祖の時代を突き放すことなど出来なかつたはずである。

この小冊子は昨年開催の私共の宿泊研修の記録である。常に願つて来たことは「わが先人の心とともに生きる」といふことであつた。そこからしか世界の国々との互惠平等の關係は生じて来ないと思ふからである。行間からも、私共の微意をお汲み取り頂けたら幸ひである。

最後に、江崎道朗先生には御講義要旨の掲載をお許し頂いたことに感謝申し上げます。

平成三十一年二月十一日

大学教官有志協議会

国民文化研究会

目次

はしがき

第六十三回合宿教室〔西日本〕

講義

第一日目（八月二十四日）

自分を知りたいあなたへ——歴史が教へてくれるもの——

…………… 福岡県立筑紫中央高等学校教諭 與島誠央 …… 1

第二日目（八月二十五日）

人はいつも過去に励まされてゐる——記憶があるから生きていける——

…………… (株)寺子屋モデル 廣木 寧 …… 27

改革者の使命——芭蕉と子規——

…………… (公社)国民文化研究会参与 折田豊生 …… 65

第三日目（八月二十六日）

「人から、家から、国から」…………… (株)寺子屋モデル代表 山口秀範 …… 89

講話

筑豊炭田と朝鮮人炭坑夫たち―頌徳碑と謝恩碑について―

..... 元福岡県立直方高等学校教諭 小野吉宣 …… 119

短歌入門

短歌創作導入講義 …… 税理士法人あおぞら 北村公一 …… 129

創作短歌全体批評 …… (公社) 国民文化研究会副理事長 小柳志乃夫 …… 145

第六十三回合宿教室〈東日本〉

講義

第一日目 (九月七日)

日米同盟の行方と中国への姿勢 …… 評論家 江崎道朗 …… 159

日本のこころ『古事記』 …… 昭和音楽大学名誉教授 國武忠彦 …… 193

第二日目 (九月八日)

聖徳太子「憲法十七条」に学ぶ―人としての生き方―

..... 元神奈川県立小田原高等学校教諭 原川猛雄 …… 215

日本の国柄―明治維新百五十年に思ふ―

…………… 三菱地所(株) 都市開発二部専門調査役 青山直幸 …… 243

講話

亡き師の言葉 …… 若築建設(株) 東京支店 池松伸典 …… 269

短歌入門

短歌創作導入講義 …… 伊佐ホームズ(株) 小柳雄平 …… 283

創作短歌全体批評 …… (公社)国民文化研究会副理事長 澤部壽孫 …… 301

一年の歩み …… (株)寺子屋モデル 廣木 寧 …… 315

合宿教室のあらまし …… 若築建設(株) 東京支店 池松伸典 …… 335

合宿詠草抄 …… 359

あとがき

(表紙 明治神宮外苑・聖徳記念絵画館)

講義

—合宿導入講義—

自分を知りたいあなたへ
—歴史が教へてくれるもの—

福岡県立筑紫中央高等学校教諭

與 島 誠 央



- 一 はじめに
- 二 父のこと
- 三 「輪読」りんどくについて
- 四 吉田松陰の略歴
- 五 『講孟餘話』
- 六 歴史に学ぶと自分が見えてくる

一 はじめに

只今ご紹介頂きました與島誠央です。私は鹿児島県の離島、奄美大島で生まれ育ち、大学の時からこの福岡県に参りました。大学を卒業した後、高校の教師となり、日本史を教へて参りました。早いもので、今年で三十年の月日が経ちます。本日は「自分を知りたいあなたへ—歴史が教へてくれるもの—」と題してお話ししたいと思ひます。

最初に、教師になりたての頃の思ひ出話を致します。私が赴任した高校は、県下でも非常に荒れてゐることで知られてをりました。校内の至る所にタバコの吸ひ殻が落ちてゐます。服装や授業態度もひどく、私語は当り前で、授業も中々聞いてくれません。

悪戦苦闘の日々を過してゐたある日の事です。いつもの様に生徒達の私語を注意してゐると、リーダー格の女子生徒が、藪から棒にかう質問して来たのです。「先生、こんな昔のこと勉強して何の役に立つん？（何の役に立つのか）」咄嗟の事で、私は返答に窮しました。彼女は続けて「歴史なんか、もう今は消えて無いのに、何で勉強する必要があるん？」と畳みかけて来ました。「数学なら役に立つと思ふけど…」とまで言はれて、私は歴史の大切さを否定された気持ちにして、悔しさのあまり「数学だって小学校で習ふ算数で十分ぢやない

か。足し算、引き算、かけ算、割り算が出来れば、日常生活には困らない」と言ひ返しました。

私の勢ひに氣押されたのでせう。彼女は、それもさうだ、とつぶやいて、その場はそのまま納まりました。結局、私は彼女の質問にきちんと答へきれてゐません。その後もこの質問に答へることの無いまま、現在に至りました。三十年も前の事ですが、折々あの質問は私の胸に去来し、かう問ひかけてきます。「君は、何のために歴史を教へてゐるのか。君にとって歴史とは何なのか」と。この問ひかけに答へることは、実は今も簡単ではありません。けれども、本日の講義を良い機会として、三十年前の教へ子に答へるつもりでお話したいと思ひます。

二 父のこと

私の父は大正十年、奄美大島の住用村すみようせんといふ奥まった村で生まれました。実家は貧しく、教科書やノートなど買ふ余裕はありません。進学するお金もなかったもので、父は小学校を卒業した後、一人で長崎に渡り、佐世保重工業で船造りを覚え、生計を立てました。盆や正月



もなく働き、当時のお金で「五円」を貯め、実家に仕送りした様です。このお金で父の生家に初めて風呂がついたのだと自慢してゐました。

私は小さい頃から、父が晩酌してゐる側に佇み、昔話を聞く事がよくありました。四人兄弟の末っ子でしたから、父も幼い私に話す事が楽しいやうでした。先程の佐世保重工業では極秘の仕事として、とてつもなく大きなエンジンを作らされ、のちに戦艦大和が広島の大和で発進した知らせを聞き、自分たちが造ったものは大和だった事を知った、といふ話も自慢の一つでした。

そんな父から戦時中の話も折々聞きました。大東亜戦争勃発により、父も召集を受けて、陸軍に入隊して満州に出征しました。極寒の満州では、敵に発砲する時にそなへて、手袋を取るだけの夜間訓練

も行はれた様です。手袋をしたままでは指が太くなるため、引き金がうまく引けないのです。十まで数へるうちに指先から紫色になったと話してみました。父の部隊はその後、南京、重慶と転戦。昭和二十年八月、南京で敗戦を迎えました。

敗戦を知った父達の部隊は、全員自害する覚悟でテーブルの上に銃を置き、隊長が建物の二階から降りて来るのを待つてみました。やがてテーブルにいた隊長は、皆にかう言つたのです。「我が国は敗戦した。負けたからには責任を取つて死なう、とお前達が考へてゐるのはよく分かる。しかし、ここで死ぬ事は許さん。もし、どうしても死ぬといふのなら、日本に帰り、先祖の墓に参つて、そこで死ぬ。この部隊の敗戦の責任は、私が取らせてもらふ。今ここに、陸軍本部と郷里宛に遺書を用意した。これを届けてくれ」と言ふなり、こめかみに銃を当てて、パンと自決されたさうです。父達は死ぬに死ねず、隊長の左手の小指だけ切り取つて焼き、戦地での裁判を受け、遺骨と遺書を持って復員しました。

父はその後奄美に帰り、母と結ばれ、私達兄弟四人が生まれたのです。隊長さんは四国松山の方と聞きました。この話は、中学生の時に一度だけ父から聞き、今も鮮烈に覚えてゐます。

もし、隊長さんが父達に、死んではならない、祖国に帰れ、と言はなければ、父は異国

の地で果ててゐた事でせう。今の私があるのは、隊長さんのお陰なのだとしみじみ感じます。歴史とは、命のつながりそのものではないでせうか。それは私だけでなく、今ここにお集まりの皆さんも、先祖からのいのちのつながりがなければ、ここにゐる事は無いのです。ですから、歴史とは自分の外に存在するものではなく、私達自身が歴史の中にある、とまづはじめに受けとめて頂きたいのです。

その意味から私は、「歴史を学ぶ」のではなく、「歴史に学ぶ」といふ姿勢が大事である、と考へてゐます。歴史を外側からジロジロ眺め回して、まるで他人事のやうに批評する論説の何と多い事か。皆さんは毎年八月十五日になると、如何に当時の日本軍が悪い事をしたか、とテレビ番組が報道するのを目にするでせう。私が大学二年の頃だったでせうか、終戦の日のテレビ番組を黙って見てゐる父に食つてかかった事があります。「こんなに日本軍の悪口ばかり言ふのは許せない。父ちゃんはこれでいいの？父ちゃん達は、お国のために一所懸命戦つたんぢやないの？」憤慨する私に父はポツリと言ひました。「世の中が百八十度変つた」と。

私が歴史の教師になつたのは、父達が戦つた戦いくさに対する名誉回復のためなのです。我が国の歴史を、まるで他国の歴史のやうに断罪する風潮は、今なほ根強いのです。高校の歴史

教科書は、私が教師を始めた頃に比べると、だいぶましになりましたが、それでも近現代の日本の歩みなどは、まるで他人事のやうに書いてゐます。この冷たい歴史の見方から脱却すること、それがこの合宿教室の目指すものなのです。

三 「輪読」りんどく について

では、本来の歴史に迫っていくためには、どうすればいいのでせう。それは、歴史に刻まれた言葉に迫る以外にない、と思ふのです。魂の籠もった先人の言葉を読み味はふこと、それは大変根気の要ることなのですが、その努力無くしては歴史に触れる事は出来ないと考えます。

言葉は精神そのものです。そこに触れる時、初めて歴史は姿を現します。ですから、年表に歴史があると考へるのは余りにも浅はかです。年表は外面に過ぎません。もっと内面から歴史に触れなければならぬのです。

皆さん自身の過去を振り返る時にも同じことが言へるでせう。平成何年に高校に入学した、それが分かっても何も内面は感じ取れません。でも、その時に書いた日記を読むと、皆

さんは当時の自分に出会ふでせう。それが歴史なのです。

本日は皆さんと共に、幕末の志士吉田松陰の文章を読み味はって行きたいと思ひます。それが具体的に歴史に触れる事になると考へるからです。私自身、大学生の頃より先輩方と「輪読」といふ形で学んで参りましたので、是非皆さんにもこの学び方に親しんで頂きたいと思ひます。

「輪読」とは、その場集ふ全員が、一つの文章を輪になつて読み味はふ形式を言ひます。まづ司会の進行に従ひ、適度に区切りながら分担して音読します。この時、読み方を間違へたり、文字を読み飛ばしたりしたら、気が付いた者がすぐに指摘し、音読し直します。音読が済んだら、最初から区切りながら再度音読し、意味の取れないところを出し合ひ、全員で意味を把握します。それが済んだら、文章から受けとめた感想を述べ合ふのです。

皆さんにはこの講義のあと、各班に帰つて輪読して頂きますので、要領を知つておいてください。その際最も注意して欲しいのは、目の前の文章から離れない努力をするといふ事です。よくありがちなのは、目の前の文章を置き去りにして、自分の勝手な感想を述べる人が出てくる事です。それは単なるお喋りに過ぎません。

「歴史に学ぶ」といふことは、自分を「無」にすることなのです。ひたすら目の前の文章

が何を言っているかに集中してください。何か気の利いた事を話してやらう、などといふ欲が出ると、忽ち目の前の「歴史」は失はれます。班長さんを中心に、皆さんで注意し合つて、文章に立ち返りつつ進めてください。

四 吉田松陰の略歴

文章に入る前に、吉田松陰の略歴を紹介します。お手元の資料の年譜をご覧ください。

吉田松陰は、江戸時代後期の日本が欧米列強の脅威にさらされ、幕末の動乱に雪崩れ込んでいく時期に、わづか三十歳でこの世を去りました。文政十三年（一八三〇）、長門国、現在の山口県の萩に生まれました。杉家の次男です。天保五年（一八三四）、叔父で山鹿流兵学師範である吉田大助の仮養子となり、翌年叔父が他界したため、数へ六歳で吉田家を継ぐ事となります。

この時期から叔父玉木文之進たまきぶんのしんの指導を受け、九歳の時には藩校明倫館に兵学師範見習ひとして出勤。天保十一年（一八四〇）、十一歳の時には、藩主毛利敬親たかちかに初めて『武教全書』の御前講義を行ひ、賞賛されてゐます。よほど早熟であつたのでせう。

この天保十一年に、中国でアヘン戦争が起きてゐる事に注目してください。イギリスは貿易の利益を上げるために、違法な麻薬を中国に売りつけたばかりか、これを中国が取り締まると、近代兵器の力にものを言はせて、中国を撃破、支配力を強めていくのです。

アジアの盟主中国が、イギリスにいとまやすく支配されていく有様は、我が国に衝撃を与へます。松陰自身も、我が国の兵学諸派を極めるだけでなく、西洋兵学についての知識を求めて行きます。

嘉永三年（一八五〇）二十一歳、長崎を含め九州各地に遊学します。この経験は、松陰の視野を一気に広げたやうです。わづか四ヶ月の間に六十一冊を読破、海外事情、中国語も学んでゐます。何より生涯の友、熊本の宮部鼎蔵ていざうと出会ふなど、各地の先達との交わりが財産となりました。

翌嘉永四年、最初の江戸遊学を経験しますが、余りに多くの学問を一気に吸収しようとしたため、くたくたになつてしまひます。それでも年末には、友人との約束を守るため、あへて脱藩を決行、東北へと旅立ちます。

途中、水戸藩に立ち寄り、我が国の歴史に詳しい水戸学から刺激を受け、東北各地の海岸防備の実情を踏破しながら確認してゐます。通常、脱藩の罪は重いのですが、これも藩主

毛利敬親の計らひで諸国遊歴の許可が下りる事となりました。

かうしてつひに嘉永六年（一八五三）、ペリーの浦賀来航に遭遇するのです。この頃は二度目の江戸遊学の時期で、師とすべきは佐久間象山だけである、と断言してゐます。萩の兄、梅太郎宛の書簡に「佐久間象山は当今の豪傑、都下一人に御座候。（中略）良齋（安積良齋、幕府が設立した昌平黌の教授）は俗儒、僕甚だ之れを鄙み、絶えて其の門に入らず」とあるのを見ると、ペリー来航といふ緊急事態が、松陰に人を見る目を与へた様子が窺へます。この頃、象山の薦めもあつて、松陰と足輕の金子重之助は、海外渡航を決意します。丁度、長崎にはプチャーチンのロシア軍艦が来航、これに乗り込まうとしました。しかし、ロシア艦はクリミア戦争が勃発したため、予定を繰り上げて出航し、間に合ひませんでした。

だがチャンスは再び訪れます。嘉永七年（一八五四）に、ペリーが日米和親条約締結のために再び来航したのです。松陰と重之助は、海岸につないであつた漁民の小舟を盗み、下田港内の小島から旗艦ポーハタン号に漕ぎ寄せ、強引に乗船しました。

しかし、渡航は拒否されてしまひます。日本の法律を曲げるわけにはいかない、といふのがその理由でした。証拠となる荷物を載せた小船も流されたため、計画が明るみに出るのは時間の問題であると二人は考へて、下田奉行所に自首し、伝馬町牢屋敷に投獄されました。

この件について幕府の一部には、立案した象山、首謀者の松陰兩名は国禁を侵したのだから死罪にあたるといふ意見もあつたやうですが、海岸防禦御用掛（のちの外国奉行）川路聖謨あきらの働きかけで老中の松平忠固ただかた、老中首座の阿部正弘が松陰達の行動に理解を示したため、助命して国許で蟄居ちつきよ、といふ寛大な処置が執られたやうです。二人は長州へ檻送され、松陰は野山獄に、金子重之助は岩倉獄につながれました。

金子は下田渡海後から病にかかつてをり、護送中も激しい下痢のため衰弱甚だしく、何くれと無く世話をする松陰の励ましに力を得て、萩までは氣力を保ち身内との再会も果たしますが、獄につながれて以降は病状が更に悪化、翌年一月、獄中にて病死します。松陰の嘆きは深いものでした。別々の獄につながれて会ふ事もかなはなかつた松陰は、自分の食事を半分に削り、貯めたお金を遺族に送つてゐます。

金子の死から三ヶ月経つた四月十二日、野山獄では松陰と獄囚達との『孟子』の勉強会が始まります。この勉強会には獄の番人までも参加しました。その日々の記録が、本日皆さんに読んで頂きたい『講孟餘話』です。

この勉強会は八ヶ月の間、断続的に続けられ、この年の十二月に松陰が獄から出て自宅蟄居となつてからも続けられました。叔父の玉木文之進が途中でやめるのを惜しんだからで

す。

なほ、野山獄の獄囚のほとんどは、松陰の尽力で、翌安政三年（一八五六）十月には赦されて獄を出てゐます。もともと彼らの大半は、罪を犯したのではなく、性格が粗暴であるなどの理由で家族から疎んぜられ、借牢してつながれてゐたのです。

ですから投獄期間も定まってをりません。長い者で四十九年も獄の生活をしてゐるので、親族から見放され、いぢけてゐた彼らの目に、松陰はどのやうに映つた事でせう。

他界した友のために食事を削る、書物を音読しては感動して喜び泣く、かと思へば獄の新入りとして雑用も進んで引き受け、病気の者が出たあとには緊急の事態に備へて皆でお金を積み立てる、聞けば国禁を犯してペリーの船に乗り込んだらしい……こんな人物に好奇心を抱くと言ふ方が無理でせう。『孟子』の勉強会は、かなり熱を帯びたものであつたらうと思ひます。

出獄後の松陰については、簡潔に申します。出獄と言っても実際は、生家の杉家から一步も外に出てはならない幽閉です。それでも松陰を慕つて集まる多くの門下生に恵まれました。久坂玄瑞、高杉晋作、伊藤博文、山縣有朋、吉田稔麿、入江九一、前原一誠、品川弥二郎、山田顕義、野村靖と名前を連ねるだけで、幕末維新时期に活躍した人ばかりであることに

驚かされます。

安政四年（一八五七）、この学び舎は、玉木文之進より「松下村塾」の塾名を引き継ぎ、書を読んで意見交換するだけでなく、登山や水泳なども取り入れたやうです。しかし、この充実した塾生活も、安政五年（一八五八）、幕府が無勅許で日米修好通商条約を結んでからは一変します。

朝廷の許可無く条約を結んだ幕府に対する松陰の怒りはただならず、あらゆる手段を講じて条約破棄と攘夷決行を幕府に迫らうとします。一方、松陰の行動を無謀であるとして、これを止めようとする塾生とも一触即発の状態にまで対立、つひには倒幕まで口にする松陰を長州藩は危険と見做し、野山獄に再度つなぎました。

安政六年（一八五九）五月、幕府より呼び出しを受けた松陰は、七月、江戸伝馬町の獄に入ります。幕府の取り調べ自体はすぐに済んだのですが、松陰はこの機会に幕府を諫めようと、これまで考へてきた間部要撃策^{まなべ}までも自ら話してしまふのです。間部要撃策とは、老中首座間部詮勝^{あきかつ}を上洛の途上で捕らへ、条約破棄と攘夷決行を迫り、もし受け入れなければ切る、といふ策です。

幕府は松陰のこの計画を危険と見做し、つひに斬首が宣告されるのです。十月二十七日、

伝馬町の牢屋敷にて死刑が執行されます。その最期に居合はせた者は皆、堂々とした見事な最期であったと語つてゐます。数へ三十歳の生涯でした。萩で松陰の最期を聞いた父は、「ああ、児こ、一死君国に報ひたり。真に其の平生に負しかず」（ああ我が子よ、死を以て天子様の国に報ひたのだね。本当に日頃の行ひの通りだ）と微笑んだと伝へられてゐます。

五 『講孟餘話』

では『講孟餘話』の文章を読んで参りませう。

○孟軻もうか（孟子）は騶人すうひとなり。齊せいの宣王せんおう、梁りやうの惠王けいおうに遊事す。

この○の部分は、『孟子』の一節です。意味は、孟子は騶の人だが、自国では理想の君主を得る事が出来なかつたので、他国の君主である齊の宣王や梁の惠王に向いて仕へた、といふことです。このあとに松陰がこの一節をどう読んだかを論じてゐます。区切りながら意味を取っていきませう。

經書けいしょを読むの第一義は、聖賢せいけんに阿おもねらぬこと要かなめなり。若し少しにても阿おもる所あれば、道明めいかならず、学まなぶとも益えきなくして害がいあり。孔孟こうめい生しょう国こくを離はなれて他国たこくに事つかへ給たまふこと、濟すくまぬことなり。

四書五經を読む際に最も大事な事は、聖人賢者に媚こびへつらはない事である。もし少しでも媚こびへつらふならば、道みちが明らかにならないばかりか、学まなんでも効果は無く、害がいさへある。孔子や孟子が生まれた国を離はなれて、他国の君主に仕つかへた事は、申し開きの出来ない事である。

松陰のこの文章は、『講孟餘話』の最初に書かれたものです。非常に激しい書き出しです。孔子や孟子であらうとも、決して無批判に受け入れてはならない、と断言してゐます。自国を離はなれ、他国に君主を求めもとめる事が、余程許ゆるせないのです。その訳は続く文章に綴つづられていきます。

凡そ君と父とは其の義、一なり。我が君を愚なり昏なりとして、生国を去りて他に往き、君を求むるは、我が父を頑愚として家を出で、隣家の翁を父とするに齊し。孔孟、此の義を失ひ給ふこと、如何にも弁すべき様なし。

そもそも君主と父親は根本的に一つのものである。だから君主が愚かで道理に暗いからといって、生まれた国を離れて他国に君主を求めるのは、まるで自分の父親を愚かであるとして、隣の家の人を父にするのと同じではないか。孔子や孟子がこの根本を見失つてをられるのは、どうにも弁解の仕様が無い。

或るひと曰く「孔孟の道大なり。兼ねて天下を善くせんと欲す。何ぞ自国を必ずとせん。且つ明君賢主を得、我が道を行ふ時は、天下共に其の沢を蒙るべければ、我が生国も固より其の外にあらず。」曰く、天下を善くせんと欲して我が国を去るは、国を治めんと欲して身を修めざると同じ。修身、齊家、治国、平天下は、『大学』の序、決して乱るべきに非ず。

ある人はかう言ふ。「孔子や孟子の道は大きいのだ。天下が共に善くなる事を目指してゐるのだ。どうして自分の国だけを考へようか。それに、優れた君主に仕へ、自分の道を実行できるなら、天下全体がその恩恵をかうむるのだから、自分の生まれた国も含まれるのだ」と。しかし私はかう言ひたい。天下全体を善くするために生国を去るのは、国を治めようとして自分自身の身を修めないのと同じである。身を修め、家を整へ、国を治め、天下を平らかにする、これは『大学』に説かれた物事の順序である。決して乱してはいけない。

君に事へて遇はざる時は、諫死するも可なり、幽囚するも可なり、饑餓するも可なり。是等の事に遇へば、其の身は功業も名誉も無き如くなれども、人臣の道を失はず、永く後世の模範となり、必ず其の風を観感して興起する者あり。遂には其の国風一定して、賢愚貴賤なべて節義を崇尚する如くなるなり。然れば其の身に於て功業名誉なき如くなくれども、千百歳へかけて其の忠たる、豈に挙て数ふべけんや。是を大忠と云ふなり。

善き君主に巡り会はなければ、諫めて死んでも良い、捕らはれても良い、飢ゑても良い。さういふ事態になれば、自分自身は成果も名誉も無いやうであるけれども、臣下としての道

を失ふ事無く、永久に後の人から模範とされ、必ず自分の生き様を觀て感じて立ち上る者が出て来る。つひには国柄が定まり、賢い者も愚かな者も身分の高い者も低い者も全て、節操や義理を尊ぶやうになるのだ。だから、思ひを遂げられなかつた最初の臣下は、一見、成果や名譽も無いやうに見えるけれども、百年千年の月日をかけて忠義を尽くしていくことになり、その功績は数へやうも無い。これを大忠と言ふのだ。

然れども、此の論、是れ国体上より出で来る所なり。漢土に在りては君道自ら別なり。大抵聰明睿智億兆の上に傑出する者、其の君長となるを道とす。故に堯舜は其の位を他人に譲り、湯武は其の主を放伐すれども、聖人に害なしとす。我が邦は上天朝より下列藩に至る迄、千万世世襲して絶えざること、中々漢土などの比すべきに非ず。故に漢土の臣は縦へば半季渡りの奴婢の如し。其の主の善悪を忖びて転移すること固より其所なり。我が邦の臣は譜第の臣なれば、主人と死生休戚を同じうし、死に至ると雖も主を棄てて去るべきの道、絶えてなし。

しかしながらこの論は、日本の国柄から出て来たものである。中国では君主のあり方が

違ふのだ。大抵、聡明で叡智があり、全ての人々の中で抜きん出てゐる者が君主となるのである。だから堯や舜は君主の位を他人に譲り、湯や武は君主を追放し打ち倒しても、聖人としての立場に傷はつかないのだ。我が国は上は朝廷から下は諸藩に至るまで、代々世襲して来てをり、中国など比べやうも無い。だから中国の臣下は、例へるなら、半年ごとに主人を替へる奴隷のやうなものだ。主人の善し悪しを見て移り替はるのは当然なのだ。我が国の臣下は先祖代々、同じ主人に仕へてゐるので、主人と生も死も喜びも悲しみも共にし、たとへ死ぬ事にならうとも、主君を見捨てる事など絶対に無い。

嗚呼、我が父母は何国いづくにの人ぞ。我が衣食は何国の物ぞ。書を読み、道を知る、亦誰またが恩ぞ。今少しく主に遇あはざるを以て、忽然こつぜんとして是これを去る。人心じんしんに於おいて如何いかにぞや。我れ孔孟を起たたして、与ともに此の義を論ぜんと欲す。

ああ私の父母は、どこの国の人か。私の衣食はどこの国の物か。書物を読み、人の生きる道を知る事が出来るのは、誰のお陰か。（それを考へもせず）今現在、少々主君に恵まれなだけで忽ち（他の主君の所へ）去るのは、人として如何なものか。私は孔子孟子を呼び起こ

して、この点について議論したい。

聞く、近世海外の諸蛮、各々其の賢智を推挙し、其の政治を革新し、駸々然として上国を凌侮するの勢あり。我れ何を以てか是れを制せん。他なし、前に論ずる所の我が国体の外国と異なる所以の大義を明かにし、闔国の人は闔国の為に死し、闔藩の人は闔藩の為に死し、臣は君の為に死し、子は父の為に死するの志確乎たらば、何ぞ諸蛮を畏れんや。願はくは諸君と茲に従事せん。

私は次のやうに聞いてゐる、近年の西欧列強諸国は、政治体制を新しく作り替へ、着々と我が国を支配する勢ひを示してゐる、と。私達はどうかやってこれを防いだら良いだらうか。他には無い、先程述べた我が国の国柄が、他の国と異なる根本の意味合ひを明らかにし、我が国の人々が我が国のために死に、各藩の人々が自分の藩のために死に、臣下は君主のために死に、子は父のために死ぬ覚悟さへ確乎としてあるならば、どうして列強諸国を畏れる事があらうか。願はくは諸君と共に、この志を高めていきたいものだ。

如何でせうか。意味は取れましたか。私は大学一年生の秋に、松陰のこの文章を輪読しました。季節柄、夕方から夜にかけて気温は下がるのですが、文章のエネルギーに刺激を受けて心が熱くなり、体まで暖かくなって来るのです。小さい事でよくよしてゐる自分が馬鹿らしくなるほど爽快な気分でした。言葉にはこんなにも力といふものがあるのだ、と新鮮な思ひでした。

ところが、数年後の大学卒業前になると、松陰の言葉が響いて来ないのです。もどかしいけれども、原因が分かりません。一人で下宿に籠もり、静かにこの文章を読み直してをりました。

すると最後の段落から目が離せなくなりました。畳みかけるやうに繰り返される「死するの志」といふ箇所です。幾度か読み返すうちに、ハツと気が付きました。私はこの部分を「死ぬくらの覚悟」と、いつの間にか弱めて読んでゐたのです。もしかしたら、初めからさう読んでゐたのかも知れません。愕然としました。原文には、どこにも「くらの」といふ文字はないのです。目の前には「死するの志」といふ言葉が、厳然と聳えてゐました。

とてつもない覚悟の差、自分には、松陰の文章を読む資格は無い、と思ひ知りました。何年も自分勝手に読んで来ただけだった：しばらく呆然としてゐた私の眼に、ふと、最後の

一文が見えました。「願はくは諸君と茲こゝに従事せん」この一文が私に語りかけて来たのです。「肩を落とすな。一緒にやろうよ」と。

涙があふれてなりませんでした。私は心の中でつぶやきました。「松陰先生、こんな覚悟の定まらない私ですが、一緒に道を求める勉強に連ならせてください」と。

六 歴史に学ぶと自分が見えてくる

さて、最初に申し上げた三十年前の生徒からの質問に戻りませう。「なぜ歴史を勉強する必要があるのか」といふ質問でした。私は「今の自分を知るためだ」と答へたいと思ひます。大学に入学した頃の私は、松陰の文章に熱いエネルギーを感じました。それは私の中に、松陰の言葉に感応する思ひがあったからです。また、大学を卒業する頃の私は、自分の覚悟の無さに打ちのめされながらも、松陰の一文に救はれる思ひをしました。今の私は、成人した三人の子の父親であり、松陰の倍の年齢にまで達しようとしてゐます。その私にも松陰は迫って来るのです。「君の志は何ですか」と。

この問ひかけに自信を持って応じる事は難しいのですが、私の中で育んで来た祖国への

思ひは、学び続けて来た年月と共に、確かに積み重なって来た、と言へます。

我が国の命運を、常に我が事として受けとめる松陰の真つ直ぐな精神は、これからの私にとっても、自分の精神を映し出す鏡であり続けるでせう。私達が身だしなみを確認するために鏡を用ゐるやうに、歴史は、自分の内面を映し出してくれる精神の鏡なのです。

どうか皆さん、このあとの班別研修で、松陰の言葉にひたすら心を寄せてください。そこにきつと今のあなたが見えて来ると思ひます。

講義

人はいつも過去に

励まされてゐる

——「記憶」があるから生きていける——

(株) 寺子屋モデル

廣木 寧



はじめに

カズオ・イシグロ氏のこと

『蘭学事始』と福澤諭吉

『瘠我慢の説』——諭吉の永年の疑念——

『瘠我慢の説』——当事者の反応——

『瘠我慢の説』——徳富蘇峰の反論——

「瘠我慢の説に対する評論に就て」

忘れたこと或いは忘れさせられたこと

記憶としておくといふ使命——再びカズオ・イシグロ氏——

はじめに

ただいまご紹介に与りました廣木です。わたくしの演題はレジユメにありますやうに「人はいつも過去に励まされてゐる」です。副題に「記憶」があるから生きていける」と付けてをります。

私たちは未来を望みながら現在を生きてゐます。あれをやりたい、これをやりたいと将来のことを思案し、準備して生きてゐるわけです。さういふときに過去はなんら関与してゐないのでせうか。関与してゐるならば、どういふ風にかかはつてゐるのでせうか。

カズオ・イシグロ氏のこと

昨年（平成二十九年）のノーベル文学賞受賞者は、カズオ・イシグロといふ人であつたことは皆さまは知つてをられるでせう。イシグロさんのご両親とも日本人で、カズオ（二雄）さんが五歳のとき、つまり昭和三十五年に英国政府から国立海洋学研究所に招かれて一家で渡英したこともご存知でせう。お父さまは大正九年（一九二〇）の生まれで、明治専門学校

(現九州工業大学)を卒業後、長崎海洋気象台に入った海洋学者です。カズオさんのいとこ(藤原新一氏)のお話によりますと(「週刊現代」平成二十九年十月二十八日発行)、お父さまの鎮雄^おさんは「男前で日本人離れした顔立ちをして」ゐて、「目の色素が薄くて鼻も高く、一見、外国人に見えるほど」であつたとのこと。カズオさんの顔立ちはお父さま譲りださうです。お母さまの静子さんも美しい人ださうです。お母さまは長崎市内で教師をされてゐて、被爆されてゐます。

英国に渡つた石黒一家は、ロンドンから南へ五十キロほどのところにあるサリー州ギルフォードといふ高級住宅地に落ち着きました。昭和三十五年、つまり一九六〇年ころには、日本人はもちろんフランス人やイタリア人さへ見かけることは稀^{まれ}な時代であつたと、ノーベル賞受賞記念講演でイシグロ氏は述べてゐます。

カズオさんの両親は一年かあるいは二年したら日本に帰るつもりでゐましたから、カズオさんの別の表現をかりると「来年には、またおじいちゃんやおばあちゃんに会える」、「僕は日本で大きくなるんだ」と思つてゐましたから(「阿川佐和子のこの人に会いたい」週刊文春二〇〇一、一一、八)、カズオさんの成人後の生活は日本にあるといふ前提で、そのための教育は忘れられてゐなかつたさうです。日本にゐるお祖父さんからは毎月小包が届いた。月後れ



の「おばけのQ太郎」などの漫画や「小学一年生」などの雑誌や教育に関する本などが届くとカズオさんはむさぼるやうに読みました。

さういふ「来年」は日本に帰るといふ生活が十一年間続きました。といふことは、十一年目には、つまりカズオさん十五歳のとき、石黒家は英国に定住することに決めたといふことになります。

カズオさんは十歳のときに、隣近所の住人が皆通ふ教会の聖歌隊の隊長になりました。ギルフォード初の日本人聖歌隊隊長です。地元の小学校ではただ一人の外国人生徒でした。まだ日本人学校などありません。カズオさんはギルフォードでは有名人でした。なにせ近隣ではただ一人の外国人の生徒でした。近所の子供たちは、出会ふ前からカズオさんを知っていました。近くの店で買ひ物をしてみると、見知

らぬおとなから名前前で呼ばれることもあったさうです。

カズオ・イシグロ氏はノーベル賞受賞記念講演の中で、「家の中の私は、日本人である両親のもとで外とはまったく別の生活をしていました。内には外と異なるルールがあり、異なる期待があり、異なる言語がありました」と述べてゐます。ここにいふ、「内」と「外」とは「日本」と「英国」といふことでせう。「異なる言語」とは、もちろん「日本語」と「英語」といふことです。

しかし、「内」と「外」の二つを生活と送りながら、不思議なことに、イシグロ氏は「アデンティティ・クライシス、つまり自分はいったい誰なのかという問題で悩んだことはなかった」と述べてゐます。続いて「すんなりイギリスの日本のコミュニティに入ることもしなれば、私の周りにはいるイギリスの若者たちと仲良くやっていけた」と述べてゐます（阿川佐和子のこの人に会いたい）。ノーベル賞受賞記念講演で、「第二次世界大戦が終わって、まだ二十年も経っていないころのことです。その大戦では日本がイギリスの憎い敵だったはずです。当時を振り返ってそんなことを思うとき、イギリスのごく普通のコミュニティが自然な寛大さで私たち一家を迎え入れ、分け隔てなく接してくれたことに感銘すら覚えます」とイギリス社会と「仲良くやっていけた」理由を述べてゐます。

また、時代が変化してみました。イシグロ氏が処女長篇小説『遠い山なみの光』を書きあげたのは、一九八二年です。イシグロ氏によれば、「イギリスは八〇年代になるまで大英帝国として栄えていたプライドで生きていて、他国の文化にはまったく関心がなくて、他の国が我々のことを学べばいいんだという文化的な観点で世界を観ていた」（阿川佐和子のこの人に会いたい）。それが「八〇年代の初めに、突然、我々はヨーロッパの端っこにちよこんと位置してる小さな島国ではないか、世界の中心なんてとんでもないということに気づいて、他の文化をもっと学ばねばと、すごい転換をした。もう不公平とも言われるぐらい、英国のことのみに着眼点を置いた作家はないがしろにされるといって、極端に走ったんですね」。さういふ時勢の変化がイシグロ氏の背中を押ししました。イシグロ氏の前に、インドのムンバイ出身のサルマン・ラシュディや英領西インド諸島出身のV・S・ナイポールなどが現れて、「イギリス中心主義に立たず、イギリス重視を当然としない文学」、つまり「国際性」をもった文学が生まれていました（ノーベル賞受賞講演）。

イシグロ氏はデヴュー作の『遠い山なみの光』で王立文学協会賞、長篇二作目の『浮世の画家』（一九八六年）でウィットブレッド賞、長篇三作目の『日の名残り』（一九八九年）で英国文学界の最高の賞であるブッカー賞を受賞、九五年には大英帝国四等勲位、九八年にはフ

ランスの芸術文芸勲章三等を授かった。まさしくイシグロ氏は「ラッキーだった」。そして昨年十月にノーベル文学賞を受賞し、今年六月には「文学界への貢献」が評価され、イギリス政府から「ナイト」の称号を授与されました。イシグロ氏は「小さな外国人の少年だった私を迎えてくれた国家から榮譽を受けることに、深く感動している」と声明を発表した。因みに、『遠い山なみの光』を書き上げた翌年の一九八三年にイシグロ氏はイギリスに帰化してゐます。

子供のころからの夢は音楽家になることであつた、とイシグロ氏は語つてゐます（「朝日ジャーナル」一九九〇・一・五、一二特別増大号）。「ずいぶん作詞もしました」と明かしてゐます。しかし、努力の甲斐もなく、二十四歳のときに音楽家になることを断念しました。そのころの自身の風貌を、イシグロ氏は「両肩まで伸びた髪に、端の垂れ下がつた山賊スタイルの口髭」と表現してゐます。若かりし頃のイシグロ氏のさういつた姿の写真を見た方もをられるでせう。ではもしその頃のイシグロ氏が声を掛けられたらどういふ話をしたかといへば、「オランダのトータルフットボールのこと、ボブ・デイランの最新アルバムのこと、ロンドンでホームレスの人々と過ごししてきたばかりの一年のことなど」であらうと述べてゐます。つまり、当時イシグロ氏には文学も日本もなかつたといふことです。

さういふイシグロ氏が音楽を断念して何をやらうとしたかといふと、書くことでした。イシグロ氏はノーフォーク州バクストンに向かった。同州のノリッチといふ町にあるイースト・アングリア大学大学院のクリエイティブ・ライティング・コース（創作科）に受け入れてもらへたのである。イシグロ氏は作家にならうとしてゐた。

ロックシンガーを目指してゐたからといって文学はさう遠い世界の話ではなかつた。イシグロ氏がノーベル文学賞を受賞する前年のノーベル文学賞受賞者がロックシンガーのボブ・ディランであつたことを思ひ浮かべれば解ることです。イースト・アングリア大学創作科入学は秋からですが、その夏にイシグロ氏は短篇小説を二つ書いてノーフォーク州の下宿にやつて来ました。二つの短篇を下宿で読み返してイシグロ氏は失望しました。イシグロ氏は新たに短篇を書くことにしました。前の二篇同様に舞台は現代のイギリスです。猫を毒殺しようとする思春期の少年の話です。ある夜、イシグロ氏は「不意に」——Then one night, during my third or fourth week in that little room, I found myself writing, with a new and urgent intensity, about Japan - about Nagasaki, the city of my birth, during the last days of the Second World War.—日本語訳では、少し前からの文の訳も含めて、「まえの二篇同様、現代イギリスを舞台にしました。ですが、……ある夜のことです。その部屋に

住みはじめて三週目か四週目のことだったでしょう。不意にこれまでにない差し迫った思いにとりつかれ、気がつくとき、私は日本について——生まれた町、長崎について——第二次世界大戦の終戦間際の話を書きはじめていました。」（ノーベル賞受賞記念講演・土屋政雄 訳）

このときのことを振り返ってイシグロ氏は語ってみます。——「私にとって決定的に重要な数ヶ月でした。あの時期がなかったら、たぶん作家にはなっていなかったでしょう」

イシグロ氏は、アイデンティティ・クライシス、自分が誰で何者であるかといふ問題で悩んだことはないと言ったことは先に引きましたが、若い時に、人生の危機を経験しなかったはずはありません。イシグロ氏は音楽家にならうとして、例へば、ポップ・デイランのやうになりたいと思つてゐた。音楽で身を立てたいと考へてゐた。それを断念せざるを得ない破目に陥つた。これは人生の危機です。クライシス・オヴ・ライフです。

危機にあるイシグロ氏に突如、「日本」が立ち現れた。これはイシグロ氏本人にとつても「驚きでした」——“surprise to me”と書いてゐるやうに、不意の出来事だったので。後に長篇『遠い山なみの光』（“Pale View of Hills”）として完成する、この物語が書かれたのはノーフォーク州バクストンの農地が広がる小さな村の小さな家の部屋のなかでした。イ

シグロ氏は五歳のときにイギリスに来て以来一度も日本に帰って来てゐませんでしたから、この物語は、イシグロ氏の「記憶」の中にある日本が舞台なのです。

イシグロ氏は作家たらんとして、一九七八年の現在を精進したのですが、その時、イシグロ氏を励ましたのは幼い時の「記憶」でした。記憶——それは過去と呼んでも歴史と呼んでも重なるところの多いものですが、私たちは「記憶」によって生きていけるのです。過去に励まされて、現在に立ち、未来を嘱望してゐるのです。

『蘭学事始』と福澤諭吉

ここ二年ほど福岡の勉強会（読論会）で福澤諭吉の『福翁自伝』を読んでゐます。そのこともあつて過去現在未来のかかはりが諭吉ではどうだったのか、それを見てみたいと思ひます。江戸時代を三十三年、明治時代を同じく三十三年と、所謂封建の世と近代の世を等分に生きた諭吉が、自らの人生を「恰も一身にして二生を經るが如く一人にして両身あるが如し」（『文明論之概略』明治八年刊）と表現してゐます。晩年の諭吉に若き日のことはどのやうに記憶され、記憶されたことはどのやうに発現したのでせうか。

皆さまは、『蘭学事始』といふ書物があることはご存知でせう。中学か高校の教科書で読んだことがある方もをられるでせう。この本は蘭学者杉田玄白の自伝とみても差し支へないものです。わが国の蘭学の普及と進歩を語ることが自らの一生を語ることにした人の文章です。『蘭学事始』は、文化十四年（一八一七）に八十五歳で死んだ玄白が八十三歳の時に書いたものです。『蘭学事始』は長く出版されませんでした。

安政二年（一八五五）の大地震の際の火災で、杉田家に秘蔵されてゐた『蘭学事始』が焼失しました。蘭学を学ぶものは慨嘆しました。その頃には洋学の中心は蘭学から英学に移りつつありましたが、英語を学んでゐた諭吉も蘭学から出発した人ですから遺憾としました。諭吉は火災で『蘭学事始』がこの世から失はれてしまったと思ひました。

それから十二年が過ぎました。慶応三年、翌年は明治元年となります。諭吉の友人で蘭学者の神田孝平が本郷通りを歩いてゐると、露店にたいさう古びた書物を認め、手にとってみると、『蘭学事始』でした。玄白の親筆で門人に贈ったものでした。神田は学友同志に語り、皆は争つて写し取りました。次の諭吉の文を読んでみませう。文のいはれは後ほど説明します。

《書（『蘭学事始』）中の紀事は字々皆辛苦、就中明和八年（一七七二）三月五日蘭化（前野

良沢) 先生の宅にて始めてターフルアナトミアの書に打向ひ、^① 艚舵なき船の大海に乗出せしが如く茫洋として寄る可きなく唯あきれにあきれて居たる迄なり云々以下の一段に至りては、我々は之を読む毎に、先人の苦心を察し、其剛勇に驚き、其誠意誠心に感じ、感極りて泣かざるはなし。迂老は故箕作秋坪氏と交際最も深かりしが、当時彼の写本を得て兩人対坐、毎度繰返しては之を読み、右の一段に至れば共に感涙に嘔びて無言に終るの常なりき。》(『蘭学事始再版の序』・傍線引用者)

幕末に偶然発見された『蘭学事始』の写本をもとに玄白の曾孫に出版を促したのが論吉です。『蘭学事始』の稿が成つたのは文化十二年ですから、明治二年の出版まで五十四年の時が流れてゐます。

論吉の『蘭学事始』出版は、蘭学のため又先人への報恩のためであるのですが、今一つ大事なことがあって、それは『蘭学事始』を失つては「我洋学の歴史を知る」(『蘭学事始再版の序』) ことが出来なくなることです。論吉はここにいみじくも「歴史」といふ言葉を使つてゐますが、『蘭学事始』に綴られた言葉には、わが国洋学の「記憶」が込められてゐます。皆さん、個人の記憶は個人の死とともに消えてしまひます。しかし言葉に、文字に残された「記憶」は末永く残るのです。イシグロ氏の日本を舞台とした、処女長編『遠い山なみの

光』と第二作『浮世の画家』は、日本についての記憶は今書いておかないと忘れてしまふから、あるいは変質してしまふから、今ある記憶をあるがままに文字に残さうとして成ったものでした。これらは英語で書かれましたから、イシグロ氏は英語に貢献したことになります。論吉が『蘭学事始』に読んだものは、わが国が洋学と出逢ったその当初の学問の姿でした。ここから日本人は出発したのだ。その当初の姿は何としても国語の中に記憶しておかなくてはならない。売れる売れないといふことはどうでもよかった。二度と繰り返されない西洋文明撰取の揺籃期の姿がここに活写されてゐるのです。この揺籃期の文を読むたびに論吉たちが涙を流したのは、玄白たちの苦労は論吉たちの苦労であつたのです。日本人の苦労なので、日本人ならば我が事のやうに解る苦労なのです。日本人の西洋文明撰取は傍線①にあるやうに、「艚船みかじなき船の大海に乗出せしが如く茫洋として寄る可べきな」きものであつたのです。

先に引いた、『蘭学事始』の出版についての文章は「蘭学事始再版の序」と題されてゐます。明治二年の出版から二十一年経つた明治二十三年に、全国医学会が数千部印刷するに際し、同会会長の長與専齋ながよせんさいがともにその出身の適塾の先輩である論吉に序文を依頼して出来たのが「蘭学事始再版の序」です。先に、論吉は神田孝平が手に入れた『蘭学事始』を読む

たびに「感極り泣かざるはなし」と書き、箕作秋坪と読んで「感涙に嘔」んだと往時を偲んでゐましたが、実はそれから二十一年経って「蘭学事始再版の序」を書きながら論吉は泣きました。序文を催促する長與に、

《蘭学事始の事に付、今日神田孝平氏を訪ひ、事実相分り候に付、唯今別紙認さし上候。尚御刪正可被下候。実に此書は多年人を悩殺するものにして、今日も之を認めながら独り自から感に堪へず、涙を揮ひ執筆致し候。》

と書き送ります。「悩殺」といひ、「感に堪へず」といふ。それは『蘭学事始』が二百数十年ぶりに国を外に開いたわが国の、百年前に始動した西洋学問撰取の出発点に今また立ち会つた思ひなのです。論吉は「蘭学事始再版の序」の末尾に書いてゐます。

《東洋の一国たる大日本の百数十年前、学者社会には既に西洋文明の胚胎するものあり、今日の進歩偶然に非ずとの事実を、世界万国の人に示すに足る可し。内外の士人この書を読んで単に医学上の一小紀事とする勿れ。》

『蘭学事始』といふ「医学上」の小冊子は、現今の大日本の基を造つたのだといふ確信が、三十三歳の論吉をして自腹を切つてでも玄白の曾孫に出版を促し、五十五歳の論吉をして「蘭学事始再版の序」を書かしめ、「再版は沢山にして国中に頒ち度」と言はしめた。「蘭

「学事始再版の序」を書くに際して、神田孝平を訪ね、「蘭学事始」入手のいきさつを確認したのは、今は大河である洋学の、基となった蘭学が世に広まるきっかけとなった最初の一滴しずくを綴つづった「蘭学事始」が、世に残った顛末てんまつを正確に書き留めておきたかったのです。

『瘠我慢の説』——諭吉の永年の疑念——

次に同じ諭吉の文ですが、『瘠我慢の説』やせがまんといふ文に入ります。

『瘠我慢の説』は明治二十四年、つまり「蘭学事始再版の序」が書かれた翌年の十一月二十七日に稿が成った文章ですが、永年疑念をもって来たことを質たさうとした文章ですから、「蘭学事始再版の序」と同じく、過去の出来事を顕彰し、その意味を後世に伝えることを、敢へて言へば切望して、書かれた文章です。

『瘠我慢の説』は、幕末に軍艦奉行並なみ、海軍奉行並、陸軍総裁を歴任した勝海舟と、幕命によりオランダに留学した経験を持ち、明治元年から二年にかけて、明治新政府に反抗して旧幕府軍勢力を結集して東北で海戦し、北海道箱館に立てこもり多くの部下を失った榎本武揚えのもとけあきの二人が、新政府の高位高官（勝は海軍大輔たいたいふを経て海軍卿兼参議、そして伯爵、枢密顧問官。

榎本は文部大臣、外務大臣などを歴任)となつたといふ出処進退に疑念をもちそれを問ひ質した文章です。以下、時間に限りがありますから、海舟だけに絞つて話を進めます。

『瘠我慢の説』に「瘠我慢」といふ言葉が最初に出てくるところを先づ引きます。瘠我慢とは無理に我慢して平気でゐることです。

《自国の衰頹すいたいに際し、敵に対して固もとより勝算なき場合にても、千辛万苦、力のあらん限りを尽し、いよいよ勝敗の極に至りて始めて和を講ずるか若もしくは死を決するは立国の公道にして、国民が国に報ずるの義務と称す可べきものなり。即ち俗に云ふ瘠我慢なれども、強弱相対して苟いやしくも弱者の地位を保つものは、単ひとえに此瘠我慢に依らざるはなし。啻ただに戦争の勝敗のみに限らず、平生の国交際に於ても瘠我慢の一義は決して之を忘る可べからず。欧州にて和蘭オランダ白耳義ベルギーの如き小国が、仏独の間に介在して小政府を維持するよりも、大国に合併するこそ安楽なる可べけれども、尚ほ其独立を張はりて動かざるは小国の瘠我慢にして、我慢能く国の榮譽を保つものと云ふ可べし。》

ところが、どうだと諭吉は言ひます。『瘠我慢の説』を書いてゐる明治二十四年より二十数年前、王政維新(と諭吉は呼びますが)の事が起つて、この大切なる瘠我慢の一大主義が害された。

《徳川家の末路に、家臣の一部分が早く大事の去るを悟り、敵に向て曾て抵抗を試みず、只管和を講じて自から家を解きたるは、日本の経済に於て一時の利益を成したりと雖も、數百千年養ひ得たる我日本武士の氣風を傷ふたるの不利は決して少々ならず。得を以て損を償ふに足らざるものと云ふ可し。抑も維新の事は帝室の名義ありと雖も、其実は二、三の強藩が徳川に敵したるものより外ならず、此時に當りて徳川家の一類に三河武士の旧風あらんには、伏見の敗余江戸に帰るも更に佐幕の諸藩に令して再挙を謀り、再挙三挙遂に成らざれば退て江戸城を守り、仮令ひ一日にても家の運命を長くして尚ほ万一を僥倖し、いよいよ策歇るに至りて城を枕に討死にするのみ。即ち前に云へる如く、父母の大病に一日の長命を祈るものに異ならず。斯ありてこそ瘠我慢の主義も全きものと云ふ可けれ。》

諭吉は、鳥羽伏見の戦ひに敗れた後、江戸において、佐幕の諸藩とともに二度でも三度でも兵を集めて戦ふべきであった、といふのです。それでも駄目ならば江戸城に籠城し、城を枕に討ち死にすべきであった。これでこそ「瘠我慢の主義」が完結する。ところが、陸軍総裁の勝安房すなわち海舟は違つた。

《講和論者たる勝安房氏の輩は、幕府の武士用ふ可らずと云ひ、薩長兵の鋒敵す可らず

と云ひ、社会の安寧害す可らずと云ひ、主公の身の upper 危しと云ひ、或は言を大にして墻かきをせめ聞くの禍は外交の策にあらずなど、百方周旋しゅうせんするのみならず、時としては身を危うすることあるも之を憚らずして和議を説き、遂に江戸解城と為り、徳川七十万石の新封と為りて無事に局を結びたり。実に不可思議千万なる事相にして、当時或る外人の評に、およ凡そ生あるものは其死に垂なんなんとして抵抗を試みざるはなし、しゅんじ蝨爾たる昆虫が百貫目の鉄槌てつちいに撃たるときにても、尚ほ其足を張はりて抵抗の状を為すの常なるに、②二百七十年の大政府が二、三強藩の兵力に対して毫ちゆうも敵対の意なく、唯一向に和を講じ哀を乞うて止まずとは、古今世界中に未だ其例を見ずとて、竊ひそかに冷笑したるも謂いわれなきに非ず。》

「蝨爾たる昆虫」も「百貫目の鉄槌に撃た」れるときには、「足を張て抵抗の状を為す」のに、「二百七十年」にわたって日本を治めてゐた「大政府」の幕府が、「強藩」といへども高々二、三の藩に少しも「敵対の意」を示さずに、「和を講じ哀を乞うて止まず」とは何事かと云ふ異国の者の侮りを享ける策をなぜ勝は選んだか、と諭吉は話を進めます。諭吉は、勝は「数理」、つまり計算をしたのだと考へた。

《勝氏輩はひの所見は内乱の戦争を以て無上の災害無益の労費と認め、味方に勝算なき限りは速すみやかに和して速に事を収るに若かずとの数理を信じたるものより外ならず。其口に説

く所を開けば主公の安危又は外交の利害など云ふと雖も、其心術の底を叩て之を極むるときは彼の哲学流の一種にして、人事国事に瘠我慢は無益なりとて、古来日本の上流社会に最も重んずる所の一大主義を曖昧模糊あいまいもこの間に瞞着まんちやくしたる者なりと評して、之に答ふる辞はなかる可し。》

勝の最大の誤りは、古来日本の人事国事の一大主義である「瘠我慢」を「曖昧模糊」のうち「瞞着」したことである。ところが、王政維新のことについて、その勝ち負けは兄弟朋友の争ひであつて敵にして敵にあらず、幕府が最後の死力を張らずに、その政府を解いたのは時勢に応じた好き手際よきてであつたといふ説を唱へるものがある。これは逃げ口上だと諭吉は断じて、次のやうに言ひ放ちます。

《内国の事にも朋友間の事にも、既に事端③じたんを発するときは敵は即ち敵なり。然るに今その敵に敵するは、無益なり、無謀なり、国家の損亡なりとて、専ら平和無事に誘導したる其士人を率ゐて、一朝敵国外患の至るに当り、能く其士気を振うて極端の苦辛に堪へしむるの術ある可きや。内に瘠我慢なきものは外に対しても亦然らざるを得ず。之を筆にするも不祥ふしょうながら、億万一にも我日本国民が外敵に逢うて、時勢を見計らひ手際好く自から解散するが如きあらば、之を何とか言はん。然り而して幕府解散の始末は内

国の事に相違なしと雖も、自から一例を作りたるものと云ふ可し。』

身辺雑事においても、政治の世界でも、外交においても、瘠我慢なくしては切り抜けられない事が多々あるのに、国民に「時勢を見計らひ手際好く自から解散する」やり方を覚えさせてどうするか。勝氏は悪い例を作ってしまった。しかし、勝氏は人傑である。幕府内部の物論を排し、激昂を鎮め、一身を犠牲にして、幕府を解いたのは、王政維新の成功を容易にしたと云つてもいい。そのために、人の生命を救ひ、財産を安全なさしめた、その功德は少なしとしない。しかし、怪しむのは、敵であつた人たちと並んで新政府の高位にゐることである。

諭吉は言ふ、あなたのやり方は王道ではない。権道である。武士の風上にもおけないやり方で現在の地位を得た。後世子孫のために再演させてはならない。「断然政府の寵遇を辞し、官爵を棄て利禄を抛ち、なげう 单身去て其跡を隠すこともあらんには、世間の人も始めて其誠の在る所を知りて其清操に服し、旧政府放解の始末も真に氏の功名に帰すると同時に、一方には世教万分の一を維持するに足る可し。」

明治二十四年十一月二十七日に、『瘠我慢の説』を書き上げた論吉は、翌年の一月二十七日に、勝、榎本の兩人に同文を示した。福澤諭吉全集には榎本宛の手紙しか収録されてゐないが、勝にも同趣旨のものが送られたと推定してよからう。

《前略》陳のぶれは別紙は小生が二十余年来の所見にて、去冬、忽々執筆認置候ものなり。何れ時節を見計みはからい、世に公にする積りに候得共せうらんども、其前一応御覽に入れざるも不本意と存じ、写し壹本態いっほんわざと差出候。御閑暇の節御一読も被下候は、本懐の至に奉存候。》

返事がなかつたからであらうか、読み終つた頃と思つたからであらうか、論吉は九日後の二月五日に意見を求める書簡を送つてゐる。

《拜啓仕候。陳は過日瘠我慢のの説と題したる草稿一冊を呈し候。或は御一読も被成下候なしくだされ哉、其節申上候通り、何れ是は時節を見計いす、世に公にする積りに候得共、尚熟考仕候つかまりまへに、書中或は事実の間違は有之間敷哉これあるまじき、又は立論之旨に付御意見は有之間敷哉、若しこれあらば無御伏臆被仰聞被下度、小生の本心は漫みだりに他を攻撃して楽しむものにあらず、唯多ただ年来心に積然たらざるものを記して輿論よろんに質ただし、天下後世の爲めにせんとするまで

の事なれば、当局の御本人に於て云々の御説もあらば拜承致し度、何卒御漏し奉願候。》

この書簡を受け取った勝、榎本は返事を出した。今は、勝の書簡のみを引く。

《從古当路者古今一世之人物にあらざれば、衆賢之批評に当る者あらず。不計も拙老

先年之行為に於て御議論数百言御指摘、実に慙愧に不堪ず、御深志 忝存候。

行蔵は我に存す、毀譽は他人の主張、我に与からず我に関せずと存候。各人え御示御

座候とも毛頭異存無之候。御差越之御草稿は拜受いたし度、御許容可被下候也。》

二月五日の勝、榎本宛の書簡の末尾に「彼の草稿は極秘に致し置、今日に至るまで二、三親友の外未だ誰にも見せ不申候」とあつて、一月二十七日に勝、榎本に文を示してから十日の間、「二、三親友の外」は「瘖我慢の説」は誰にも見せてはゐなかつた。では、この「二、三親友」とは誰かといふと、一人は、軍艦奉行を務めた木村芥舟で、万延元年（一八六〇）に日米修交通商条約批准のためアメリカに使節団が派遣される際、諭吉の懇願を容れて派遣団の一行に諭吉を加へた人で、幕府瓦解後は隠居した。今一人は、箱館奉行、外国奉行を務めた栗本鋤雲で、旧幕のとき、幕命によりフランスに行った際、維新の報に接して帰国し、以後徳川の遺臣として終始節を変じなかつた人である。維新後隠居してゐた鋤雲のもとを若かりし島崎藤村が幾度も訪ねてゐる。鋤雲について藤村は「自らの過去を完全に葬らうと」

した人だと語つてゐます。木村は論吉より四歳上であり、栗本は十三歳年長である。

岩波の福澤論吉全集第十八巻の書簡集に論吉が勝、榎本に『瘠我慢の説』についての意見をもとめた書簡を書いた二日後の二月七日に栗本に宛てた書簡が載つてゐる。(そこに「註」があつて、「我々の見た資料は福澤の真筆とは思はれない。しかし写本の一種と見做してこゝに採録する」とある。つまり、全集の編者は、この栗本宛書簡について、書体は福澤本人のものではないが、写しであり、書かれた内容は事実であると見たわけである。ここに矛盾が生じる。二月五日の勝榎本宛書簡に、「今日に至るまで二、三親友の外未だ誰にも見せ不申候」とあるが、この「二、三親友」とは木村、栗本を指すのは間違ひない。しかし、栗本へは二月七日に贈つてゐるのだからをかしなことになる。論吉は勝、榎本の外は木村と栗本にしか見せるつもりはなかつたのだから、「今日に至るまで」云々と書いたのだと解しておく。)左に引く。

《(前略) 陳ば拙著瘠我慢の説、此に添へ貴覽に入れ御高評を仰ぎ候。然し是れは勝榎本両君其他二、三の親友に見せたるのみなれば、成るだけ秘密に致し、他人へ御話し被下間敷候。孰れ両三日の内に罷出て万縷可申述候。》

論吉は約束した「両三日の内」かは判らぬが、おそろくさうであらう、栗本を訪ねた。栗本はこの年七十歳で視力も衰へて物を見るもすこぶる難儀してゐたから、論吉は文の趣旨を

語り、当分は公表しない考へだから人には示さない、あなたと木村のみに示す、と言つた。栗本は非常に喜び、よくも書いてくれたと応じた。

その栗本と昵懇じつこんの間柄であつた人に、水戸の出身で、仙台の「奥羽日日新聞」の社長友部伸吉がゐた。栗本は上京して来た友部に「瘠我慢の説」を見せた。友部は、一読、非常に感激して、ゆつくり見たいと言つて借り受けて持ち帰り一夜の内に全文を写し取つた。そして「奥羽日日新聞」に、ある古本屋で珍しい本を発見した、と前書きして、福澤、勝、榎本の名も欠字にして、毎日少しづつ掲載した。掲載は明治二十七年前後とも、三十年頃とも云はれてゐます。二十七年とすると、栗本は明治三十年、勝は同じく三十二年、榎本は同じく四十一年に死にますから、関係者はみな生きてゐました。三十年とすると栗本が死んだ年になります。

仙台は、佐幕の地でしたから、『瘠我慢の説』は大評判になり、一、二、三の新聞に転載されることになつたといふことです。このことは福澤の耳にも入りました。福澤は意外にも思ひ、不興の体であつたさうです。明治三十三年冬、都下の雑誌（『日本』）や新聞（『日本人』）にも栗本たちの間で伝へられたものだといつて、『瘠我慢の説』は掲載された。それは誤字脱字もあつて、福澤もやうやく公表に踏み切ることに決した。明治三十四年一月一日と三日の両

日に勝と榎本とのやり取りの書簡も合はせて福澤の主宰する「時事新報」に掲載された。

『瘠我慢の説』——徳富蘇峰の反論——

すると、「国民新聞」に勝と親交が深く、明治二十三年から六年ほど赤坂榎坂（現在の港区）の勝邸内の借家に家族ともども住んだ徳富蘇峰が、同月十三日に「瘠我慢の説を読む」といふ反論を書いた。

「国民新聞」は蘇峰の主宰する新聞である。蘇峰は『瘠我慢の説』に「枉まぐ可べからざる気骨と、燃ゆるが如き熱火」を感じた。

蘇峰が知り得た感じでは世間は概して論吉の議論に同感を示してゐるやうであつた。蘇峰は言ふ、

①「国民が緩急に際し、利害得喪を度外視して、国家と存亡とんを俱ともにするの精神は、実に大切なるもの也。若し之を称して瘠我慢と称せば、瘠我慢亦また大切なるもの也。吾人は此点てんに就つて、福澤氏と二論なき也。但ただ此の前提よりして、直に勝伯の江戸城引渡に応用し、勝伯の措置を目して、国家万世の士風を壊敗したりと結論するに到りては、頗すこぶる其その

見解を殊にす。》

続いて、世に江戸無血開城といはれる、勝の不戦解城策を論じる。

《若し仮りに福澤氏の注文通りに、^⑤勝伯が徳川方の大将となり、官軍と邀へ戦ひたりとせよ。其の結果は如何になる可きぞ。人を殺し、財を散ずるが如きは、眼前の禍に過ぎず。若しそれ真の禍は、外国の干渉にあり。是れ勝伯が当時に於て、最も憂慮したる点にして、吾人は之を当時の記録に徴して、実に其の憂慮の然る可き道理を見る也。此の如き情勢は、其の実地を目撃したる福澤氏其人こそ、寧ろ最も能く詳悉す可き理由あるにあらずや。当時幕府の進歩派小栗上野介の輩の如きは、仏蘭西に結び、其の力を借りて、以て幕府統一の政を為さんと欲し、薩長は英国に倚りて、之に抗し、互ひに犄角の勢をなせり。而して露国亦た其の虚に乗ぜんとす。其危機実に一髪と謂はざるを得ず。若し幕府にして戦端を啓かば、其の底止する所、何の辺にある可き。是れ勝伯が一身を以て、万死の途に馳駆し、其の危局を拾収し、維新の大業を完成せしむるに余力を剩さざりし所以にあらずや。》

蘇峰は諭吉に後れること二十八年の文久三年（一八六三）の生まれだから幕末の情勢は「当時の記録に徴して」知るしかなかったが、海舟、諭吉は「其の実地を目撃した」人で

あつた。海舟の『氷川清話』に、

《福澤がこの頃、瘠我慢の説といふのを書いて、おれや榎本など、維新の時の進退に就いて攻撃したのを送つて来たよ。ソコで「批評は人の自由、行蔵は我に存す」云々の返事を出して、公表されても差支さしつかへない事を言つてやつたまでサ。

福澤は学者だからネ。おれなどの通る道と道が違ふよ。つまり「徳川幕府あるを知つて日本あるを知らざるの徒は、まさにその如くなるべし、唯百年の日本を憂ふるの士は、まさにかくの如くならざるべからず」サ。》

と語つてゐる。諭吉が「徳川幕府あるを知つて日本あるを知らざるの徒」でないことは、諭吉が幕府の依頼を受けて外交文書の翻訳を手がけ、異国との交際の最前線で切齒扼腕したことからも、また先に引いた、『瘠我慢の説』の文をみれば、また諭吉の論敵であり勝の賛同者である蘇峰が「瘠我慢」の精神について傍線④のやうに表現したことからも、解るだらう。しかし、蘇峰は勝に学ぶところが多かつた人だから、海舟の「行蔵」が「百年の日本を憂ふる」ところから発してゐたことはよくわかつてゐただらう。それが「瘠我慢の説を読む」を急ぎ書いて天下に示した動機であつたであらう。

「瘠我慢の説に対する評論に就て」

この「国民新聞」に一月十三日に載つた蘇峰の文の大意を聞いた論吉は門下生の石河幹明に口述した談話を「時事新報」に発表した。論吉はかねてより見聞した幕末外交の實際を書き残しておきたいとの志をもつてゐたが、今は蘇峰の文の誤りを正すために、その記憶にあるところの一端を語つたのである。この「瘠我慢の説に対する評論に就て」は一月二十五日の「時事新報」に発表されたが、この日の夜に、論吉が二度目の脳溢血に斃れて九日後（二月三日）に死んだので、文筆に生きた論吉の最後の仕事となつた。最初の脳溢血は明治三十一年九月のことで、一時危篤状態におちいつた。三年四か月ぶりの再発であつた。

「瘠我慢の説に対する評論に就て」の冒頭に論吉は言つてゐます。

《去る十三日の国民新聞に「瘠我慢の説を読む」と題する一篇の評論を掲げたり。之を一読するに、惜む可し、論者は幕末外交の真相を詳にせざるがために、折角の評論も全く事實に適せずして、徒に一篇の空文字を成したるに過ぎず。》

と断じて、先にわたしが触れた、「勝伯が徳川方の大将」云々の傍線⑤の文を引いて、これを「評論全篇の骨子」と認めて、ここに焦点を当てて、駁論を進める。

《抑も彼の米国の使節ペルリが渡来して開国を促したる最初の目的は、単に薪水食料を求むるの便宜を得んとするに過ぎざりしは、其要求の個条を見るも明白にして、其後タウンセント・ハリスが全権を帯びて来るに及び始めて通商条約を結び、次で英露仏等の諸国も来りて新条約の仲間入したれども、其目的は他に非ず、日本との交際は恰も当時の流行にして、只その流行に連れて条約を結びたるのみ。通商貿易の利益など最初より期する所に非ざりしに、おひおひ日本の様子を見れば案外開けたる国にして、生糸その他の物産に乏しからず、随て案外にも外国品を需用するの力あるにぞ、外国人も貿易の一点に注意することと為りたれども、彼等の見る所は只是れ一個の貿易国として、単に其利益を利せんとしたるに過ぎず。素より今日の如き国交際の關係あるに非ざれば、大抵の事は出先きの公使に一任し、本国政府に於ては只報告を聞くに止まりたる其趣は、彼の国々が従来未開国に対するの筆法に徴して想像するに足る可し。左れば各国公使等の挙動を窺へば、國際の禮儀法式の如き固より眼中に置かず、動もすれば脅嚇手段を用ひ、些細の事にも声を大にして、兵力に訴へて目的を達す可しと公言するなど、其乱暴狼藉驚く可きものあり。外国の事情に通ぜざる日本人は、之を見て本国政府の意向も云々ならんと、漫に推測して恐怖を懷きたるものもありしかども、^⑥其挙動は公使一個

の考かんがえにして、政府の意志を代表したるものと見る可べならず。即ち彼等の目的は時機に投じて恩威並び施し、飽くまでも自国の利益を張らんとしたる其中には、公使始め之に付随する一類の輩にも種々の人物ありて、此機会に乗じて自から利し自家の懐ふところを肥やさんと謀りたるものも少なからず。》

論吉といふ人は、アメリカに二度わたり、ヨーロッパのフランス、イギリス、オランダ、プロシア、ロシア、ポルトガルなどに足を踏み入れ、先ほども触れましたが、幕府の翻訳方に勤めて外交文書の翻訳もした人ですから、外交の何たるかを知つてゐました。論吉がいふ、「(公使らの)挙動は公使一個の考にして、政府の意志を代表したるものと見る可べならず」(傍線⑥)については、勝はどうだかわかりませんが、蘇峰には驚きであつたでせう。それだから、論吉が蘇峰の評論を「全く事實に適せずして、徒に一篇の空文字を成したるに過ぎず」と断じたのです。

論吉は「自から利し自家の懐を肥や」した外交官としてフランスの駐日公使のレオン・ロツシュ(論吉はレオン・ロセツと表記してゐる)を挙げて述べてゐますが、今は時間の限りもありますから割愛して、外国政府が日本の内乱に乗じて兵力を用ひて干渉せんとする意志を懐きたることは到底思ひもよらざることとして、論吉が挙げた生麦事件(文久二年

（一八六二）と下関砲撃事件（文久三年、元治元年）の箇所を引きます。

《彼の生麦事件に付き英人の挙動は如何と云ふに、損害要求の爲めとて軍艦を品川に乗入れ、時間を限りて幕府に決答を促したる其時の意気込みは非常のものにして、彼等の言を聞けば、政府にて決答を躊躇するときは軍艦より先づ高輪の薩州邸を砲撃し、更らに浜御殿を占領して此処より大城に向て砲火を開き、江戸市街を焼打にす可し云々とて、其戰略さへ公言して憚からざるは、以て虚喝に外ならざるを知る可し。左れば米国人などは、一個人の殺害せられたる爲めに三十五万弗の金額を要求する如き不法の沙汰は未だ曾て聞かざる所なり、砲撃云々は全く虚喝に過ぎざれば、断じて其要求を拒絶す可し、仮令ひ之を拒絶するも真実国と国との開戦に至らざるは請合ひなりとて、頼りに拒絶論を唱へたれども、幕府の当局者は彼の権幕に恐怖して直に償金を払ひ渡したり。此時、更らに奇怪なりしは仏国公使の挙動にして、本来その事件には全く関係なきに拘らず、公然書面を政府に差出し、政府もし英国の要求を聞入れざるに於ては、仏国は英と同盟して直に開戦に及ぶ可しと迫りたるが如き、孰も公使一個の考にして、決して本國政府の命令に出でたるものと見る可らず。

彼の下ノ関砲撃事件の如きも、各公使が臨機の計ひにして深き考ありしに非ず。現に

後日彼の砲撃に与りたる或る米国士官の実話に、彼の時は他国の軍艦が行かんとするゆゑ強ひて同行したるまでにて、恰も銃獵にても誘はれたる積りなりしと語りたることあり。以て其事情を知る可し。

右の如き始末にして、外国政府が日本内乱に乗じ兵力を用ひて大に干渉を試みんとするの意志を懐きたるなど、到底思ひも寄らざる所なれ云々》

仮に一步を譲り、幕末に外国干渉の憂ひがあつたとすれば、徳川幕府転覆のときではなく、長州征伐のときであつたらう、と諭吉は言ひます。長州征伐は、同時代を生きた諭吉から見、幕府創立以来の大騒動であつて、この失敗は幕府の「積威」が失墜し、大名の中にはこれより幕命を聞かなくなつてしまつたものがあつた。この大騒動こそ外国の介入の絶好のチャンスであつたにもかかはらず、彼らの関心は長州が勝つも徳川が負けるも少しも心に關せず、その関心はただ利益の一点であつた。

また、維新後にあつても、外国の干渉の機はあつた。それは明治十年の西南戦争である。諭吉の言葉をかりれば、「薩兵の勢、猛烈なりしは、幕末に於ける長州の比に非ず。政府は殆んど全国の兵を挙げ、加ふるに文明精巧の兵器を以てして尚ほ容易に之を鎮圧するを得ず、攻城野戦凡そ八箇月、纔に平定の功を奏した」といふありさまであつたにもかかはら

ず、「外国の挙動は如何と云ふに、甚だ平氣にして干涉」などなかった。他にも論吉はいくつか国内騒亂を回顧して外国の干涉がなかったと語つてゐます。

では、なぜ勝は、外国干涉の恐れあり、故に内亂はしてはならぬといふ「独り自から架空の想像を逞たくましうして」、「無益の挙動を演じたるか」。論吉の推測は以下のとおりである。

《当時人心激昂げつごうの際、敵軍を城下に引受けながら、一戦にも及ばず徳川三百年の政府を穩おだやかに解散せんとするは、武士道の変則、古今の珍事にして、之を断行するには非常の勇氣を要すると共に、人心を籠絡ろうらくして其激昂を鎮撫するに足るの口実なかる可らず。是れ即ち勝氏が特に外交の危機云々を絶叫して、其声を大にし以て人の視聽しやうとうを聳動しやうどうせんと勉めたる所以に非ざるか》

忘れたこと或いは忘れさせられたこと

わたしは、カズオ・イシグロ氏のところで、私たちは「記憶」によつて生きていける、と話しました。『蘭学事始』で論吉は玄白から発した洋学の流れの先端に、今私たちは生きてゐると切實に感じてゐました。明治以降、平成の今に至るまで、洋学の時代です。つまり私

たちの一方の源流は記紀万葉にあります。今一方の源流は玄白の『蘭学事始』にあるので、論吉が『蘭学事始』の出版にこだはったのは、ここに文明開化の世に生きる日本人の本があることを日本人の記憶に届けておきたかったのです。民族の記憶は民族の言葉に込められてゐますから。『瘠我慢の説』を書いたのも、民族の歴史の一齣ひとしほを正しく記憶に残しておきたかったからです。「瘠我慢の説に対する評論に就て」の末尾に次のやうにあります。

《論者（徳富蘇峰）の如き、当時の事情を詳つまじうにせず、軽々他人の言に依て事を論断したるが故に、其論の全く事実^{じじつ}に反するも無理ならず。敢て咎とがむるに足らずと雖も、之を文字に記して新聞紙上に公にするに至りては、伝へ又伝へて或は世人を誤るの掛念けねんなきに非ず。聊いささか筆を勞して当時の事実を明にするの止む可らざる所以なり。》

「事実^{じじつ}に反する」ことを根拠とした蘇峰の文が国民新聞に載りましたが、咎める必要もないかもしれないとは思ひながら、それが伝へられ伝へられして世に流布する「掛念」があるから、今は自分は石河幹明に口述して文を成さしめたといふ。これも、最後になってしまひましたが、体験した歴史を言葉に留めようとした論吉の行為でした。

先に触れました栗本鋤雲のことですが、栗本の手元に残った『瘠我慢の説』の写本が回りは、大正四、五年頃に慶応義塾の図書館に納まりました。その栗本の写本には、文中

随所に朱筆を以て評語が書き込まれてゐます。読みながら心搏うたれた栗本の心の烈しく波打つさまが偲おもばれます。栗本の評語は榎本に少なく、勝に多く、またその文は長い。いくつか例を挙げると、『瘠我慢の説』に「敵」といふ字が多用されてゐますが、論吉は「敵国の語、或は不穩なり」として説を作す者もあらんなれども、当時の実際より立論すれば敵の字用ひざるべからず」と断じてゐます。栗本はその箇所の「敵」の字の横に◎を付けて、「敵の字、一篇の眼目にして軽々に看過すべからず」と感想を書き込んでゐます。また、先の傍線②の文の箇所に、「読で此こゝに到り覚ええず声を放つて痛哭す」とあります。栗本は戦ひたかつたのです。勝つか負けるかは二の次で、敵が近代の最新の火器を備へた大軍であつて、幕軍は「蠢しゆん爾じたる昆虫」であつても、「足を張て抵抗の状」を示したかつたのです。この鋤雲の言葉は、わたしたちは忘れてしまつたか、あるいは忘れさせられてゐるのではないでせうか。この鋤雲の言葉もわたしたちは記憶に留めるべきだと思ひます。

記憶きこ しておくといふ使命―再びカズオ・イシグロ氏―

わたしは今日の話のカズオ・イシグロ氏から始めました。だから、カズオ・イシグロ氏の言

葉で締めくくりたいと思ひます。イシグロ氏がノーベル文学賞を受賞する前に書いた最後の長篇は『忘れられた巨人』です。そこから引きます。

《過去を確かめなければ周囲に問うてみればよい、と思うかもしれない。なぜ尋ねてみないのか、と。だが、それは言うほどやさしいことではない。まず、この村では過去がめったに語り合われぬ。タブーというのではなく、ただ、過去を語り合うことに意味が見出されない。村人にとって、過去とはしだいに薄れていき、沼地を覆う濃い霧のようになつていくもの。たとえ最近のことであっても、過去についてあれこれ考えるなど思ひもよらないことだつた。》(土屋政雄訳)

この文について、少し説明があつた方がいいでせう。有難いことに、イシグロ氏本人の説
明があります。

《『忘れられた巨人』は、竜が吐く忘却の霧に覆われ、人々はみな記憶をなくしているといふ物語です。現代においては、たくさんの国家や民族に、このような霧があるように感じます。》([an・an] 1015)

私たちは、この世を覆う「忘却の霧」に包まれてゐるのです。「霧」は濃くもなり淡くもなりますが、確かに在るのです。実を申しますと、今日の私の話は、『忘れられた巨人』か

ら起こされたものなのです。若い人と話す機会はいくらもありますが、話してみても、今の世の風潮が大きいかかはってありますが、若い人は過去、言葉を換へれば、歴史についてめったに語らないのです。語り合ふ意味が見出せないのです。だが、過去、歴史の意味はこちらから見出すものなのです。イシグロ氏も論吉もさうしてゐました。いや、さう思ひ知らされて来たのです。

ここに注意しておきたいのは、わたしの今日の話の眼目はなぜ過去が語り合はれなくなつたかではありません。つまり、「霧」を吐く「童」の正体について語らうとしたのではなくありません。それについては別に本（『江藤淳氏の批評とアメリカ』）を書きました。今日は過去を語る喜び、あるいは過去を記憶しておくといふ使命といふものを語つたのです。皆さんが論吉の文章をどう読むか、それを楽しみにしてゐます。

言ひ忘れてゐることがあります。イシグロ氏の『忘れられた巨人』（原題 THE BURIED GIANT）の「巨人」とは「記憶」のことです。終ります。

講義

— 古典講義 —

改革者の使命—芭蕉と子規—

(公社) 国民文化研究会参与

折田 豊生



- 一 はじめに
- 二 芭蕉の俳諧改革
- 三 子規の俳句改革
- 四 古典とは
- 五 をはりに

一 はじめに

今日の午後は短歌創作の時間があり、思ったこと感じたことを三十一文字の短い言葉で表現することの難しさを、あらためてお感じになったことだらうと思ひます。

もし、これが十七文字だったらどうなのでせう。

角川文化振興財団の「短歌年鑑」と「俳句年鑑」によれば、現在、短歌雑誌が約五百誌、俳句雑誌が約六百誌あり、短歌結社や歌人団体所属者が二千五百人、俳人と称される人々が二千三百人ゐるとされてゐます。

これに、それぞれの愛好者を加へると膨大な数となり、さらにこれを歴史的に見るとなると、遺された短歌や俳句の数は、天文学的な数字になるでせう。

言葉の修養を図らうとするのであれば、これらの文化遺産を活用しない手はありません。短歌と俳句を並行して学ぶことは、修辞の奥行きを深めるために、むしろ必要な取組みではないかとさへ思はれるのです。

○

茄子の牛乗るは兵長十九歳

これは、八年前に亡くなった俳優、山田吾一さんの俳句です。山田さんは所謂「遊俳」（俳句愛好者）ですが、素晴らしい感性を持った人だったと思ひます。

この句のキーワードは「茄子の牛」です。この五文字で、お盆の最後の日に、作者が仏前にゐること、そして、茄子の牛に乗ってゐる人への限らない哀惜の念を持ってその茄子の牛を凝視してゐることが分かります。ひと昔前まで、お盆になると、仏前に胡瓜の馬と茄子の牛をお供へする風習がありました。これは、御先祖様があの世から家の仏壇にお帰りになるとときには胡瓜の馬に乗って早く帰って来てほしい、また、お盆が終つてあの世にお帰りになるときは茄子の牛に乗ってゆっくり帰って行ってほしい、との意味が込められてゐるのです。

兵長とは、兵卒の最も上級の階級です。山田さんは終戦時十二歳ですから、十九歳で兵長を務めたその人は、恐らくお兄さんなのでせう。お盆が終つて御先祖様の御霊があの世にお帰りになる日、凜として優秀であられた憧れのお兄さんの面影は、仏前の茄子の牛の上にあります。ありありと見えたに違ひないのです。若くして国のために命を捧げた兄、その兄の犠牲の上に享受されてゐる平和や家族の生活、それらを思ふときの限らない哀惜と感謝、そのやうな渾然とした痛切な思ひが、この僅か十七文字に込められてゐるのです。



では、俳句といふものは、どのやうにして生まれ、現代に至ってゐるのか。

○

俳句の成立ちを知るために、和歌、連歌、俳諧連歌の歴史を大まかに辿ります。

和歌は、飛鳥奈良時代から、漢詩に刺激され、仮名の発達に伴ひ、貴族社会を中心として多くの勅選歌集が出されて発展していきます。貴族社会から武家社会を経て庶民にも広まっていくのですが、その過程で、平安時代に連歌が生まれてきます。

連歌は、和歌の上の句と下の句を、それぞれ別人が詠むといふ遊戯的な文芸です。最初の人が詠んだ五七五の句を鑑賞しながら、次の人がそれに関連する七七の句を接ぎ、更に次の人がその内容を踏まへて五七五の句を付け足す。それを何度も繰り返し、

共同で一つの歌を創作するもので、「座の文芸」とも呼ばれてゐます。

連歌が発展していくうちに、庶民の間で、遊戯性を高めた集団文芸として俳諧連歌が生まれてきます。連歌では、大和言葉（和語）しか使へない制約がありました。庶民の文芸です。漢語、俗語も自由に使用されることとなります。

室町時代になって、山崎宗鑑と荒木田守武が興隆の道を開き、江戸時代になると、立派な庶民文学として一つのジャンルが確立されていきます。この頃には、俳諧が職業として成り立つやうになり、無数の宗匠（師匠）が出現します。松尾芭蕉もその一人です。

明治時代になると、西欧文学に刺激を受けた若い世代を中心に、俳諧にも次々と改革運動が起ります。伊予派、椎の友社、秋声会、筑波会など、実に多くの青年達が、この伝統文芸の改革に名乗りを上げるのです。

その中で、最も大きな功績を上げることとなったのは正岡子規を中心とする伊予派で、彼らは、俳諧の「発句」に着目し、新たな文学のジャンルとして独立させ、これを「俳句」と呼ぶやうになりました。「俳句」といふ言葉は、明治時代に生まれたのです。

駆け足で和歌、連歌、俳諧連歌の歴史を辿ってきましたが、資料に示したやうに、この狭い分野の歴史を辿るだけで、実に多くの人々が登場し、そこに実に複雑な関りがあること

が分かります。

この滔々たる流れを踏まへて、俳諧、俳句といふ十七文字の文芸に命を懸けた二人の人物にスポットを当てながら、俳句を学ぶ意義と課題について考へてみたいと思ひます。

二 芭蕉の俳諧改革

松尾芭蕉は、正保元年（一六四四）、伊賀上野（現在の三重県伊賀市）で生まれます。幼名は金作、後に宗房と改名します。

宗房は、十九歳で伊賀藤堂家の三男良忠の近習となります。良忠が俳諧を学んでゐたことから、宗房も俳諧を始めたやうです。良忠の俳諧の師匠は松永貞徳（貞門派俳諧の祖）や北村季吟でしたから、宗房が初めて学んだ俳諧は、貞門派であつたことになります。

宗房が二十三歳のとき、良忠が二十五歳の若さで他界します。藤堂家を辞した宗房は、暫く伊賀で俳諧の修行を続けた後、二十九歳で新天地江戸へ下向します。

三十一歳のとき、北村季吟から秘伝書「埋木」の伝授を受けますが、翌年、西山宗因が率いる現代的な談林派の俳諧に惹かれていきます。この頃、「桃青」と号し、江戸の俳諧師

達と積極的に交はり、自らのあるべき俳諧の道を考究します。そして、三十四歳で俳諧の宗匠として独立するのです。

しかし、数年を経て、突然、街外れの深川に隠棲します。五年近く隠棲したこの時期こそ、後に蕉風と呼ばれる独自の俳諧が醸し出された、必死の模索の時期だったのでせう。

桃青から芭蕉へと生まれ変はっていく、この深川時代に最も大きな影響を与へたのは、川向ふに仮住まひしてゐた鹿島根本寺（茨城県）の和尚、仏頂禪師です。芭蕉は偶然知り合つたこの禪僧のもとで、朝に夕に参禅して禅の奥義を究め、漢学や老荘思想を学びます。

そして、その後の、四十一歳から五十一歳までの概ね十年間、旅から旅を重ねる中で、それまで娯楽の対象でしかなかった俳諧を、芸術の世界へ導くといふ大事業に挑戦していくのです。それは、自分自身の生き方を世に問ふ、切実な自己との闘ひでもあり、そこに、常に意識されてゐたのは、芭蕉の言葉で言へば、「見る処花にあらずといふ事なし。思ふ所月にあらずといふ事なし。像花かたちにあらざる時は夷狄いてきにひとし。心花こころはなにあらざる時は鳥獸たぐひに類す。夷狄を出で、鳥獸を離れて、造化ぞうかにしたがひ造化にかへれとなり」〔笈の小文〕貞享四年一六八七年・四十四歳とあるごとく、「風雅の誠」の探求といふ一念でした。

造化とは、天然自然のことです。芭蕉が遺した数々の文章を辿ると、一般に言はれるや

うに、漢学や禅宗、老莊思想の影響を見ることはできるのですが、それを知るだけで果たして、芭蕉の生き方に迫ることができるのでせうか。

○ 芭蕉が門人に説いた俳諧の基本は、「不易流行」です。「不易」とは永遠不変であること、「流行」とはその時々に応じて変化することであり、「不変の真理を知らなければ基本が解らず、時代の流れを知らなければ新たな進展がない」といふ意味になるのでせうが、この言葉については、服部土芳の「三冊子」や向井去來の「去來抄」に、繰り返し、その評釈が述べられてゐます。それだけ、門人達にとつても重大な課題であつたことは確かです。

また、土芳の「三冊子」に、「師のいはく、俳諧の益は俗語を正す也。つねに物をおろそかにすべからず。此事は人の知らぬ所也。大切の所也と伝へられ侍る也」といふ一文があります。和歌等の歴史で触れたやうに、俳諧は庶民の文芸ですから、俗語も使用します。

蚤虱馬の尿しとする枕もと（「おくのほそ道」芭蕉四十六歳）

この句は、一見、風雅の道にはほど遠い印象を受けますが、作風は、核心を外さずに具体的に表現するといふ和歌創作の基本と全く同じです。そして、余韻の中に芭蕉と曾良の清貧な旅の様子がそこはかとなく伝はってくる。一読するだけで読者に忘れ難い印象を与へる

力を持たせることが大事だったし、そこに、「俳諧の益は俗語を正す」といふ芭蕉の意図と工夫があつたことを思はされます。

また、前述の「三冊子」に、「高く心を悟りて俗に帰るべし」との教へなり。「常に風雅の誠を責め悟りて、今なす処俳諧に帰るべし」と言へるなり。常、風雅にゐる者は、思ふ心の色、物と成りて、句姿定るものなれば、取る物自然にして子細なし。心の色うるはしからざれば、外に言葉を巧む。これすなはち、常に誠をつとめざる心の俗なり」といふ芭蕉の教へが記されてゐます。「常に風雅の誠を究めようといふ気持ちさへあれば、いかに日常的な言葉でも風雅の道に沿はないものはない。そのやうな心で詠まれた俳諧には、頭でひねくり回したところがなく、自然である。逆にその心がなければ、風雅を装ふ技巧に走らざるを得なくなるだらう」といふ意味ですが、短歌創作の経験を振り返ると耳の痛い言葉です。さて、ここで一つ意識しておかなければならないことがあります。

風雅の誠を究めるのには、憧れの人であつた西行のやうに歌道を修めるのが近道であらうと思はれるのですが、芭蕉は、和歌ではなく俳諧を選びました。それは何故か。

芭蕉の俳諧は、平たく言へば、「俗の中の風雅」、つまり、庶民生活における人間らしさの探求です。「笈の小文」にある、「(俳諧を)終に生涯のはかりごととなす」といふ言葉から

も、俗にまみれた現実人生ではあるけれども、それに背を向けるのではなく、むしろそれを肯定しながら、なほ風雅の道を求めるといふ向上心に満ちた生き方が偲ばれます。しかも、風雅の心さへあれば、俗語でさへ、詩歌の言葉として生まれ変はらせることができる。そのやうな試みにも、芭蕉の現実肯定の濃やかさが表れてゐるのです。

俳諧革新を意図する芭蕉の句を読むと、生と死の問題に、強く意識を向けてゐたことが分かります。

古池や蛙かはづ飛びこむ水の音（貞享三年・四十三歳）

この句は、芭蕉の存在を一気に世に知らしめることになつた傑作ですが、ここには、古池といふ「永遠」と水の音といふ「一瞬」の対比による人生の儚さが、極めて卑近な素材によつて表現されてゐます。これまで最も親炙され、無数の論評の対象とされた句です。

閑けさや岩にしみ入る蟬の声（元禄二年・四十六歳）

この句が詠まれた立石寺りつしやくは、山形県の山奥にある天台宗のお寺です。名前のとおり、寺全体が岩山になつてゐます。その岩山の随所に洞穴があつて、そこは墓になつてゐる。つまり、巨大な岩山が寺でもあり、墓場でもある。幾多の蟬の声は、そのまま数多の人々の霊を

想起させるものであり、「岩」とはあの世そのものでせう。そこで聞く蟬の声がどのやうに聞こえるのか、想像してみてください。

この道やゆく人なしに秋の暮れ（元禄七年・五十一歳）

事実上の辞世の句と言はれてゐます。「この道」とは、勿論、芭蕉が生涯を賭けて追求してきた俳諧の道にほかなりません。

句は、目前に迫る死を意識しながら、門人は多くゐるが、気がつけば、自分と同じ道を行く者は見えない。孤高の境地に達した者の宿命と言へばそれまでですが、「秋の暮れ」といふ末句は、遠くない死を意識した名状し難い諦観といふべきなのでせう。

芭蕉はこの頃、門人の増加に伴ふ組織上の混乱や門人同士の争ひが各地で生じ、その収拾に気を揉んでゐました。死の直前の大阪への旅も門人間の争ひを仲裁するためでしたが、そのやうな旅でも、各地の門人達の求めで句会を開き、無理を重ねたのでした。

旅に病で夢ハ枯野をかけ廻る

死の四日前に病床で詠まれた句です。多くの解説書が、「枯野をかけ廻る夢」を見たのだと説明してゐますが、「かけ廻る」が完了形や過去形でなく、現在形の表現になつてゐるのはなぜか、一考すべき問題です。芭蕉の生涯を顧みるとき、終焉の間に漏らしたこの感懐

は、決して軽々しいものではないでせう。芭蕉は恐らく寝てなどみない。夢にうなされる重篤な病床であつたかもしれないが、少なくともこの句を認めたときの思ひは、なほ生きて果たすべき理想の境涯が明確に意識されてゐた筈です。それは、謂はば、「歌道」に比肩する「句道」ともいふべきものではなかつたのか。私は、さう考へてゐます。

芭蕉亡き後は、主要門人の主導権争ひや対立が起こり、江戸、美濃、尾張、近江、伊賀、加賀等、各地にあつた蕉門の拠点で、それぞれ独自の展開が図られます。

蕉風俳諧が世俗化される中で芭蕉は神格化され、職業化した宗匠達の俳諧は、風雅の道とはほど遠い単なる生活の具と化していきます。芭蕉の俳諧に忠実であつた向井去来や服部土芳が芭蕉の語録を發行したりして、蕉風俳諧の引き締めに努めますが、もはや、その成果を上げることはできなかつたのです。

三 子規の俳句改革

芭蕉が没して二百年が経過し、明治時代を迎へます。

正岡子規は、慶応三年、四国松山に生まれます。母方の祖父大原観山は、松山藩の藩校明教館の教授を務める高名な儒学者でした。子規は、幼少より観山やその弟子達の教へを受け、十七歳で上京します。やがて東京帝国大学で哲学、後に国文学を学びますが、この間、井手真棹まごせに和歌を、大原其戎きじゆうに俳諧を学びます。子規は、伝統的な学問をベースとして、西欧化に伴ふ新時代の学問の双方を修めていくのです。

明治維新を経て、わが国の文化環境は一変します。西欧文化の流入はまさに激流でした。それに対して、明治の青年達は、驚くほど鋭敏に反応します。明治六年には「明六社」が発足し、森有礼や福沢諭吉らが華々しく啓蒙活動を展開します。坪内逍遙らを筆頭に西欧文学の翻訳も盛んに行はれ、広く読まれました。

子規も、勿論、このやうな風潮の中で西欧の文物に触れていくのですが、新たな文学を確立するための手段として、何故、伝統文芸である俳諧と和歌の革新に取り組んだのか。

子規が帝国大学の哲学科に入学したのは、荘子の思想に惹かれたからであると言はれてゐます。子規が、あの西洋化一辺倒の時代に東洋思想に目を向けてゐたと言ふことにも独自性を感じるのですが、何より、終生恩顧を受け、深く尊敬してゐた陸羯南くがかつなんといふ人物が及ぼした影響に注意を払はなければならないでせう。

陸羯南は、弘前藩の出身で明治時代を代表する言論人の一人です。明治二十二年、新聞「日本」を創刊し、性急な西欧化の思潮に警鐘を鳴らし、「国民精神の回復発揚」を掲げて言論活動を展開します。子規は、十七歳で陸に会い、十年後、二十六歳のとき新聞「日本」に入社するのですが、この間、陸の思想が子規に与へた影響は決して小さいものではなかつたと思はれます。

子規と陸との出会ひは、子規が上京の折に頼りとした八歳年長の叔父加藤恒忠（大原観山の三男・号拓川）の引き合はせによるものでした。

加藤は、極めて有能な外交官であり、司法省法学校（東大法学部の前身）で陸羯南や原敬と同窓となり、後にフランスに留学（パリ法科大学）、パリ駐在書記官になつた後、日仏条約改正等に尽力し、また、特命全権大使としてベルギーに駐在、後年、万国赤十字条約改正会議にも全権大使として出席してゐます。外務大臣林董と対立して外務省を辞任した後、衆議院議員、貴族院議員を歴任、その後、外交の場で辣腕を振るひ、晩年は、同郷の親友秋山好古よしふるらの要請を受けて松山市長となります。子規は、若い頃、政治家を夢見たと言はれますが、その動機は、多分に、この叔父への憧憬に因るものだったでせう。

子規の俳句改革は、数へ二十五歳のときの俳句分類からスタートします。そして、翌年、新聞「日本」に入社するや、俳句の改革論を「日本」に連載します。その冒頭・凡例中の「獺祭書屋俳話なるものは（略）俳句革新の曉鐘なり。」（※「曉鐘」は夜明けの鐘の音。明るい前途を暗示）といふ言葉は、まさに、当時の俳諧宗匠の重鎮、其角堂永機とその後継者其角堂機一に対する宣戦布告でした。彼らは、その名が示すとほり、蕉門第一の門人と謳はれた宝井其角の末流です。俳諧師が職業となつて以来、多くの家元が出現し嗣号の売買さへ行はれて、俳諧はいつしか芸術の域を遠く逸脱してゐたのですが、西欧文学に対する日本文学の価値が問はれてゐるときに、旧態然として省みるところのない伝統文化の担ひ手達を、子規は、どうしても見過ごすことはできなかつたのです。

子規は、その古色蒼然とした情性を覚醒させるために、先づ、神格化された芭蕉を叩くのが最良の方策であると考へます。とても俳句の専門家とは言ひ難い二十六歳の青年が、「芭蕉の俳句は過半悪句駄句を以て埋められ上乘と称すべき者は其何十分の一たる少数に過ぎず。否僅かに可なる者を求むるも寥寥晨星（※明け方の星）の如し」（「芭蕉雑談」と俳聖をこき下ろし、「あるいは芭蕉翁と呼び、あるいは芭蕉様と呼ぶこと、恰も宗教信者の大師様・お祖師様などと称ふるに異ならず。甚だしきは神とあがめて廟を建て、本尊と称して堂を

立つること、是れ決して一文学者として芭蕉を觀るに非ずして、一宗の開祖として芭蕉を敬ふ者なり。」(同前)と言ひ立てる様は、傍目には権威嫌ひの無謀な挙動と映つたかもしれません。

しかし、その内心は、「美術文学中、尤高尚なる種類に属して、しかも日本文学中尤之を欠く者は、雄渾豪壯といふ一要素なりとす。和歌にては萬葉集以前、多少の雄壯なる者なきにあらねど、古今集以後(実朝一人を除きては)毫も之を見る事を得ず。(略)和歌者流、既に然り。更に無学なる俳諧者流の爲す所、思ふべきのみ。而して松尾芭蕉は、独り此間に在て、豪壯の氣を藏め、雄渾の筆を揮ひ、天地の大觀を賦し、山水の勝概を叙し、以て一世を驚かしたり。」(同前)とあるやうに、芭蕉への敬愛の念が秘められてゐました。

○
子規の俳句革新の取組みは、単に宗匠俳諧を批判するだけでなく、自らがその理想の俳句を創作して見せることでした。

子規が俳句を作るに当たつて師表としたのは、江戸俳諧中興の祖・与謝蕪村です。それは蕪村が本来画家であり、俳諧におけるその視覚的表現は、子規が求める要素を総合的に持つてゐたためですが、子規が師と仰いだ蕪村は、往時、低俗化した俳壇を憂へ、芭蕉への回帰

を唱導した俳諧師でした。

子規は、後に画家・中村不折と出会い、その絵画的手法によって俳句と短歌の革新を成し遂げていくことに自信を深め、積極的に写生の実践を説き、その在り方を語ります。

「若鮎の二手になりて上りけり」(※若鮎が二つの群に分かれて川を上っていく様子。若鮎は同人一同の反映か?)は、子規が不折と出会ふ数年前に作った俳句ですが、これはすでに立派な写生俳句です。一般に、子規の写生の手法は不折から学んだと言はれてゐますが、不折の提案は、子規が本来抱いてゐた考へを裏付けるに過ぎなかつたのではないか、学んだといふより「我が意を得たり」といった受け止め方をしたのではなかつたか、私にはさう思はれてなりません。

また、「言文一致の内に不調和なるむづかしき漢語を用ゐるは極めて悪し。言葉の美を弄するは別に其体あり。写実に言葉の美を弄すれば写実の趣味を失ふ者と知るべし」(「叙事文」の一節には、「高く心を悟りて俗に帰るべし」と教へた芭蕉の姿を彷彿とさせるものがあります。

○
子規は、俳句革新の後、短歌革新に尽力します。往時の歌壇は、古今集以来の伝統形式

を重んじる桂園派が主流を占めてみました。歌論「歌よみにあたふる書」は「日本」に連載されますが、これまた、古色蒼然とした歌壇に対する強烈な挑戦状でした。

二十歳過ぎで罹患した結核は、病状が進行して次第に身体の自由を束縛していきます。手がけた事業を一代で終へることが難しいと見通した子規は、門人の高浜虚子に後事を託さうとしますが、拒否されてしまひます。自分の代で事業を終へなくてはならないと観念した子規は、その後、無理に無理を重ねる生活を強ひられることになったのでした。

「日本」に連載された随筆「墨汁一滴」や「病床六尺」の言葉は、一見楽天的とも見える文章の随所に痛々しさが滲んでゐて、読むに耐へないほどです。公開を前提としなかつた日記風の「仰臥漫録」の記述は、痛苦の有様が露骨に表現されてゐて猶更です。

「日本」への連載百二十七回を数へた「病床六尺」の最終原稿は、三十五歳で他界する日の二日前に書かれたのですが、陸羯南は、重病人を永年に互つて雇用し続け、その死の間際まで面倒をみました。それは、子規の類稀なる才能を評価してゐたことはもとより、親友、加藤拓川に対する信義を守り通したのであらうことも否定できない要因であつたらうと思はれてならないのです。

子規の死後、俳誌「ホトトギス」は一世を風靡し、高浜虚子は俳句界に君臨し、子規はやがて「俳聖」として神格化されていきます。「ホトトギス」は、家元となり、しかも世襲となつていくのですが、それは、子規が鉄槌を下した明治初期の俳諧宗匠達のやうでもありません。そのやうな中で、子規門下の河東碧梧桐らが次々に離反していきます。

根岸短歌会も、歌誌「馬酔木」「アカネ」を経て、「アララギ」により、伊藤左千夫らが、一時、隆盛期を築きますが、伊藤の死後、内部抗争や分裂を繰り返し、衰退していきます。

歴史は栄枯盛衰の繰り返しとは言へ、一定のレベルに到達したものは、やがて、無意味な権威化と墮落の危険に晒されていくことを、あらためて知らされる思ひがします。

四 古典とは

恩師小柳陽太郎先生は、御著書「日本のいのちに至る道」で、「芭蕉にとって俳諧とは矢張り動かすべからざる精神の態度であり、単なる文学の形式ではなかった。『細き一筋』と彼の目に映つた過去の巨匠達のだった道は、決して『東洋における文学の流れ』というやうに概括される普遍的な世界ではなかった筈である。それは自らの生涯を捧げて悔いること

のない唯一の、かけがえのない『ミチ』であった」（「古典教育をはばむもの」と述べてをられます。

その後が続けて、現代は生き方を照らす鏡として古典を見ることがなくなつたことを嘆いてをられるのですが、芭蕉や子規の生き方を辿ると、先人の言葉は単なる教養ではなく、そこに現れる「人」との強烈な関りの伝手であつたことが分かります。

吉田松陰が甥の玉木彦介に与へた「士規七則」の中に、「冊子を披繙せば、嘉言林の如く、躍々として人に迫る。顧ふに人読まず。即し読むとも行はず。苟に読みてこれを行はば、則ち千万世と雖も得て尽すべからず。噫、復た何をか言はん」といふ言葉があります。このはち切れんばかりの思ひが擱めなければ、「士規七則」を読んだことにはならないでせう。

また、松陰は、その著「講孟余話」において、「經書を読むの第一義は、聖賢に阿ねらぬこと要なり。若し少しにても阿る所あれば、道明ならず、学ぶとも益なくして害あり」とも述べてゐます。

古典とは、無数の人々に支持され敬仰されてきた先人の苦闘の跡を証する言葉であり、永い歴史の波に洗はれて選擢された砂金のやうなものです。

芭蕉が「かりにも古人の^{よだれ}涎をなむる事なかれ」と言ひ、子規も「只之を真似るをのみ芸とする後世の奴こそ気の知れぬ奴には候なれ」と言つたやうに、彼らは常に、先人に対する安易な妥協を戒めました。松陰の言葉も、古典に接するとき、最も留意しなければならぬ重要な要点として、決して忘れないやうにしたいものです。

五 をはりに

子規は芭蕉の生まれ変はりではないかと思はれるほど、この二人はよく似てゐます。

両者とも、高尚な課題を持って生き、世事に関して無欲であり、主張は鋭かつたが個我に執着せず、人間関係は開放的で許容性が高く、人の運に恵まれ、現世を肯定して自然に随順し、權威に盲従せず、厳しい宿命にもめげず果敢に自らの境地を開拓しました。そして、何より特筆すべきは、その志の大きさが他を圧して際立ってゐたことです。

違ひがあるとすれば、担つた使命が、芭蕉は「庶民としての風雅の道の探求」であり、子規は「西欧に負けない日本文学の再構築」だったことでせう。それでも、自らの生き方と重ね合はせたその使命への取り組み方は全く同じでした。

今日の話は、芭蕉の偉さや子規の凄さを知って貰ひたかつたのではありません。この二人にこれほど過酷な使命を与へたのは誰かを考へてほしいのです。芭蕉が求めたもの、子規が求めたものを辿れば、答は自づから出る筈です。

現代は情意が枯渇した時代だと指摘する人もゐます。文化的に一つの閉塞期にあることは皆さんも折々にお感じになるでせう。

文化は、多くの人の心のありやうによつて形を作ります。瑞々しい心は瑞々しい文化を作り、殺伐とした心は殺伐とした文化を作る。しかも、理想の形が絶えず墮落の危険に曝されるのは、芭蕉と子規の門人達の例で見てきたとほりです。

守る人が必要であり、絶えず守らうとする意志と実践が必要です。文化の大きな革新はある日突然やってくる訳ではありません。小さな分野においても、そこに向けた数へきれない小さな使命の積み重ねがあつて、初めて実を結びます。そこに参画する道を開くのは、偏にささやかな一人びとりの意思の力です。ささやかであっても、確固とした志一つあれば、この滔々とした民族の命の流れに貢献していける可能性が生まれるのです。

「文化の戦士たれ！」

この言葉を、今日の話の結びにしたいと思ひます。

講義

「人がら・家がら・国がら」

(株)寺子屋モデル代表

山口 秀 範



はじめに

- 一、二宮尊徳（一七八一～一八五六）の道歌：「人がら」
- 二、飯田新七（一八〇三～七四）「四つの綱領」：「家がら」
- 三、藤田東湖（一八〇六～五五）「回天詩史」：「人がら・家がら・国がら」
- 四、徳川光圀と「国がら」
- 五、神話に遡る日本の「国がら」
- 六、他の国々の「国がら」
- 七、御製―天皇のお歌―に表はれる「国がら」

はじめに

皆さんは日常「自分はどんな人間だらう、周りに自分はどうか映ってゐるか、自分を磨いて魅力を高めるには」などと考へてゐるでせう。さういふあなたを端的に表はすのが「人から」です。

それと並んで「家から」といふ言葉があります。「自分はどんな家に生れたか、商家か農家か、或いは軍人の家系か」、そしてそれぞれに家風とかモットーなどあるかもしれませんが、皆さんをとりまく様々な人の集まりがありますが、一番身近なのは家族であり、その家族の成り立ちを物語る「家から」、これも大切なものですね。

これら二つに加へて「国から」もありますが、若い皆さんには馴染みない言葉でせう。ところが、第一日目の與島誠史先生のご講義で吉田松陰の『講孟餘話』を紹介され、その中に「是れ国体上より出で来る所なり（日本の国柄から出て来た考へである）」と、「国から」が登場してゐました。今からお話しする中で、「人から」「家から」と並んで「国から」についても考へて頂きたいのです。

一、二宮尊徳（一七八一〜一八五六）の道歌：「人がら」

ここで二宮尊徳、飯田新七、藤田東湖といふ同時代を生きた三人を見てみませう。まづ二宮尊徳ですが、知らない人はゐないですよ。戦後の占領政策により多くの偉人が消されましたが、二宮金次郎の銅像はどこかで目にしたことがあるでせう。江戸末期の農村復興に大きな功績を残した尊徳の「人がら」が良く窺へるのは、「道歌」と呼ばれる五七五七七の和歌です。二宮尊徳は自分が生きてきた道を、多くの道歌に託して弟子達に伝へようとしたのです。その中から二首をご紹介します。

山々の露あつまりし谷川のながれ尽きせぬおとぞ楽しき

和歌は二回読むのが慣はしですので、二度目は皆さん一緒に大きな声でどうぞ…。

どんな情景か分かりますか。尊徳さんは今谷川の音だけを聞きながら、この川の源流をイメージしてゐるのです。遡っていく山の奥には流れはなく、雨粒や木々の葉から落ちるしづく、朝露などが山肌を湿らせてゐる。それらは集まってちよろ／＼と小さな流れを作るので



せう。一滴の露がやがて溪流となって終には海まで注ぐ、川音を聞きつつ大自然の循環に心を馳せるのが実に楽しいといふ歌ですね。

この一首に二宮尊徳の「人から」を感じませんか。「人から」を知る最良の手立ては、その人の和歌に触れることです。皆さん方が昨日作った歌にも、班員の気持ち、人からが表はれてゐるでせう。ではもう一首。

むかし蒔まく木の実お大木おと成りにけり今蒔まく木
の実のち後の大木ぞ

尊徳さんが見てゐるのは、村はづれにある大きな木です。暑い夏の日にはその木陰で村人は一息つきます。春は花咲き、秋には実をつけるかもしれませ

ん。そのやうに大木が人々の役に立てるのは、昔種を蒔いた人がゐたから。五十年か百年前に誰かが種を蒔き、芽を出したら水をやって育ててくれた。そのお蔭で今日この大木があるといふ風に、尊徳さんの想像は広がるのです。

更にそこで留まらず、今こんな恩恵を受けてゐる私たちは、次世代のために次の種を蒔かねばならないと考へました。それが「今蒔く木の実後の大木ぞ」です。村はづれの一本の木の下で、百年前と百年後の両方を思ひ描けるのが、二宮尊徳の偉大な「人がら」だったのでせう。

二、飯田新七（一八〇三〜七四）「四つの綱領」…「家がら」

飯田新七の生れは越前福井ですが、京都に出て来て飯田さんといふ米屋に養子に入りました。そのうちどうしても呉服屋をやりたくて、奥さんの婚礼衣装まで店に並べて開業します。新七の非凡さは古着屋の開店早々に「四つの綱領」といふ立派な「家訓」を作り、それを一貫して実行したところではあります。

一、確實なる品を廉価れんかにて販売し、自他の利益を図るべし。

一、正札掛け値なし。

一、商品の良否は、明らかに之を顧客に告げ、一点の虚偽あるべからず。

一、顧客の待遇を平等にし、苟も貧富貴賤きせんに依りて、差等さとうを附つすべからず。

確かな品を安い値段で売り、自らの利益と共に客や仕入先にも利益をもたらずやうにする。自分だけが儲かつては商売は長続きしないと、開店時から信念を貫きました。また現代のデパートでは当たり前ですが、当時「正札」の商ひなど一般的ではない時代に、余分な利益を上乗せせず値段の駆け引きもない公開価格を守りました。三つ目の商品の情報を正確に公表することも、基本的な心構へですが、これを宣言して全従業員に徹底させたところが見事です。そしてどんな客も大切にし、決して身なりで差別しないことが店の信用を築いて行きました。

新七は高島屋百貨店の創業者として知られますが、「四つの綱領」は今も高島屋の社風として生きてゐるさうです。まさに「家がら」が広く受け入れられた例でせう。

三、藤田東湖（一八〇六〜五五）「回天詩史」：「人から・家から・国から」

三人目は水戸藩士の藤田東湖です。父の幽谷は武士ではなく古着屋——飯田新七のやうに——の家に生れたのです。ところが猛烈に学問に取り組み、その学問の力でついに武士の身分を手に入れたほどの人です。当然東湖はこの父の影響を色濃く受けました。

東湖は三十九歳の時、自らの半生を振り返って「回天詩史」を作ります。

三たび死を決して 而も死せず

二十五回 刀水を渡る

五たび閑地を乞うて 閑を得ず

三十九年 七處に徙る

邦家の隆替 偶然に非ず

人生の得失 豈徒爾ならんや

自ら驚く塵垢の 皮膚に盈つるを

猶餘す忠義の 骨髓を填むるを

嫖姚定遠 期す可からざれば

丘明馬遷 空しく自ら企つ

苟くも大義を明らかにし 人心を 正さば

皇道奚ぞ 興起せざるを患へん

斯の心奮發して 神明に誓ふ

古人云ふ 斃れて後已むと。

これまでに三度死を覚悟したその一度目は、文政七年（二八二四）に幕府が「異国船打払令」を出した年です。常陸大津浜へとイギリス人が不法に上陸し傍若無人に振る舞ってゐることを知り、父の幽谷はこの時十八歳の息子・東湖に「けしからん。その外国人を斬ってこい」と命じた。「承知しました」と飛び出して行ってみると、イギリス人は既に立ち去つてゐたので決死の覚悟は不発に終はつた。これが一度目です。

二度目はそれから五年後に、藩主継嗣問題が起り決死の江戸出府を敢行しました。先代の死去による後継に是非とも徳川斉昭公をと、分を超えて江戸詰めの家老たちへの談判を試みました。大騒ぎするうちに先代の遺言が見つかり、烈公と呼ばれ幕末に活躍する斉昭が九代目の水戸藩主と決まり、二度目の覚悟も中途で終りました。

そして三度目は、この詩を詠んだ只今のことです。右記のやうに藩主に就いた斉昭は政治経済改革、そして藩校弘道館開設と果敢に藩改革を進めますが、あまりに急速だったため守旧派の反発を招き、幕府への告げ口もあつて突然一八四四年に、藩主烈公は隠居謹慎を命じられます。それにつれて藩改革の中心にあつた藤田東湖も小石川長屋に蟄居幽閉となります。この逆境の只中で来し方を振り返れば、これまでに二十五回利根川（刀水）を渡つて江戸と往復し、住まひも七箇所変へるほど懸命に職務に励んで来た。この間あまりにも忙しいので

五度は休暇を乞ふたが許されず、と述懐は続きます。

更に、藩や国家の栄枯盛衰、そしてそれに伴ふ個々人の運命も偶然ではなく移り変はつて行く。現在ほとんど底状態で風呂も入れず皮膚には垢が溜まってゐるが、骨の髄は忠義が詰まってるのだと意気軒高です。

嫖姚ひょうようと定遠ていえんは漢の大将軍で、それらの人物と同じやうな活躍は無理だが、史家の左丘明さきうめいや司馬遷しばせんには負けず、我が国の歴史を今から書く気概は持つてゐる。「国がら」を明らかにして行けば国運はきつと興隆して来るに違ひない。これ位の困難にへこたれず、命ある限り奮発し続けることを神に誓ふ、と決意を固めてこの詩は終はつてゐます（「大義を明らかにし皇道を興起する」は即ち「国がら」を考へることにつながりませう）。

班に戻つて、是非大声でこれを皆さんで唱和していただきたい。東湖の気概と「人がら」が皆さんに伝はつて来るでせう。

一八五三年に黒船が来寇すると、斉昭の謹慎は突然解けて幕府の海防参与に就任します。現代の外務大臣と防衛大臣を兼ねたやうな役目です。国難に遭遇して他に人材はなく、斉昭に国の舵取りを託するしかなかったのですね。さうなれば当然東湖も参与の相談役として復帰し再度国政の最前線で活躍が期待されます。

ところがその二年後に「安政の地震」に見舞はれます。昨日の廣木先生の講義に登場した『蘭学事始』の原本がこの地震による火災で焼失したさうです。誠に惜しまれますが、惜しいことは藤田東湖の身の上にも起こりました。被災した江戸の邸内から一旦は脱出したのですが、中に取り残された母親を助けに引き返して連れ出す途中、落ちかかる大きな梁の下敷きになって圧死してしまひます。西郷隆盛や吉田松陰を始め志士たちが挙つて慕つた大人物・藤田東湖の最期は誠に惜しまれるものでした。

ここで、東湖の父藤田幽谷が書いた「正名論」の一節を読んでみませう。かつて寛政の改革で名高い松平定信が、水戸藩に若き俊才ありとの情報を得て当時十八歳の幽谷に論文の提出を求めました。定信には幽谷を側に置きたいといふ希望もあつたやうです。それに応じて旅先でサラサラと書き上げたのがこの「正名論」です。

天に二日なく、土に二王なし。皇朝自ら真天子あり。則ち幕府は王と称すべからず。則ち王と称せずと雖も、その天下国家を治むるは、王道に非ざるなきなり。

空を見るとお日様は一つしかない。それと同様地上の国には王と名のつく人は一人だけだ。

この日本には昔から天子様と呼ばれる方——天皇——がをられる。日本で王と呼ばれるのは天皇だけで、幕府の將軍は自らを日本の王だと名乗ってはならない。一方幕府は、その天皇から天下、国家を治めるやうに委託されてゐるのだから、政治のあり方は霸道ではなく王道であるべきだ、といふ意見書が「正名論」でした。あまりにも正論なので松平定信は苦々しく思ひ、幽谷の幕閣登用は沙汰止みになったやうです。これが水戸藩の伝統であり、藤田家の信念でもあつたのです。

四、徳川光圀と「国がら」

藤田父子の考へ方は「後期水戸学」の根幹となり、全国の志士たちの思想のバックボーンを形成します。そしてその水戸学の基盤を作つたのは水戸藩二代目藩主・徳川光圀——後世には水戸黄門様のモデルになった——です。光圀の父頼房は徳川家康の十一男で、御三家の一つ水戸藩の開祖です。まさに幕府直系といふ「家がら」に生れたのです。



光圀には同母の兄頼重がゐりました。しかしこの長男が産まれた時は三代將軍家光にまだ子供がなかったので、家光の相談相手だった頼房は將軍に氣兼ねし、我が子を闇から闇へ葬つてしまへと家臣に命じます。そんな事情の中で生を享けた光圀は、幼少の頃に頼房の跡継ぎと定められるのです。ところが兄頼重は密かに育てられてをり、やがてそれを知った光圀は立派な兄を差し置いて父の跡を継ぐことを潔しとせず、情緒不安定な青年時代を送ります。聰明闊達な少年期を知る家臣たちは、藩主後継者の乱行に心を痛めました。

やがて十八歳の光圀に、司馬遷の『史記』に触れる機会が訪れます。殊に「列伝第一・伯夷叔齊」との出会いが、光圀の生涯を決定づけます。

伯夷叔齊は孤竹君の二子なり。父、叔齊を立てんと欲す。父、卒そつするに及び叔齊は伯夷に譲る。伯夷曰く「父の命なり」と。遂に逃れ去る。叔齊も亦た立まつことを肯がえんせ

ずして之を逃る。國人其の中子を立つ。

古代支那の伝説上の国家、殷・周の時代、或る小国家の王・孤竹君の息子に、伯夷と叔齊の兄弟がをりました。父は跡継ぎに末子の叔齊を指名して亡くなります。ところが叔齊は伯夷に向つて「立派な兄であるあなたが、跡をお継ぎください」と譲ります。しかし伯夷は「父の遺言に従つてお前が継げ」と主張して、こつそり国を離れたのです。叔齊の方も「兄が次の王に相応しいのだ」と固辞して国を脱出してしまひます。困つた重臣達は仕方なしに、伯夷と叔齊の間にゐた次男を王に就けたさうです。

武王、木主を載せ號ごうして文王と爲し、東して紂ちゆうを伐つ。伯夷叔齊は馬を叩き諫めて曰く「父死して葬らず、爰こゝに干戈かんかに及ぶを孝と謂ふべきか。臣を以て君を弑しすを仁と謂ふべきか」と。

武王、已に殷の亂を平らげ、天下、周を宗とす。而して伯夷叔齊は此れを恥じ、義をもつて周の粟ぞくを食さず。首陽山しゆやうざんに隠れ薇わらびを采りてこれを食す。

当時の王位継承の仕方として、禪譲と放伐の二通りがありました。「禪譲」は血の繋がりではなく、人格として器量として、自分の跡継ぎに相応しいと見定めた人物を指名して譲るのです。一方公正な政治をせずに贅を尽くす残酷な独裁者を武力で追放して跡を襲ふ「放伐」も行はれたのです。古来禪譲と放伐を繰り返しながら現代まで王朝の興亡を繰り返してゐるのが漢民族の歴史です。

殷王朝の末期、三十代目の紂王は「酒池肉林」といふ言葉が今に伝へられてゐるほど贅沢の限りを尽くし暴政を続けました。これを家臣の一人、後の武王が倒し——放伐——、周を興します。後に孔子が理想的な国と仰いだのがこの周です。

先ほどの伯夷・叔齊兄弟は、この武王が紂王を討つ出陣の場に遭遇し、武王の乗る馬の首を叩いて次のやうに諫めます。「父木主の葬儀もせず、その棺を馬車に載せて戦場に向かふのが孝と言へるのか。いくら酷い暴君と謂へど、家臣が王を暗殺するのが仁に適つてゐるのか。あなたの生き方は間違ひだ」と。

この戦で武王は紂王を討つて新しい国を興し善政を布きました。しかし伯夷・叔齊は、孝も仁も蔑ろにして建てた周の食べ物を食べては自分たちの節を守れないと世を捨て、国外れの首陽山に登り山の蕨を摘んで自給自足生活に入りました。

餓うゑて且まに死まなんとするに及び歌を作る。その辭に曰く

彼の西山に登り、其の薇を采る。暴を以て暴に易かえ、其の非を知らず。

神農しんのう、虞ぐ、夏か、忽こつ焉えんと没し、我、安いにか適て歸きせん。于あ嗟あ徂ゆかん。命めい之衰えたり

と。遂に首陽山に餓死す。

飢ゑていよいよ命の尽きんとする時に、二人は詩を詠みます。「自分たちは武王のやり方に納得いかず、周に住むことを嫌つて山の蕨を食べて来た。紂王は確かに暴君であったが、それを排除するため同様に暴といふ手段を取つた武王は、その間違ひに気が付かない。禪讓によつて伝説上の治世を担つた理想の皇帝たちはすっかり姿を消してしまひ、もはや自分たちの行き場はない。天命の衰えた世に未練はない」といふ辞世を残して、正しいと信ずる思想に殉じたのです。

最も読まれた隣国の古代史『史記』の中に、光陰はそれまで内心でくすぶつてゐた藩主継承問題の光明を見出したのです。伯夷・叔齊の決断に倣つてやはり兄の頼重に父の跡を譲る

べきだと確信します。しかし現実には將軍も認めた二代目継承を反故にすることは許されません。だとすれば、光圀は自分の次の三代目は、兄の息子に継がせようと密かに心に決めました。

父頼房の逝去により三十四歳で水戸徳川家を相続する時、光圀は四国高松藩の初代藩主だった実兄松平頼重の長男綱方、次男綱條つなえだを養子にし、ゆく／＼は三代目藩主にすることを、親戚一同に承諾させます。光圀の決意が固いことを知った兄頼重は、それならばと光圀の息子頼常を高松藩松平家の二代目に指名しました。若くして学んだ『史記』（列伝・伯夷叔齊）の精神はかうして水戸藩に活かされました。

「桃源遺事」といふ光圀の伝記に、晩年の光圀の口癖として次の言葉が残ってます。

「折ふし御はなしの序ついでに、我が主君は天子也。今將軍は我が宗室そどうしつなり。あしく了簡りょうかん仕り取違へ申すまじき由、御近侍共ごきんじに仰せ聞かされ候」

我とは、水戸藩主の光圀自身ですね。水戸藩主の主君は天子（天皇）である。では將軍は何かといふと、「我が宗室」、本家だと言ふのです。御本家は勿論大事にするが、しかし主君

はあくまで天子様である。お前たちもゆめ／＼ここを間違へてはならぬぞと、お側近くの家来たちにいつも言ひ聞かせてゐたのでせう。これこそが水戸藩の特別な「家がら」だったのです。

五、神話に遡る日本の「国がら」

さて、蟄居閉門中に「回天詩史」によつて自らを鼓舞した藤田東湖は、逆境の中で精力的に執筆活動を続けます。その代表的な述作は『弘道館記述義』です。先に藩校開設時に原案を書いた『弘道館記』につき、噛み砕いた解説本を作るやうにと再三藩主斉昭から要請されてゐましたが、やうやく時間が出来たこの蟄居中に書き上げたのです。その中に次の一節があります。

赫々たる神州は天祖の天孫に命ぜられしより皇統一姓、諸を無窮に伝へ天位の尊きこと猶ほ日月の如し。

元氣溢れるこの日本を神州と呼びます。神話によれば、神々の住む高天原を治める天照大神（天祖）が天孫瓊杵尊（にぎひこのみこと）に命じ、初めて日本の国土に降り立たれて以来、皇室の血筋、家系が一貫して続いてゐるといふのです。天にお日様が一つしかないやうに、この地上の日本の国にはどの時代も天皇がお一人いらつしやり、神話の昔から未来永劫変はらないといふのが東湖の信念でした。

則ち万世（もと）の下、徳、舜禹に匹し智、湯武に侔（ひと）しき者ありと雖も亦唯一意上（いんど また いちいかみ）を奉じて以て天功（てんこう）を亮くるのみ。万一其の禪讓（ぜんじやう）の説を唱ふる者あらば凡そ大八洲の臣民鼓を鳴らして之を攻めて可なり

従つてこの日本では、舜や禹のやうな徳高い理想的な人物や、湯王、武王に匹敵するリーダーが出現しても、彼らはいつても天皇をお助けする役割を担ふのです。万が一にも、皇族でない人物に次の天皇をお譲りするなど有り得ない。「放伐」は論外だが「禪讓」ならば良いのではと言ひ出す者があれば、太鼓をどんどん鳴らし大騒ぎをしてこれを止める、それが日本の「国がら」であると言ふのです。

参考として『日本書紀』の一節を掲げます。これは東湖が述べた内容の典拠で「天壤無窮の神勅」と呼ばれてゐるものです。

葦原あしほらの千五百秋ちいほの瑞穂みずほの国は、是れ吾が子孫うみのこの王きみたるべき地くになり。宜よろしく爾皇孫就いましめみまゆいて治しらせ。行矣ささぐませ。宝祚あまつひつぎの隆さかえまさんこと、まさに天壤あめつちと窮きわまり無かるべし。

「葦原の千五百秋の瑞穂の国」——水辺に葦が繁り、毎年秋には変はることなく稲穂が実り続ける豊かな国、日本——は私の子孫が王となる地である。我が孫瓊杵尊よ、その国を治めていらつしやい。「宝祚」は天皇の位といふことです。天皇の位が次々と継承され日本の国が栄えるのは、天地自然が未来永劫揺るぎないのと同様である、と天照大神は天孫に授けられたのです。

次は瓊杵尊の曾孫に当たる神武天皇が出された「建国の詔」です。『日本書紀』の原文が難しいので、現代語訳を載せてをります。

「謹んで皇位につき、国民が安寧あんねいに暮せるやうにしよう。国家をまとめて都を作り、

天地四方の人々が大きな一つ屋根の下（八紘はつこう一字）で仲良く暮らすやうにするのは素晴らしいことではないか」

我が国が始まる時に初代の天皇と伝えられる方が、国民と共にこんな国を作りたいと宣言されたお言葉です。虚心にこれを読んでみて、素晴らしい内容だと思はれませんか。平成二十八年八月八日「象徴としてのお務めについてのおことば」の中でも「天皇の務めとして、何よりもまず国民の安寧と幸せを祈ることを大切に考えて来ました」と述べてをられます。二十一世紀の天皇のおことば「国民の安寧と幸せを祈る」は二千数百年前から全く変はらない。これこそが「国がら」を一番具体的に表してゐると思へます。初代神武天皇から百二十五代、連綿とお血筋とご精神が継承されてゐる国、それが日本です。

六、他の国々の「国がら」

伯夷・叔斉の昔から、お隣の漢民族及びその周辺民族の「国がら」は、明らかに我が国と異質です。およそ三千年、「放伐」の繰り返しによる征服と断絶の歴史と評して過言ではな

いでせう。「禪讓」もたまにはありましたが、殆んどは「放伐」。前王の追放に止まらず、一族根絶やし、文化や言語の抹殺なども珍しくありませんでした。現代の中華人民共和国も毛沢東の蒋介石追放によつて建国され、放伐を企てる政敵たちを先手を打つて抹殺することで維持されてきたことは、最近の眞実発掘により明らかになってゐます。

司馬遷の『史記』が現代どれほど読まれてゐるのか定かではありませんが、そこに描かれた興亡盛衰の姿は、時代を隔てても繰り返される、それは善悪の価値観では測れない所謂「国がら」から発してゐるのでせう。

ではここで、西洋諸国の代表としてアメリカ合衆国の「国がら」を見てみませう。一七七六年にイギリス植民地から脱して独立を勝ち取ります。首都ワシントンの連邦議会議事堂ロビーには、アメリカ人が大事にして来たドキュメント（文書類）を納めた陳列棚が並んでゐますが、その第一番目は「独立宣言」原本なのです。ジョージ・ワシントンやトーマス・ジェファースンの肉筆サインがある古文書こそアメリカ人が最も大切にする国宝ですが、それを読むとアメリカの「国がら」に触れることが出来ます。独立宣言のエッセンスは次の一文です。

We hold these Truths to be self-evident, that all Men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights, that among these are Life, Liberty and the Pursuit of Happiness.

(われわれは、以下の事実を自明のことと信じる。すなはち、すべての人間は生まれながらにして平等であり、その創造主によって、生命、自由、および幸福の追求を含む不可侵の権利を与へられてゐるといふことを)

ここで注目すべきは、「すべての人は平等に作られた」といふ文に用ゐられた「create」です。では「作った」のは誰でせう。答は次の行の「Creator」です。創造主とか造物主とか訳され「全知全能のゴッド」を意味します。

ですから、アメリカ人にとって最重要な権利——生命、自由、および幸福追求の権利——は、ゴッドによって人間に与へられたと「独立宣言」に明記されたものなのです。自分の生命を脅かされることなく自由を謳歌し、各人の幸福を精一杯追求する。この三つはイギリスと戦つて獲得したもので、永遠にそれらを守り抜くことが、言はばアメリカの「国がら」となつてゐるのです。しかも肝心要の三つの権利は『聖書』に謳はれるゴッドから与へられた

といふ訳です。

一九八〇年から三年半私が住んでみたナイジェリア北部はイスラム教圏です。黒光りする肌の住民は、陽気でものに拘らない、ある面かなりいい加減な人々ですが、アラアの神との約束事は、命がけて守ります。毎年断食月ラマダンが巡って来ると、日中は一切飲み食ひしてはいけないといふ戒律は完璧に実行されます。炎天下で唾も飲み込まない程です。これらの諸国では、アラアの神が「国がら」を規定すると言つても過言ではありません。

かくして二十一世紀のグローバル社会においても、それぞれの「国がら」を古代の神話、宗教によって決定づけてゐることは大変興味深い事実です。ところが長く輝かしい歴史を貫いて来た我が国の義務教育で、神話に触れる機会は殆んどありません。今こそ日本人が神話を思ひ出さねば、「人がら」・「家がら」から「国がら」へと繋がって行きません。

私たちがこの日本に生を享けた以上、自分の人格の完成とか、我が家が幸せならいいといふだけに留まる訳にはいかないのです。同じ日本国民として共有する価値——世界平和も大切ですが——とは、まづは自分が立派になることと、自分が生まれた国を立派にすることとが一直線に繋がり、そこに生きがい働きがいを感じる事が出来る筈なのです。

皆さん方そこまでにあと一歩です。学校で教へられなかつたとしても、本屋に行けば『古

事記』も『日本書紀』も容易に手に入ります。一人で読むのが難しければ、仲間を集めて一緒に学べば、私たちの遠い遠い祖先たちが、禪譲・放伐とは全く違ふ「国から」を、或いは創造主が物から人間を作ったといふ世界観とは別次元の我が国を、築き、守り、育ててきたことに、きつと気付かれるでせう。

七、御製——天皇のお歌——に表はれる「国から」

さて最後に、「国から」を実感する手立てをお教へしませう。それは百二十五人いらつしやる天皇方が後世に残されたメッセージに触れるのが一番の早道です。幸ひ多くの天皇は和歌をお詠みになり現在まで伝えられています。この合宿教室で和歌創作の経験をした皆さんは、自分の思ひを正確に言葉にするのは容易でないこと、飾らずありのままを表現するには修養を積む必要があることなどを実感されたでせう。では六人の天皇様のお歌——御製と呼びます——をご紹介しますので、この後の班別研修で読み味はって下さい。

つちみかど
土御門天皇（八十三代）

いそのかみふる野の花に言こととはむかゝるなげきやありし昔も
浦々によするさなみに言とはむ隱岐の事こそ聞かまほしけれ

第八十一代の安徳天皇が平家の滅亡と共に壇ノ浦へと沈んでしまはれ、その後を継がれたのが後鳥羽天皇です。古来の天皇政治に戻したいといふ後鳥羽天皇の企てが発覚し「承久の変」が起ります。後鳥羽上皇は隱岐の島に、お子様の土御門天皇は土佐に、その弟君順徳天皇は佐渡に流罪といふ未曾有の事態です。土御門天皇は直接関与してをられなかつたのですが、後鳥羽院も順徳天皇も流されるのに自分だけ都に留まるのは忍びないと、進んで土佐にやがて阿波へと遷られ、そこで生涯を閉ぢられました。二首目は、隱岐に流されたお父様の消息を波に尋ねたいとお歌です。

後ご奈良なら天皇（百五代）

宮柱朽くちぬちかひをたておきて末の世までのあとをたれけむ
愚おろかなる身も今さらにそのかみのかしこき世よ々の跡をしぞ思ふ
いさむるもありしなごらにたらちねの幾たび夢の昔をか見し

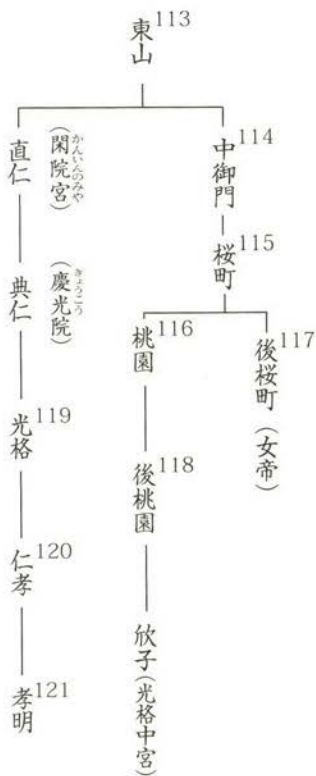
後奈良天皇の御代は戦国時代の只中で、歴代で最も貧窮なさった天皇と言はれてゐます。お祖父様の後土御門天皇の時から「大嘗祭」といふ、ご即位後一世一代のお祭りも経済的理由で途絶えてしまひました。お父様の後奈良天皇は位を継がれて二十二年目にやうやく即位の儀を斎行されました。皇太子としてそれを祝はれたのが一首目のお歌です。世の中から忘れられたやうな時代にあつても代々の天皇方の祈り、願ひをそのまま受け継ぎながら、一心に務めを果たして行かれたのです。

光格天皇（百十九代）

かならずと頼めおきにしことの葉の偽いつわりしらで待つぞつれなき
すべらぎの世々の例たゆしをうけつぎて神につかふる春ぞかしこき

光格天皇はお祖父様の直仁親王から始まった新しい宮家・閑院宮の三代目で、将来ご自分が天皇になるとは夢にも思はれずにお育ちになりました。ところが第百十八代後桃園天皇が皇子のないまま若くして崩御されたことから、急遽即位されました。

お歌も一首目は庶民的な恋の歌のやうです。しかし一旦、位をお継ぎになってからは、代々の天皇方をお手本にしながら、少しでも立派な天皇であらうとなさったことがお歌からも拝されます。この光格天皇から今上天皇まで、直系で今日に至ってをります。



明治天皇 (百二十二代)

ひとたびは見むよしもがな名くはしき吉野の山の花のさかりを (明治四十一年)

暑しともいはれざりけりにえかへる水田みずたにたてるしづを思へば（明治三十七年）

窓をうつ霰あられのおとにさめにけりいくさの場にはにたつとみし夢（明治三十八年）

かれがれになりぬる庭の蟲むしのねはなかぬ夜よりもさびしかりけり（明治四十四年）

榎原かしはらのとほつみおやの宮柱たてそめしより国はうごかず（明治四十二年）

ひと筋をふみて思へばちはやぶる神代の道もとほからぬかな（明治四十三年）

明治天皇は九万数千首といふ厩大なお歌を残してをられますが、どのお歌からもまづ天皇の「お人がら」を感じられ、それから、皇室——天皇家——の「お家がら」も拝することが出来ます。更には天皇と国民の交流を通じて日本の「国がら」もお歌から察せられるでせう。

昭和天皇（百二十四代）

ふりつもるみ雪にたへていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ（昭和二十一年年頭）

国の春と今こそはなれ霜こほる冬にたへこし民のちからに（昭和二十七年）

わが庭みやいの宮居に祭る神々に世の平らぎをいのる朝々（昭和五十年）

わが庭のそぞろありきも楽しからずわざはひ多き今の世を思へば（昭和五十七年）

遠つおやのしろしめしたる大和路の歴史をしのびけふも旅ゆく（昭和六十年）

今上天皇（百二十五代）

大いなるまがのいたみに耐へて生くる人の言葉に心打たるる（平成二十四年年頭）

精根を込め戦ひし人未だ地下に眠りて島は悲しき（硫黄島・平成六年）

人々の幸願さちひつつ国の内めぐりきたりて十五年経つ（平成十五年）

明け初そむる賢所かしらの庭の面は雪積む中にかがり火赤し（平成十七年）

昭和天皇は戦後のお歌から数首選びました。今上天皇のお歌も、どうぞ班の皆さんとじつくり味はってみて下さい。同じ現代を生きる私たちに、日本の国の素晴らしさを様々に気づかせて下さるに違ひありません。

筑豊炭田と朝鮮人炭坑夫たち

— 頌徳碑と謝恩碑について —

元福岡県立直方高等学校教諭

小野吉宣



歪められた情報

高等学校の日本史の資料集に「創氏改名」の項があります。それは一九四〇年（昭和十五年）、朝鮮民族固有の「姓名制」を廃止し日本式の「氏名制」を強制したもので、抗議の自殺者が出たほどの悪法であったと印象付けられてゐます。

当時、朝鮮総督府は「創氏改名」について、「半島民衆ノ要望ニ依拠セルモノ」と言つてゐました。現在でも帰化してゐない在日の人たちの多くが日本式の通名を持つてゐるやうに、当時も日本式の名前を使ふ朝鮮人がかなりゐたのです。ことに満洲やシナに行つて働く場合、日本名を名乗るメリットは大きなものがありました。「創氏改名」は日本統治下の朝鮮で、最大の悪行の一つとして取り上げられることが多いやうですが、朝鮮人側の要望に応へた面もあつたのです。警察などのやうに治安を担当する部署では、むしろ「創氏改名」を嫌ひました。何故かと言へば日本人にも朝鮮人にも悪いことをする人が出ますが、もともとの日本人との区別ができず、捜査に支障が生じるからでした。

「創氏改名」に関しては、朝鮮人から名前を奪つた！などと一方的に言はれてゐて、かな

りの誤解があるやうです。少しだけ説明しておきます。根柢には文化の相違がありました。

朝鮮半島は儒教文化圏で男系社会ですから、女性は結婚後も他よ所者ものとして夫の「姓」には加はれませんでした（子供は父の姓になります）。「姓」は男系の血統をしめすものでした。そこで夫婦・親子が同じになる「氏」を創始することにしたのです。その結果、多く人が日本風の「氏」（家の呼称で、謂いはばファミリーネーム）を創りましたが、金や朴、鄭など従来の「姓」を「氏」とすることもできました。「改名」も任意の申請であり、新たに「氏」の届け出をしない場合は、自動的に従来の「姓」が一家の「氏」となったのです。そして、戸籍にはもともとの「姓」は本貫ほんかんとして記録されました。

名前を奪った！といふやうに短絡的に見てはならないのです。

ところで、戦前の日本人の行為について、「犯罪者の烙印」を押し、良心的な日本人に反省を強要する War Guilt Information Program（戦争犯罪宣伝計画）があったことはご承知でせうか。敗戦後、わが国を占領統治したGHQ（連合国軍総司令部）が、日本が二度と立ち直ることのないやうに、日本人に犯罪者意識を植ゑつけて誇りを奪はうと新聞・ラジオ・書籍・映画などを使って意図的に展開した宣伝です。さうした歪んだ見方の中で、「創氏改名」の押し付け説や朝鮮人労働者の「強制連行」説が広がって、そのやうに思ひ込まされて



ゐる人たちが少なからず出るやうになったのです。
今日は炭坑夫の「強制連行」云々については、それは違ふのではないか、といふことを、私の身近な
ことでお話したいと思ひます。

謝恩碑と頌徳碑の建立

私の住んでゐる宮若市（宮田町と若宮町が合併して、平成十八年発足）は昭和三十年代まではエネルギー源としての石炭産業で栄えた町でした。市役所の西の広場の一角に石碑が二つ立ってゐます。一つには「頌徳碑」で、もう一つは「謝恩碑」です。言ふまでもなく、「頌徳」とはある人物の徳を頌^{たた}へる（讃へる）ことであり、「謝恩」とは受けた恩義に感謝することです。

「頌徳碑」は、かつて宮田町にあった貝島炭鉱で指導的立場にあった露天鉱区の炭鉱長、俵口和一郎の退職に際して、その下で働いてゐた朝鮮人労働者たちが仲間呼びかけて、その人徳を讃へて建てたものです。俵口和一郎頌徳碑と刻まれてゐます。除幕式は昭和四年十一月十日のことでした。

昭和十年、露天掘りの出炭量の減少に伴つて、貝島炭鉱がいよいよ閉山することとなつた際、やはり朝鮮人労働者たちが二十年余りお世話になつたとして浄財を集めて建てたものが「謝恩碑」です。こちらの碑は昭和十年十一月二十四日に除幕されました。

これらの碑には「發起人 洪徳允 河基鎬」、「世話人 李元澤 李鳳植 李朱錫 趙漢克」の文字が刻まれてあつて、さらに「寄附人」として「一金 壹百五十円」のところには「洪徳允 河基鎬 李鳳植」といふ三人の名前が彫られてゐます。だいぶ風化してゐますが、「李斗酉」「李翔烈」の二人は「一金 十円」を寄附したことが分かりましたし、「一金 六円」のところには「金孤昊 千斗完」の二名が読み取れました。

中には「米□表 李□□」といふ文字もありました。お金でなくお米の現物で協力したのでせうか。或は建碑作業のための炊き出しに米を提供したのでせうか。

いづれにしても、当時炭坑で働いてゐた朝鮮人たちの善意とまごころが偲ばれる碑

文であると思ひます。

ところが、ことに近年、かうした人たちを侮辱するに等しい強制連行云々ばかりが目立って報道されてゐます。右のやうに日本人上司の徳を讃へ、九州の炭鉦で働らけたことに恩義を感じた朝鮮人炭坑夫がゐたからこそ、彼らの名前を刻んだ碑が残つてゐるのです。

宮田町石炭記念館の説明書には、「(日支) 事変以来炭鉦労務者の応召、他産業への転出等々により熟練炭坑夫は極度に逼迫し、依然として充足数に満たないやうな事情あるに鑑み、政治では業者の要望に従ひ、これが補充の一策として当時朝鮮労務者の都市、内地就業をするに至り、現に移入着山を見るに至つたが、貝島炭鉦株式会社では、既に大正六年満之浦炭鉦第二坑に当時朝鮮労働者三〇余名を手始めとして年々、其数を増し昭和四年には、労務者二五〇余名を算するに至つた」と書かれてゐます。

要するに人手の足りない鉦山に、鉦夫として朝鮮人労働者たちが雇はれたといふことです。働いてもらふわけですから、強制連行や強制労働の字面じづらから連想されるやうな無茶で乱暴な扱ひを朝鮮人にするはずありません。当然に賃金は支払はれてゐます。

俵口和一郎頌徳碑について

筑豊炭田の御三家と呼ばれたのは、麻生、伊藤、貝島でしたが、その一つである貝島炭鉱の創業者は貝島太助と言ふ方です。弘化二年（一八四五）生まれの貝島太助は貧しい農家の出で、家の手伝ひをする傍ら九歳から炭坑夫として働いたとのこと。今で言へば小学校三年生です。多くの苦勞を重ねたことが偲ばれるでせう。

筑豊の炭鉱を遍歴した末、明治十八年（一八八五）には、私の住んでゐる旧宮田町に約十五ヘクタールの鉱区を確保してゐました。鉱山の開発には、ボーリング調査をして石炭のある地層を探るのですが、そのやうな機械を持たない太助は地面に両手を当てるとじつと目をつむって鉱脈を言ひ当てることのできる異能の才があつた、と地元では語り継がれてゐます。

さうした創業者の苦勞が社風にも生かされてゐたのでせうか、貝島炭鉱の露天鉱区の炭坑長であつた俵口和一郎は、のちに朝鮮人夫から讃へられたのでした。その碑文から次のやうな文字が読み取れました。

「当時朝鮮労務者の指導統御については、特に意を用ひ同坑長俵口和一郎氏が自ら其の衝に当り、差別的取り扱ひを避け、融和善導を主眼とし、之に智徳教育を課し、更に家庭の指導に留意し、その内地化に努めた」

「内地化に努めた」とは、日本人と同様の生活ができるやうに扱つたといふことです。宮田町石炭記念館などで調べたのですが、当時雇ひ入れた「朝鮮労務者の指導統御については、次の三点に留意したとのことす。

- ① 文字の読み書きのできない労務者のため貝島第三小学校に夜学を設け従業員及びその子弟に修学の機会を与へた。
- ② 賃金の支払ひに誤解を生まないやうに算術計算をさせた。
- ③ 勤儉・貯蓄の必要性を説き聞かせ、無駄遣ひをさせないで余つたお金は郷里に送金させた（彼等は田畑を購入するなど、故郷に錦を飾る者も多数ゐたやうだ）。

終りに

私の生まれ育つた故里に立つ二つの石碑に関連したお話でしたが、これら碑を建立した

人たちの心は貴いことだと思ひます。昨今は、戦前の日本の「負の歴史」しか学校では教へませんし、マスコミも見向きもしません。それどころか事実とは全く無関係に、何事によらず「反日」に凝り固まった現在の韓国の官民が発する言ひ分を拡声器のやうに広める日本の新聞もあります。本当に困ったことです。異常なことで、外国では考へられないことです。

繰り返しになりますが、頌徳碑、謝恩碑の建立に心を砕いた朝鮮人労働者の存在は貴いことであつて、忘れてはならないと思ひます。名前まで刻まれてゐるのです。本来であれば日韓友好の原動力となるはずのものです。さうなる日の来ることを願つて止みません。

短歌入門

短歌創作導入講義

税理士法人あおぞら

北村公一



一 短歌を詠む意義

二 短歌の作り方

三 廣瀬誠さんの歌と生涯

一 短歌を詠む意義

これから皆さんは短歌を詠まれるわけですが、短歌はこの合宿の大きな柱の一つとなっております。

皆さんは短歌と出会はれたのは多分、国語の教科書の中でだと思ひます。私もさうでした。私は国語は好きでしたが、短歌や俳句は嫌ひでした。作者がなぜ感動してゐるのか分からな。私は感動しない子供でした。喜怒哀楽が少なく、「感情的になるのはよくないことだ」と思つてゐました。

この合宿の必携書である『短歌のすすめ』には、「心情、感情の洗練」(四頁)の大切さが説かれてゐます。「感情的になるのはよくない」のではなくて、本当は「感情を正しく用ゐることができないのは悪いこと」なのだと思ひます。

「情緒」といふ言葉があります。数学者の藤原正彦さんは、その著書『祖国とは国語』の中で「シンプルな公式ほど美しい」と言はれてゐます。数学にも情緒が必要なのです。数学に限らず、社会科学も自然科学も学問には情緒が必要なのです。全ての学問の基礎には「情

緒を磨く」ことが求められるのです。

学問だけではありません。政治にも情緒が必要だと思ひます。

今から千四百年以上昔の飛鳥時代に、聖徳太子は道に倒れた旅人を見て「旅人あはれ」と歌をお詠みになりました。そして、ご自分の服をその旅人に着せ掛けてあげられました。

ところが、今の政治家はどうでせう。北朝鮮に拉致された人たちを取り戻さうといふ概を持った国会議員が何人ゐるでせうか。まるで人ごとのやうに冷淡に振舞ふ政治家は、人の心を持たないのではないかと思はざるを得ません。

短歌を詠むためには、自分の心と向き合はなければなりません。自分が今、何を感じ、何に心を動かされてゐるか。そしてそれに一番適した言葉を選び取る。自分の心と正直に向き合ひ、言葉に表現する。実はこのことを繰り返すことで、自分の心の感じる力を伸ばすことができますのです。情緒を、正しく磨くことができますのです。私もこの合宿に参加して短歌を詠むようになって、感動する心を取り戻すことができました。

二 短歌の作り方



① 「切実な感動を詠む」

私がこれから歌を詠む上で心に留めるべきことをお話ししますが、どんなテクニクよりも一番大事なことがあります。それは、「切実な感動を詠む」といふことです。

これから皆さんは野外活動に出かけますが、その中で最も心に残ったもの、出来事を詠んで下さい。または、この合宿が始まってから一番心を動かされたもの。先生のお話や、班別討論での様子。それも歌にできます。ただしどんなに形が整ってゐても、その歌に感動がなければ、人の心には届きません。皆さんが、一番伝へたいもの、心を動かされたものを詠んで下さい。

② 「字余りは良いが字足らずは避ける」〔短歌のすすめ〕六十八頁〕

短歌は五七五七七の言葉数から成つてゐます。鎌倉幕府第三代將軍に源実朝といふ人がゐます。その実朝が詠んだ歌です。

ものいはぬよものけだものすらだにもあはれなるかなや親の子をおもふ

ものを言はないあらゆる獣でさへも、あはれなことだなあ、親が子を思ふ気持ちを持つてゐるのは。といふ意味の歌です。動物の親子の仕草を見て、甲斐甲斐しく子供の世話をする親の姿に感じ入つて詠んだ歌だと思ひます。言葉数は五七五八八になつてゐますが、ゆったりと莊重な感じになつてをり、実朝の想ひの深さが溢れてゐます。

これに対して、字足らずは極力避けてください。字足らずの歌は、思ひが足りない、尻切れトンボのやうになつてしまひます。

③「理屈を詠まない」(同書五十一頁)

私たちが詠む短歌といふのは、心の動きを表したものです。これに対して、「理屈」とは頭の中でこしらへた概念を言ひます。

社会的需要に対し供給の足らざる時に物価はあがる

これは言葉数は五七五七七にはなつてゐますが、短歌とは呼べません。

④「一首一文」(同書三十八頁)

次の歌は、萬葉集にある柿本人麿の歌です。

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ

東の方の野の空に暁の光がさしそめるのが見えたので、ふと振り返ってみたら、夜じゅう照らしてゐた月は西の空に傾いてゐた、といふ感動を歌ってをり、一連の情景が目には浮かびます。これを仮に一首二文にしてみます。

東の野にかぎろひの立つ見えぬ。かへりみすれば月かたぶきぬ

元の歌は流れるやうな歌の姿が感じられますが、真ん中で読点を打って一首二文にした歌は、歌の調子も意味の上でもぶちっと切れてしまつて人麿の感動が全く伝はってきません。形の上でもさうですが、一つの感動を一首の中に読み込むことを心がけてください。

⑤ 「口語（話し言葉）でなく文語（書き言葉）で詠む」

短歌の五七五七七といふ定型は文語の語法の中から生み出され、文語で詠み継がれてきました。ですから、文語の語法と短歌の調べは切り離せないものになってゐます。

⑥ 「連作短歌と詞書」

感動が大きくて一首に収まり切れない場合や、一連の情景を読む場合には二首以上に分けて詠むことをお勧めします。また、短歌は誰が読んでもその内容が分かるやうにしなければ

ばなりませんので、ともすると説明の言葉だけで一杯一杯になってしまひます。そんな時は、ことばがき「詞書」といふ、内容を説明する言葉や文章を歌の前に置きます。

三 廣瀬誠さんの歌と生涯

ここで、現代の万葉歌人ともいふべき私たちの大先輩をご紹介いたします。国民文化研究会の会員でいらした廣瀬誠さんです。廣瀬誠さんは大正十一年に富山市にお生まれになりました。少年時代から萬葉集に親しまれ、旧制中学の頃にはいつも萬葉集を持ち歩いてをられたさうです。また古事記や日本書紀もこよなく愛され、研究に没頭されます。富山県立図書館に長年勤務され、萬葉集や富山の靈峰・立山の歴史に関する多数の著書もお書きになりました。

さうしたことが御縁となったのでありませう、昭和五十一年には、富山県を訪問された当時の皇太子同妃両殿下に立山の歴史をご説明されました。

ところが廣瀬さんは昭和五十六年に舌癌に罹られます。五十九歳、富山県立図書館長になつてをられました。今でこそ癌は早期発見すれば怖い病気ではありませんが、当時は「癌

になった」といふだけで死刑の宣告をされたのと等しい受け止め方がされてみました。

入院して放射線治療をされる廣瀬さんは、ご自分の状態を克明に歌に詠まれました。その数約一年間で五百三十余首に上り、『坂の沼琴』といふ本にまとめられてみます。そのいくつかをご紹介します。

秋の頃より口腔内に異状を感じ、昭和五十六年二月二十四日富山市民病院耳鼻咽喉科の診察を受く。わが口の中を見たる瞬間、医師の顔色さつと変れり。医師の態度、検査の綿密、すべてただことにあらず。われ容易ならざる病なるを知り、身辺を整理す。なすべきことあまりに多く、力及ばず。二十五日

天地のまにまにわれはわが生を生きむとぞ思ふ力のかぎり

いきのかぎりわが務めをば果たさむと心たぎりていそがしきかも

癌の宣告にショックを受けられつつも、病魔に立ち向かふご決意を雄々しく歌はれてゐます。

夢

ふしぎなる夢をぞ見たるいづくとも知らず賑はしき坂登りゆきし

坂の道下りとなりて人まばらそのさびしきをわれは下りし

うしろより帰れと呼ぶ声きこゆ聞きつつわれはなほも下りし

帰れ帰れと呼ぶその声に足とめて泣きつつ走りくる妻を見つ

帰れ帰れ泣き呼ぶ妻の喜びて追付くと見しとき夢のさめたる

よみの坂下りゆくわれを力かぎりとどめし妻を夢に見しかも

死の国へ続く坂道を下る自分を、奥様が懸命に呼び戻してくれた、そんな夢をそのまま連作の歌に詠んでをられます。

その奥様の懸命の看護もあり、廣瀬さんの癌は治療により快方に向かひ、退院されました。ところが定期検査で再発が見つかったのです。

再発の宣告かなし妻と並び息つめて聴くその宣告を

しかも今度は放射線照射では治癒の見込みがなく、生死をかけた手術しか手立てがないといふ過酷なものでした。

天地のまにまに今は生死をかけたる手術受けむとぞ思ふ

手術時刻切迫す

つるきたちやまあま
劔立山天そそり立つ清き姿思ひうかべてわれゆかむとす

呼び出しの声待つといふ松陰のいまはの歌ぞ身に迫りくる

「劔立山」といふのは、立山は「立山連峰」と呼ばれ、三千メートル級の山が連なっております。そしてその中に「劔岳」といふ名高い山があるのです。それらの山々がそそり立つ、清らかな姿を心の中に思ひ浮かべて、手術に立ち向かはうと己を鼓舞されてゐます。

「松陰のいまはの歌」とは、幕末の志士吉田松陰が安政の大獄で処刑される時に詠んだ、呼び出しの声待つほかに今の世に待つべき事のなかりけるかな

の歌のことです。廣瀬さんは常々この歌を愛誦してをられたのでせう。生死をかけた手術に向かふときになって、松陰の気持ちに身に染みて分かった、といはれるのです。

手術は無事に成功し、苦しいリハビリが始まりました。廣瀬さんのリハビリを支へたのも、万葉集でした。

舌の三分ノ一切除されしため、発声思ふに任せず、毎日屋上にて発声訓練を兼ねて万葉集を朗読す、この日もまた 十月三日

万葉歌力の限り誦みゆけどふしづし声はとぎれて続かず

発音しえぬ音韻いくつ舌の根に手術受けたるわが口あはれ

とぎれつつわれは誦みゆく声かぎりわれは誦みゆく万葉の歌

記紀萬葉実朝麻須美潮とひびき萎えゆくわれを奮ひ起たしむ

手術後も奥様は泊まり込みで看病をなさいます。

先生の御著書『萬葉集 その漲る命』には次のやうな記述があります。

〔昭和五十六年、癌研究病院で生死をかけた大手術を受けた時、妻は幾夜も徹夜で看病してくれたが、妻は萬葉の歌「わが背子は物な思ほし事しあらば火にも水にもわれ無けなく」を誦しながら、私を看とつた。小学校を卒業する時、担当の先生から一人に一首づつ萬葉歌を贈られたが、たまたま妻はこの歌を与へられ、それが四十年後、口をついて出て来たのであつた。〕（歌の意味は「私の愛しい人は物思ひなどなさいますな。いざ事があれば火にも水にも私は入りますから」。作者は安倍女郎あべのいらつめ）

手術をされたため、廣瀬さんは流動食や細かく刻んだものを少量づつしか口に入れることができません。それらのお世話を毎日三食、全て奥様がなされるのです。

小学校の時に贈られた萬葉集の歌を、四十年後も覚えてをられ、それを口ずさみながら献身的な看病をなさる。なんと美しき夫婦愛でせう。萬葉集の歌が、お二人の人生の最も苦しい時に、お二人の心の支へとつたのです。

廣瀬さんは病床にあつて、人生の最も輝かしい時を思ひ起されます。

同じき年の二月十四日 皇太子殿下に立山の歴史を説明申上げ萬葉の長歌を

誦せしことも思ひ出づ

日の御子のみまへに侍り萬葉の長歌朗々と聞え上げにき

日の御子も妃もほほゑみ浮かべたまひわが朗誦を聞きたまひにき

たどたどしき舌動かして今誦めば涎垂りくるわが口あはれ

萬葉に立山たちやまに魂打ちこみて生き貫きしわれに悔なし

廣瀬さんの闘病を支へたのは万葉集であり、故郷の霊峰立山と、皇太子殿下（いまの天皇陛下）にお目にかかった時の感激だったのです。

かうして廣瀬さんは見事に癌を克服し、図書館長の職に復帰されます。定年退職後もたくさんの歌を国民文化研究会会員の短歌通信である「澤部通信」に寄せられました。

平成三年五月

長内俊平さん宛の便りのはしに

花ふぶき激しき下道ひとりゆき果てなきいのちを念ひやまぬかも

かくのごといのち散りつつ常若に蘇り咲く大和島根に

語りつぎ嘆き継ぎつつ祖たちのいのちのいきづくよろづ代までに

桜は散ってしまひますが、散るからこそまた蘇り、次の春には花を咲かせます。それと同じやうに、人の命も限りがありますが、語りつぎ、命の絶えるのを嘆きつつも後世に伝えられていくのです。

同じく富山県出身の佐伯彰一さんといふ評論家がをられます。廣瀬さんがご自分の著書をお送りしたところ、その返礼の手紙に、佐伯さんが宮中に参上して天皇陛下にお目にかかれたときのことを書いてあつたさうです。

それによると、陛下は佐伯さんが富山出身だと聞かれて、「廣瀬さんはどうされてゐますか」「廣瀬さんは」と何度もお尋ねになつたさうです。

この時の廣瀬さんの感激は察するに余りあります。

平成三年七月

佐伯彰一氏のお手紙により畏きあたりの御消息を拝承し恐懼感激して

玉の御声うれしくもあるか玉の御声かかれりとときく夢の如くに

辱なくもうれしくもあるか大君はしきりにわれをば尋ねたまひぬ

辱なしうれし畏し大御心にかそけきわれをとどめたまふかも

高照らす日の御子まばゆし燦々とかそけきわれにいそそぐ御光
まさに手の舞ひ、足の踏むところを知らずといふお喜びやうです。

廣瀬さんはこの年、平成三年八月にはこの合宿教室の壇上にも立たれ、お話をされました。

合宿感想の歌（十九首連作から。平成三年『日本への回帰』第二十七集所収）

くりかへす君が代のメロディ正面の日の丸大きくそぞろうれしも

ユーモアと笑ひまじへて説きませば岩戸あくること皆笑ひつつ

国際情勢ただごとならず息つめて一言も洩らさじとのり出してきく

班別の討議にわれも加はりつ息つめて聴く若き人の声

坐りつづけ足腰痛し頭痛しいまは眠らな手足のばして

一人一人の短歌をめくりよき意見次々にいで座ははづみつつ

己が歌に感極まりて泣きむせびひそかに座を立ちかくれゆく人

人泣けばわれも泣きつつ続けゆく歌の添削かなし短歌は

なつかしき友らとかくて別るとも又々も逢はむ幸くまませ

そして天皇陛下が御病気になるのと、涙を流してご平癒を祈られるのです。

平成十五年二月

天皇陛下御病気の御由承りて（平成十四年十二月）

病みますときくぞゆゆしき心さわぎ何も手につかず涙こみあぐ
天地の神たちいそぎ集ひに集ひわが大君を護らせたまへ
にこやかに常の如くに務めたまふ御姿を泣きてテレビにぞ見る

歌と共にあった廣瀬さんの御生涯は、まさに万葉歌人そのものでした。

平成十年一月

日の本のまことの魂いのちかけて歌はむとぞおもふ虎の吼ゆる如

平成十七年十月、廣瀬さんは惜しくも数へ年八十四歳で永眠されました。

私たちの大先輩でいらっしゃる廣瀬誠さんの御生涯とお歌をご紹介しましたが、廣瀬さんの歌は、まさに魂の底から言葉が迸り出たやうなお歌です。

皆さんも日々、歌をお詠みになって、歌と共なる人生を送っていただきたいと思います。
ご清聴ありがとうございました。

短歌入門

創作短歌全体批評

(公社) 国民文化研究会副理事長

IBJL東芝リース(株) 監査役

小柳志乃夫

第一班

朝の光の輝き 国民文化研究会副理事長 小柳志乃夫

夏の輝き 国民文化研究会副理事長 小柳志乃夫

秋の輝き 国民文化研究会副理事長 小柳志乃夫

冬の輝き 国民文化研究会副理事長 小柳志乃夫

春の輝き 国民文化研究会副理事長 小柳志乃夫

夏の日差し 国民文化研究会副理事長 小柳志乃夫

秋の風 国民文化研究会副理事長 小柳志乃夫

冬の雪 国民文化研究会副理事長 小柳志乃夫

春の桜 国民文化研究会副理事長 小柳志乃夫

夏の海 国民文化研究会副理事長 小柳志乃夫

秋の月 国民文化研究会副理事長 小柳志乃夫

冬の星 国民文化研究会副理事長 小柳志乃夫

第63回全国学生青年台歌教室(西日本)

歌稿

(第一回)

国民文化研究会副理事長 小柳志乃夫

はじめに

批評と添削

をはりに

はじめに

昨日は、猛暑の中の散策で、しかも短歌を創作するといふことで、大変ご苦勞さまでした。その中でもかくも参加者の皆さんが短歌を作られて、かうして全員の歌が歌稿となって配られました。これは、普通の集まりではなかなかないことで、この合宿ならではのことですが、ありがたいことだと思ひます。

さて、この後、班別の相互批評の時間に入るわけですが、その時間はこの合宿で最も楽しい一コマになると思ひます。昨日の北村公一先生の短歌創作導入講義で、広瀬誠先生の短歌が紹介されましたが、その中の「合宿感想の歌」といふ連作に、相互批評の楽しさを詠まれた短歌がありました。

一人一人の短歌をめくりよき意見次々にいで座ははづみつつ

といふものです。班の中で、班員の歌を巡って意見をかはす、皆でその歌に心を寄せ合つて、そこに沸き立つやうな、心のはづむ時間が得られる。その情景を詠まれたものでせう。

また、『短歌のすすめ』の中でも、著者の夜久正雄先生が詠まれた、

おたがひにうたのあやまちただしつつなごむ心よ何にたとへむ

といふお歌が記されてゐます。さういふ「心のはづむ」「なごやかな」楽しい時間をこの後、皆さん経験して頂けるものと思ひます。

昨日、北村先生は、短歌創作の意義として「心情、感情の洗練」といふことを取り上げられて、自分の心と向き合つて、その心にびったり重なる言葉を選ぶことが心の修練になるといふお話をされました。実は、この相互批評といふ時間はみんなが協力しあつて、作者の心とびったりの表現を皆で探すといふものです。ですから、批評といつてもこの歌はダメだといった話ではなくて、この作者はどんな思ひでこの歌を作つたのだらう、と皆の心を寄せ合つて作者の心に相応しい表現を見つけていくものです。その作業自体が楽しく、そしてびったりとした言葉が見つかった時に大きな喜びが生まれるだらうと思ひます。

批評と添削

それでは、まづ、お手元の歌稿で、第一班の冒頭の歌を取り上げます。

朝からの講義に耳を傾けれど重たき験に抗いがたし



様子はわかりますね。講義を聴かうと思ふのに眠気が襲ってくる、といふのです。ただよく読んでいくといくつかわからないことも出てきます。まず、最初の「朝からの講義」といふ言葉ですが、これは、朝からずっと講義が続いて集中力が続かない、といふことなのか、あるいは普段は朝寝坊してゐるので、朝からの講義はまだ眠いといふことなのか、といふ点です。その次の「耳を傾けれど」——古文の活用では「傾けれど」——といふ言葉についても、「耳を傾ける」といふのはよく聞く表現なのですが、辞書を引くと「注意して聞く、熱心に聞く」とあります。とすると、「耳を傾けれど」——熱心に注意して聴くのだが——といふ表現でいいのか。正確には、「耳を傾けむとすれど」——注意して聴かうとするのだが——といふことではないかと思ひます。さらに、「重た

き險に抗ひがたし」といふ「抗ふ」といふ言葉も実際にどこまで抗ったのか、眠気に抵抗したのについて敗れた？といふことなのでせうか。そのあたりは班の中で話して頂ければと思ひますが、ここでは次のやうに直してみました。

朝から続く講義に耳を傾けむとすれども險の重たくなりぬ

先ほど申したやうに「朝から続く講義」ではなく「朝の講義」が正しいのかもしれませんが、そのままでは字足らずになるので一句目の「朝から続く」を「朝に始まる」と変へればよいと思ひます。ところで、この合宿で朝の講義といふと昨日の瘦せ我慢の説のご講義でしたので、もうちょっと作者にも瘦せ我慢を期待しなかったところですか。もっとも眠気を自分で我慢するのも難しいもので、そこは班員で協力して作者の目を覚ましていただければと思ひます。

○
古いにしへの大きな屋敷に訪れて久しきいにおいにしばしゆたう

昨日の伊藤伝右衛門邸見学の折の歌でせう。結句の「たゆたう」——歴史的仮名遣ひでは「たゆたふ」——はゆらゆらと動いて定まらないといふ意味です。普段使ひ慣れない言葉なので、作者は本当は「たたずむ」としたかったのではないかと想像しました。感動のポイント

は「久しきにおい」のところにあるのではないか、と思ひますが、そこがよくわからないのです。

古いにしへの大きな屋敷を訪れてなつかしきにほひにしばしたたずむ

と直してみました。なつかしい、といふのはつきりとしなない。感動のポイントを見定めて、相互批評の中でびったりの言葉を見つけてもらへれば、いい歌になるのではないかと思ひます。

○
開会式前の日没を見て

あかく燃ゆ夕日に心あらたにしいざ学ばんとす過去からの励まし

昨日の開会式前のこの会場から見た日没の景色は見事でした。博多湾の島に真つ赤な夕日が沈んでいって、左手遠くには糸島富士の美しい姿も夕空に浮かんでいました。作者もその光景をご覧になったのでせう。「あかく燃ゆ」は終止形ですので、ここでは「夕日」につながるやうに「あかく燃ゆる」とします。この短歌で私がいいと思ったのは、次の「心あらたにしいざ学ばんとす」といふ作者の意欲に満ちた表現です。ただ、よくわからないのがその後の「過去からの励まし」といふ言葉です。昨日の導入講義で一首一文といふ短歌の原則を

紹介されましたが、ここでは「いざ学ばんとす」のところで一首が切れてしまつてゐて、最後に「過去からの励まし」といふ言葉がボンと出てくるのですが、その意味がよくわからないのです。とりあへず次のやうに直してみました。

あかく燃ゆる夕日に心あらたにしいざ学ばんとすこの合宿に

ただ、燃ゆる夕日に心をあらたにする、といふつながりがわかりにくいかもしれませぬ。例へば、

あかあかと燃ゆる夕日を眺むれば新たに学ぶ力わき来る

としたら夕日をちっと見つめたときの経験に近づいてわかりやすいやうに思ひます。夕日が輝きながら沈んでいく、大自然の壮大な光景を眺めるうちに、自分のもやもやしてゐた心が解き放たれる、さういふ風に、連作も用いてさらに具体的に詠むこともできるやうに思ひました。

○
飯塚に美しき庭そびえ立つ先人のわざ日本の心

この歌も伊藤伝右衛門邸での作でせう。山がそびえるとは言ひますが、庭がそびえ立つといふのはどういふ様子かわかりませぬ。あるいは「そびえ立つ先人のわざ」と後ろにつくの

でせうか。この歌の問題は、さきほどの一首一文といふ原則から見ると、「飯塚に美しき庭そびえ立つ」「先人のわざ」「日本のこころ」と一首で三文の形になってゐる点です。一首二文でもいい歌はあるのですが、その場合も歌の焦点は一つに絞られるべきです。一つの感動に集中することが作歌の上での一首一文といふ原則につながると思ひます。その点でこの歌はバラバラになってしまつてゐるのです。これを一文にするには、例へば、かうしたらどうかと思ひます。

飯塚の美しき庭に日の本の先人の技を仰ぎ見るなり

もとの言葉をつなげたやうな形ではあるのですが、これであれば一つの歌の形になると思ひます。これは、「そびえ立つ」といふ言葉を先人の技を仰ぎ見るといふ感じかなと思つて直してみたものです。それでも「先人の技」がどういふものなのかは、わかりにくいやうです。感動のポイントが分かりにくいので、もう少し見直す必要があると思ひます。

また、最後の「日本のこころ」といふ表現が、――大事な言葉であるがためにますますさう思ふのですけども――ここではムード的といひますか、抽象的なのです。具体的に何を詠みたいのかがわからないのです。むしろ具体的なものを見つめる中に、日本のこころといふものが表現されてくるのではないでせうか。昨日の折田豊生先生のご講義で「蚤虱馬の尿すのみしむ」しど

る枕元」といふ芭蕉の俳句を示されて、俳句でも短歌でも「核心を外さずに具体的に表現すること」が大事だと仰いました。「蚤虱馬の尿する枕元」といふ極めて具体的な情景の中にその核心が表現される。この歌でも伊藤邸での具体的な情景を見つめる中に、作者の「日本の心」や「先人の技」に対する思ひが現れてくるのだらうと思ひます。この具体的なものを見ていくといふ点に短歌を勉強する大事な意味があると思ひます。僕らはともすれば抽象的なものを考へがちです。『短歌のすすめ』には、小田村寅二郎先生の次の言葉が引用されてゐます。

《和歌をよむにあたっては、直接に感じたことをありのままに「言葉に定着させる」ことが大切で、それを「概括的なまとまりにもっていつてしまつて言葉に綴る」のはいけない、なるべくそれを避けよということです。ところがそうはいつても、そのことが、その人の「概念」になつてしまつと、まただめになつてしまつのです。「直接に感じたままを言葉にして言う」ということは理解できていても、いつしかそれが空しい評語になる危険もあるわけです。それをお互いに注意し合い、客観的に批評し合うところに、和歌創作とその相互批評の、永遠に生き生きとした意義が存在する、と私は思うのです》

(同書二十三頁、仮名遣ひママ)

つい僕らは馴れた言葉を使つてそこで安心してしまふところがあるのですが、それをどう生きた言葉にするか、それは、僕らがその対象と心の動きをもう一度よく見つめるところから始まると思ひます。僕らが注意すべき点であつて、そこに短歌の創作と相互批評の大事な意義があると書かれてゐるのです。

○

古への松陰先生に学びたる篠栗の宿絆深めし

「篠栗の宿絆深めし」と、この合宿で班員の絆が深まったといふお言葉をうれしく読みました。しかもその絆が学問を通して深まったといふことで、作者は大変稀有なご経験をなさつたのです。ただいくつか修正すべきところがあると思ひます。まづ松陰先生は歴史上の人物ですから「古への松陰先生」の「古へ」は不要でせう。作者は班別の輪読を通してかうお感じになつたと思ひますので、

遺されし松陰先生の文章を共に学びて絆深まる

と直してみました。これも松陰先生のある言葉を通して班員の共感が生まれたといふことであれば、その部分を具体的に詠みあげられたらいいと思ひます。学問を皆でやつていく中で絆が深まる―輪読といふのはさういふ世界で、昨日の折田先生の仰つた「共同研究」といふ

喜びがある。短歌の相互批評もまさにさうだと思ひます。心を寄せ合つていい表現を探していく作業であり、そこにまた絆を深めていつていただきたいと思ひました。

以上、班員の方のお歌についての感想を述べさせて頂きました。私自身は歌人でもありませんので、一応のご参考として頂いて、班別の相互批評で自由に意見を述べあつて、いい歌になるやう努めて頂ければと思ひます。

次に参考に国文研会員の歌をいくつかご紹介します。

空高く雲は流れて夏山の緑しるけしここ南蔵院

夏山の緑背にして横たはる釈迦涅槃像何おほすらむ

運営委員長廣木兄登壇

ひとしせ

一年をかけて備へし合宿を迎へて君今壇上に立つ

ノーベル賞作家の境遇たどりつつ日本なるものを問ひ直すかな

西洋に翻弄され来し近代の見直し迫る口ぶりつよし

若きらへ託す思ひは自づから嘯んで含める語りになじむ

体調の万全ならずも一年を努め来し君の功称へむ

○

次は、富山で「高志のうた」といふ歌だよりを毎月編集、発信されてをられる岸本弘さんから、この合宿に寄せられたお歌です。

西日本合宿に集へる友らへ

日の本の民とし生くるよろこびを心ゆくまで語りませ友ら

この合宿で日本人として生まれた喜びを心ゆくまで語ってください、と我々に呼びかけられてゐます。先ほどの運営委員長を詠まれた歌もさうですが、さういふ合宿を支へてきた様々な人の思ひのこめられた歌稿です。どうぞ大切に読んで頂ければと思ふ次第です。

をはりに

最後に、短歌創作の意義について、二、三申し上げたいと思ひます。

最初に申上げたやうに自分の心と言葉を合はせていくといふ大事な意義に加えて、

五七五七七、あるいは、正仮名遣ひ、といふ形を守ることも大切なことだと思ひます。形を継承していくことは、日本の文化を継承していくことに他ならないわけで、この本則を守つていくやう努力していただきたいと思ひます。

また、短歌を作ることによつて、先人の詠んだ歌、或いは天皇のお詠みになつた御製を味はふことが少しづつできるやうになると思ひます。短歌の創作には先人の心に近づくといふ意義があるのです。折田先生はご講義の中で、覚えることは味はふことにほとんど等しい、と話されましたが、是非、いい歌を覚えていただいで、五七五七七のリズムに慣れ親しんでほしい。それには声を出して読むことが大切です。この合宿の道統では明治天皇の御製を拝誦するといふ勉強が続けられてきました。明治天皇はご生涯に九万三千首のお歌を詠まれてをりますが、その一首を毎朝声に出してよむだけで、生きる力を頂けるものと思ひます。ぜひ、さういふやり方で短歌の学問に取り組んで頂ければと思ひます。

この後の短歌相互批評の時間を班員の皆さんで楽しんでいただくことを願つて、全体批評を終はりたいと思ひます。

ご清聴ありがとうございました。

講義

日米同盟の行方と中国への姿勢

評論家

江崎道朗



- 一、日本をより良くする「学問」といふ存在
- 二、トランプ「共和党」政権の対北朝鮮政策、四つの課題
- 三、トランプ政権の世界戦略
- 四、中国の軍拡を支へてコンドミニアムを招来するのか、それとも日米連携でアジアの自由を守るのか

一、日本をより良くする「学問」といふ存在

① 学生時代、小柳陽太郎先生、山田輝彦先生との出会い

今の私が今日あるのは、国民文化研究会の小柳陽太郎先生、山田輝彦先生のお二人のおかげです。

このお二人との出会ひは素晴らしいものでした。

私は現在、評論家として政治や外交の評論活動をする傍らで、国会議員の政策立案にも携はってをりますが、私がなぜそのやうな事をするやうになったのか、ひとへに先生方のお陰なのです。

私が大学二年の時、政府自民党は、謝罪外交を推進してゐました。「先の戦争は侵略戦争であり、そのことを教科書にも記述します」と宮澤喜一官房長官が謝って談話を出したので、日本の歴史教科書が悪くなっていくことに憤つてゐた私ですが、どうしていいのか、分からぬ。その頃、小柳先生は九州造形短期大学に勤めてをられたので、研究室に押しかけて質問攻めにしました。そのうち、ご自宅のある香椎にも押しかけられるやうになりました。奥様にはご飯まで食べさせていただきました。

その折の小柳先生の話を今でも覚えてゐます。

私が中国・韓国と政府自民党の批判をしてゐたら「江崎君、思想とは豊かなものだよ。君の言葉を聞いてゐると、心がぎすぎすしてくる。それでは誰も耳をかさないし、説得もできない。君がしなければいけないのは、政府自民党の悪口を言ふことではなく、国会議員や文部省や外務省の人達を説得してきちんとした歴史観の外交や教科書を作るやうにさせていくことではないのか」と、二十歳の学生である私におっしゃられたのです。

「今の僕にできるとは思ひませんが」と返事をしましたら、「君はさうやって逃げるのか、さうやって逃げてきたから日本は良くならなかつた。吉田松陰先生は若くして為政者に立ち向かつていった。君は偉さうな事を僕に言ったが、実際にやる気があるのかね」と言はれ、衝撃を受けました。

それ以来、外から人を批判するより、実際に目の前の政治家の先生や外務省の人達をいかに説得するのか、彼らを説得するだけの力を身に付けなければいけない、と考へるやうになりました。マスコミ批判もほとんどしなくなつた。マスコミをどのやうに説得するのかを考へるやうになつた。政治家を批判するのではなく、彼らをどう説得するのか、そのためには自分がどのやうな見識を持たねばならないか、そのことを考へなければいけないんだ、そ



れが吉田松陰や小柳先生につながる生き方であり、志の定め方であることを繰り返し教はりました。

その後、懸命に研鑽を積みながら、平成十七年から十八年には、教育基本法改正運動に携はりました。多くの国会議員を説得するのは大変でした。やうやく改正の運びになった時、小柳先生に電話で報告し、博多駅近くのホテルの喫茶店で会ふこととなりました。

たまには褒めて下さるのかと思ってみたら、「法律と制度を変へれば教育が立ち直るなんて馬鹿な事を君は考へてはゐないよね」と言はれた。「教育とは人なのだ。人を造る事が大事だ。法制度を理解できる教育者をどう造るのか、そこまでやらねばだめだ。そこについて君はどう考へてるのか。君自身と一緒にやってくれる教師を何人育てるのか、それは

「どうだ」と言はれた。

「先生、僕は政策マンで教育者を育てる立場ではありません」と返事したら、「さうやって君は逃げるのか」と言はれた。泣きたくなるくらい厳しい先生でした。本当に世の中を変へるには、目の前の一人を変へる力を（国文研ではマンツーマン運動と言ってるが）持たねば世の中を変へていくなんてできない。

もう一つ言はれたのは、「外務省はダメ、文部省はダメ、と不信を煽るのは簡単だ」といふことでした。さうではなく、「この政治家は信頼できる、文部省のこの人は信頼できる、さうやって信頼関係を築きながら一緒にあって日本を支へていく仲間を造る事。それが出来るやうになることが日本を立て直すことだ。さういふ志で我々が戦前からやってきたのはこのやうなマンツーマン運動であり、国民同胞の運動であった。君がやってきたやうな上っ面で法律や評論だけで世の中を変へようと考へてゐては駄目なのだ」と言はれました。本当に堪へましたが、心から感謝してゐます。

それから、小柳先生からは何か問題があると早朝の六時頃に電話がかかってきました。

「江崎君、君はこの新聞報道を見たかい、君はどう手を打つのかね」

「いや、私は民間団体の一職員なので、僕に言はれても」と思ひましたが、「解りました。

自分で出来る事をやります」と答へざるを得なかつた。本当に容赦なく指導をしてくださいました。おかげで、どう仲間を作るかを懸命に考へ、行動するやうになり、二十歳も年上の国會議員たちといろんな話ができるやうな信頼関係を築くことができました。

国會議員の方々から、国家的な課題、外交的な課題について「君はこれについてどう思ふか」と電話がかかってくるので、「それではメモをお出しませう」、「よし、頼むぞ」といった形の関係を作ることができるようになったのです。

国會議員と話をするのは、本当に力が必要なのですが、この力をどのやうにして付けたのか。これも、小柳先生たちのご指導のおかげなのです。

私が大学生の時のことですが、ある時、小柳先生に「自分に才能があるとは思はれないがどうしたらいいですか」と聞いたことがあります。

「君に力がないのは良く解つてゐる。ただ、幸ひなことにすばらしい叡智を持った先人や先輩がわが国にはたくさんいらっしゃる。その叡智を身に着けるやう努力すれば、力をつけることはできます。君の片々たる知恵や理解で物事ができるといふ傲慢は捨てなさい。今のあなたには力がないから理解できないだらうが、すばらしい叡智が先人の発言、文章にこめられてゐる。それを必死で読み解くやう努力をしなさい」

それで「そのためにならうしたら良いか」と聞きましたら「尊敬する先人の本を一冊丸ごと写すことだ」とおっしゃいました。「ああさうか」と思つて小柳先生の『戦後教育の中で』と山田輝彦先生の『明治の精神』の二冊を一生懸命、筆写しました。写してみると解らないことだらけだったので再び両先生をお訪ねしてお聞きしました。

これも大学生のときのことですが、山田先生の北九州のご自宅に行きまして良く解らないところをいろいろと質問しました。あるとき、靖国神社の問題で「最高裁判決の目的効果基準は知ってるか」と聞かれて「良く解りません」と答へました。

「君はこんなことも知らないで私のところに来たのか」と言はれたのですが、私も必死なので、「知らないから聞きに来たんです」と申し上げたら、山田先生は苦笑されて、「まあ、それももつともだ」といふことでビールとワインを出してくださつてお話を聞くことになりました。

その時、山田先生は、今でも覚えてゐますが、「自分の言ふことを正しいと思はなくてよい、その必要はない、ただし、正確に聞いてくれ」と言はれました。

「正確に聞くには敷島の道・短歌を詠みながら自分の心と言葉がいかに遊離してゐるかを自覚して、自分の心を正確に表現することがいかに大事かと言ふことを理解しなければ、相

手の事を正確に聞く力も身につかない。短歌を勉強してゐるかね」

「合宿教室で一通りの勉強してゐるつもりです」

「勉強してゐるつもりでは駄目。ちゃんと歌を詠んで自分の心を言葉で表現する力を身につけなければ、相手の言つてゐる事を正確に理解できなければいくら本を読んでもザルだよ」

私も短歌を詠みますが、自分の心を真に表現するのは大変ですが、山田先生の教へがずっと心に残つてゐます。短歌を修行することで自らの心のゆらぎが解るやうになり、相手の心のゆらぎも少しずつ理解できるやうになります。

ある国会議員と話をする際に、一時間の時間をもらったとして、その内四十分は、その議員の考へを整理するやうにしてゐました。

「先生はかういふ事を言ひたいんですか」「あ、さうだ、さういふ事を言ひたいんだ」みたいに議員の先生の考へを正確に理解しながらその奥にあるものまで言葉に表現していくのが私の仕事でした。

おかげで国会議員の皆さんからは「江崎は俺の言はうとしてゐることを奥まで理解できる奴だ」となった。このやうにして国会議員の方がいろいろと相談してくるやうになり、逆に私の提案も賛同してくれるやうになった。政治家を動かすのは、知識だけではないのです。

知識だけでは世の中は動かない。信頼関係が大切なのです。そして本当の信頼関係は、言葉と言葉のやりとりから生れてくる。相手の言葉を正確に聞かうとつとめる営みから相手に対する理解が深まり、そこに強い信頼関係が生れ、人を説得する力も生れてくる。

この相手の言葉を正確に理解しようとしてつとめる営みがいかに大事か、さういふ学問を教へられたのが国文研だった。

明日、皆さんが短歌を詠み、相互批評をしていただければ、自分の気持ちを正確に言葉に表現することの難しさ、相手の気持ちを正確に受けとめることの大変さが解ると思ひます。しかし、自分の気持ち、相手の気持ちを正確に表現する力が、政治家を動かす、官僚を動かす上で必要な力なのです。学生時代に、国文研の先生方のご指導をいただければ、今みたいな仕事はできなかつたでせう。

② 政治を正す学問の使命——人生を貫く志（問題意識）に出会へた幸福

国文研では、人生を貫く志にも出会へることができました。ここで小田村先生の言葉を紹介しようと思ひます。

小田村先生は戦前に日本学生協会を作られた国民文化研究会（昭和三十一年発足）の創始者

ですが、昭和十二年、シナ事変が始まった年に東大法学部に入学されてみます。二・二六事件、五・一五事件などを含めたいろんな事件が起きて、政治が混乱してゐた時代に、青年であつた小田村先生たちは、なぜ政治が混乱してゐるのか、懸命に模索されてゐました。

この戦前から先の戦争に至る歴史について、なぜ、ああいふ戦争になつてしまつたのか。戦後、日本では「日本は侵略戦争をした」と言はれてきたので、大学生の当時、私は「日本は侵略戦争をしてゐない」と反論してました。

ところが、小柳先生は私に対して、「なぜあのやうな事件や戦争が起きたのか、何が問題であつたのか、政治のどこに問題があつたのか、きちんと究明することが大事だ」と言はれた。

戦前、大学生であつた小田村先生は、当時の日本政府に問題があつて軍人が政治に介入しなければならなくなつたこと、その政治が混乱した背景は何か、それは政治を糾すべき学者、政策の間違ひを指摘するべき学者の側がその役割を果たせなかつたからだ、と指摘されてゐた。

「先の戦争は侵略だ」「いや侵略ではない」といった議論もあるが、それ以上に、「日本がきちんとした道を進むために、政治をただすべき学問はどうあるべきかを考へるべきだ」と、

小田村先生はその著『昭和史に刻むわれらが道統』に書き残されてゐます。

当時、学生だった私はこの小田村先生の御文章の意味するところが解らなかつた。

二・二六事件など青年将校、軍人が政治に関与せざるをえなかつた理由は何なのか、どうして政治が混迷したのか、どうして学者が的確な答をだせなかつたのか、このことをきちんとして説明できなければ再び同じまちがひを犯すことになる。あの戦争に至る経緯の中で我々はこのやうにふるまふべきであつたのかを見出さなければならぬ、といふことを学生の時に考へました。

それ以来、社会人になつてからも、先の戦争に関係する本を買ひ集めては勉強し、見解をまとめることを三十年、こつこつとやって来ました。そしてやうやく『コミンテルンの謀略と日本の敗戦』（PHP新書）を出版しました。

小田村先生たちが戦前、何と戦つてきたのか、なぜ戦前の日本の政治は混迷したのか、を客観的資料を加へて、描いた本です。

ある意味、私は三十年間こだはり続けるテーマを小田村先生にいただいたわけです。何と幸せなことだらうか、と思ひます。おかげさまでこの本はアマゾンの日中・太平洋戦争部門で一位をとるなど、ベストセラーとなり、山本七平賞の最終選考にも残りました。小田村

先生たちが戦前、取り組んできた活動がいかに重要なことであつたのかを多くの人に知ってもらへれば、少しは先生方のご恩にお返しのできたのかな、と思つてをります。

③「学問」とは、知識を増やし見識を高めるとともに、自分の心を鍛へること

若い方々にぜひ理解してもらひたい。学問とは何か、といふことを。学問といふと知識、見識を高めることといふイメージですが、小田村先生たちの学問に対する認識を学生時代に知つて衝撃的でした。

小田村先生はかうおっしゃられてゐます。

《人間の人格》についての自己認識のしかたといふのは、各自で自己自身を磨けば磨くほど、自分の人格が向上したといふ意識が高まつてくるのではなくて、自分といふ人間が、いかに未熟・未完であるか^〴を、より一層具体的に、より一層はつきりと知るやうになるものである。修業を積むほど、人間は、いかに自分は欠点だらけか^〴が、よく判るやうになるものである。(中略)

そしてもし、自己を磨けば磨くほど自分自身が未熟・未完であることにいよいよ気づく、といふことになれば、自分にとつて一番大切なことは、学問における、客観的な知的認

識を高めていくこと以上に、自己の心の中味——主観——を、より正直で素直な心に整へていく。ことの方が、はるかに根本的な学問としての要請になつてくるはずである。なぜならば、自分の心の中味に向けての自己反省が、常に厳しく、かつ敏感であり得てこそ、人は、他人の心の動きを、正確に、誤らずに受けとめる力を養ひ得るからである。(中略)とにかく、学問に励むといふことは、万人の苦しみ悲しみを、自分の心の中に一倍敏感にうけとめ得るやうに自分の心を鍛へていくこと、を意味することではなければならぬ。》

(小田村寅二郎『昭和史に刻むわれらが道統』二百七十一—二百七十一頁)

僕はこの文章を読んで、あゝと思ひました。

要は、学問を積み積むほど自分の欠点が見えてくるやうになる。逆に言へば、学問をちゃんとやれない人が自分の欠点を解らずに独善に走る。いろんな人の意見を取り入れることもなく、廻りの人の意見を尊重することもなく突っ走つてしまふ。

本当に学問、自分のありやうを考へながら心を磨いていくと、自分の未熟さ、力不足が解ってくる。解ってくるほど自分よりすばらしい見識を持った人達の力を借りて行きながら、共に、今の日本を立て直していかうとの和が生まれてくる。

僕自身、小柳先生に言はれたやうに才能はありませんが、その分、いろんな方たちの叡

智を受け入れるやう努力してきました。今、私と一緒に仕事をしてる人達がたくさんいらつしやいます。さういふ方々の叡智をいかに生かすかの観点で仕事をしてゐます。

米中貿易戦争でも、経済産業省の方や、経済界の方と話しながら、どうやって難局を乗り越えて行くのか、素直に教へて呉れ、わからないことについて詳しく説明してくれませんか、と頼む。喜んで教へてくれます。そのやうにして得た知見を政治家に理解してもらひながら、国の政策に反映してもらつてゐる。このやうな事がやれるのも先生方に教はった学問観、人生観があつてこそそのものです。

若い方々に考へてもらひたい。

目の前に国会議員があつたとして、このことを解つてもらひたい、と説得することを考へてみてください。自分にできるかどうか、説得するのは大変なことです。でもそれを小柳先生はやれと言はれた。その通りだと思ひました。

二十歳代の後半、のちに経済産業大臣になる中川昭一先生たちと安全保障の研究会で勉強しました。中川先生は安全保障を勉強するなら、現職の自衛隊の幹部や米軍の幹部とやらう、となつて米軍の人達にも来てもらつて勉強することになった。米軍の関係者から「君、おもしろいね」となつてつながりを持つやうになった。

安全保障に関して新聞にどう書いてあるか、ではなくて、現場の自衛隊の幹部たち、米軍の幹部たちが何を考へてゐるか、実際の現場では何が問題になってゐるかを理解しなければ日米同盟や国際政治の議論はできないと私は考へてゐたので、その後も、米軍の幹部やその関係者たちと付き合つてきました。幸ひなことにそのときに付き合つた米軍の関係者たちが今やアメリカのトランプ政権の中で重要な役割を果たすやうになってゐるのです。

昨年北朝鮮有事の問題がありました。「斬首」作戦などといった報道があつた時に、米軍関係の仕事をしてゐる友人から、「日本の新聞は大騒ぎしてゐるが、日本のメディアは米軍の実情を理解してゐない」と言はれた。そして、「日本の政治家たちが日本のマスコミ報道を信じてゐるとするならば、それは困る」と。「じゃ、どうしたらいい？」と聞いたなら、「それなら、米軍の太平洋軍司令部がハワイにあつて対北朝鮮攻撃の準備を担当してゐるので、国会議員に来てもらひたい」といふことになつた。

それで国会議員数名とハワイに行きまして、実際の日米同盟がどうなつてゐるのかを、米軍幹部とその関係者から直接、聞いてもらった。

実は戦争は無茶苦茶、お金がかかる。戦争は武器弾薬・燃料など大量に物資が必要。北朝鮮を全面的に爆撃しようとしたら、その費用は十兆円近くかかるといふ話もあるくらゐです。

昨年四月から五月にかけて米軍が北朝鮮を爆撃しようとしてゐるといふ報道が流れました。米軍の爆撃機の発進基地は、グアムのアンダーソン基地です。このアンダーソン基地に北朝鮮爆撃のための武器弾薬の在庫はどのくらゐあるか、概算ですが、北朝鮮の核軍事施設は千二百ヶ所あり、一ヶ所に百発のミサイルを撃ち込むとしても、十二万発のミサイルが必要ですが、そんな数のミサイルがグアムにあるはずがない。それだけのミサイルを保管する武器庫ありません。数ヶ所の軍事施設を爆撃するくらゐなら、いつでもできますが、本格的な爆撃をするための物量を米軍は持つてゐないのです。

要するに、戦争は物量なのです。その物量がグアムのアンダーソン基地にないのに、日本のメディアはトランプが北朝鮮を全面爆撃すると報じてゐる。それくらゐ、日本のメディアは、米軍の現場と現実を知らないのです。

それでなくとも、米軍の武器・弾薬の在庫は少なかつたのです。なぜ、さうなつたかといふと、オバマ民主党政権が米軍の予算をカットしたからです。そのため、武器・弾薬の在庫は僅かになってしまった。物量不足だけではありません。軍艦、戦闘機には頻繁に修理、メンテナンスが必要ですし、乗組員には訓練が必要です。ところが訓練の予算も削られてしまったため、まともな訓練も受けずに軍艦に乗せられて、あちこちで計器の扱ひを間違つて

事故を起こすやうになってしまつてゐる。

このやうな米軍がほろほろになつてゐる現実を知らずに、トランプ政権が北朝鮮を爆撃する筈だと、とんちんかんな報道を日本ではしてゐるのです。かうした実態を直接、米軍幹部たちから聞いて、政治家の皆さんもびっくりしてゐました。

ある政治家は、防衛省や外務省の官僚たちから聞いてゐる話と違ふではないかと驚いてゐましたが、全くその通りなのです。日本の役人たちの話を聞くだけではだめで、政治家自身も米軍の実情を知らうとしなければ、日米同盟は機能しないし、そもそも正確な国際情勢認識を持ってないのです。

オバマ政権のもとで、ほろほろになつたのは米軍だけではありません。インテリジェンス、情報機関もまた、ほろほろになつてゐたのです。

北朝鮮の金正恩・朝鮮労働党委員長を爆撃するといふが、そもそもどこにゐるのか、どれが本物なのか、影武者はいっぱいゐます。それを調べるのがインテリジェンス機関の仕事なのですが、オバマ民主党政権時代に、その予算は大幅に削られ、北朝鮮に関する情報が圧倒的に不足するやうになつてしまつたのです。そのため、二〇一六年一月に共和党のトランプ政権が発足した当時、金正恩の居場所や動静などに関する情報があまりなかったと言はれて

みます。

そこでトランプ政権は、米軍とインテリジェンス機関を再建するために、防衛予算だけでも日本円で換算すると、六十二兆円から六十九兆円へと増やしました。我が国の防衛予算は、僅か五兆三千億円です。たった一年で日本の一年分以上を増やした計算になります。二〇一七年は更に八十兆円へと増額します。

この増やした予算を何に使ったか。グアムのアンダーソン基地で武器弾薬の倉庫を作り、ミサイルの備蓄を増やしたり、爆撃機の格納庫や整備工場を新設したりして、北朝鮮を爆撃できる体制を懸命に整へてゐるのです。ハワイの米軍基地を見せてもらいましたが、オスプレイが十数機も配備され、巨大な格納庫が新設されてみました。このやうに物量を揃へなければ、軍事攻撃、戦争はできないのです。

トランプ共和党政権のもとで、インテリジェンス機関も再建されました。CIAがコリア・ミッションセンターといふ組織を作り、北朝鮮から韓国に逃げてきた脱北者たちを徹底的に調査し、北朝鮮の内部情報を分析したのですが、その組織のトップのアンドリュース・キム氏が二〇一八年六月十二日、シンガポールで開催された米朝首脳会談の段取りをしました。では、なぜ金委員長は、トランプ大統領との首脳会談に応じたのか。北朝鮮の軍事施設

には地下五十メートルの施設がたくさんあり、核ミサイルでは破壊できません。核爆弾は地上を破壊するだけで、地底には届かないからです。

そこで、バンカーバスターといふ、地下奥深くまで破壊できる特殊なミサイルを搭載できる爆撃機を、トランプ政権は二〇一八年一月ころまでに、グアムに配備した。金委員長が地下に隠れても、攻撃できる体制をトランプ政権が整えた途端、北朝鮮はアメリカとの会談に応じるようになったのです。本気でトランプ政権は、金正恩を殺すつもりだと分かったから、外交交渉に応じたとみるべきでせう。

二、トランプ「共和党」政権の対北朝鮮政策、四つの課題

このようにトランプ政権は、二〇一七年の春から、北朝鮮の核・ミサイル開発を非難してきましたが、二〇一八年秋の時点で、北朝鮮を攻撃しなかったのは、四つの課題があったからです。

第一が、オバマ・リスクで、これまで述べたやうに、オバマ民主党政権のもとでの軍縮で、米軍とインテリジェンス機関がぼろぼろであったため、攻撃できなかつたのです。

第二が、韓国リスクです。二〇一七年五月に誕生した文在寅政権、これは極左政権です。社民党の福島瑞穂先生を大統領にしたやうなものです。さまざまの政権です。この文大統領は、政権を取った後、まづ国家情報院の活動を停止させました。この国家情報院は、韓国のインテリジェンス機関で、韓国内の北朝鮮のスパイを取り締まっておりました。この国家情報院が活動停止になったため、北朝鮮のスパイが韓国で自由に活動できるようになったわけです。

この文政権の閣僚にも、北朝鮮のシンパが多数存在してゐて、韓国政府は事実上北朝鮮に乗っ取られてゐると言はれてゐます。

そこで何が問題となるか。

トランプ政権とすれば、北朝鮮に存在すると言はれる、約千二百ヶ所の軍事施設を爆撃するだけでは、核開発を阻止できない。地上軍を派遣してその軍事施設を制圧する必要がある。自分達の管理下に置いて、核兵器やミサイルに関する情報を得るために技術者たちを拘束しなければならぬ。拘束した上でデータを解析し、北朝鮮がどの程度のミサイルや核の開発をやつてゐるのか、分析しなければ完全に核開発を阻止できない。

そのためには、北朝鮮を爆撃するだけでなく、千二百ヶ所もの軍事施設を制圧しなければ

ばならない。だが、軍事施設一ヶ所につき百人の軍人を送るとしても、全部で十二万人の軍人が必要になりますが、いまの米軍に、それだけの兵力を北朝鮮に送り込む余力はない。そこで、北朝鮮の軍事施設の制圧は、韓国軍に担当させる予定だったやうですが、二〇一七年五月に成立した文政権は、米軍に協力するつもりはなく、北朝鮮の軍事施設の制圧は不可能となった。

ここで日本の自衛隊が北朝鮮に行つて、軍事施設を制圧できればいいのですが、自衛隊の海外派兵を考へてゐる人なんて、日本にはほとんどゐません。

このため、トランプ政権としては、米朝首脳会談を開催し、金正恩に国内の核施設を自主的に申告させ、廃棄させる方針に変へざるをえなかつたわけです。

ところが、米朝首脳会談で金委員長と会談したトランプ大統領に対して日本国内では、「トランプは腰砕けになつた」とか、「北朝鮮に騙されてゐる」といふ批判が出てきて、日本の保守系の言論人もそれに同調するやうなことを言つた。

しかし、トランプ政権がなぜ、話し合ひ解決を模索するやうになつたのかと言へば、北朝鮮の軍事施設千二百ヶ所を制圧するだけの軍人の数が足りないからです。もっと言へば、韓国や日本が軍隊を出して協力しないからです。日本にも、大きな責任があるのに、そんな

自覚もなく、トランプ政権を批判する人たちが日本には多い。米軍の実情を知らないで、あれこれと北朝鮮や中国の安全保障を論じる日本の風潮は、本当にまづいと思ひます。

第三が、中国リスクです。

仮にトランプ政権が北朝鮮を爆撃したとして、恐らく北朝鮮は大混乱になるでせうが、混乱した北朝鮮に中国軍が侵攻してきたらどうなるのか。アメリカ大陸に届く核ミサイルを持つてゐる中国と、アメリカは戦争することなんて出来ません。北朝鮮に対する中国軍の侵攻を阻止できるだけの兵力も米軍にはありません。もちろん、韓国軍も中国軍の侵攻を阻止できるはずもない。

となると、アメリカが多額の予算を使って爆撃を実施した結果、北朝鮮は中国の支配下に入る、といふことになりかねないわけですが、さうした事態をアメリカの有権者はどう見るのか、といふことです。恐らく、アメリカの有権者は、トランプ政権を強烈に批判することになります。

よつて、トランプ政権としては、中国による北朝鮮占領を招くやうなことは避けざるを得ず、そのためにも、中国とは十分に協議をしなければならぬのです。

第四が、日本リスクです。

ハワイに行った際に、国会議員の方と米軍の元幹部たちとで食事会をしましたが、その際に、いろいろと話し合いました。

このとき、次のやうな話がありました。

「朝鮮半島と沖縄・尖閣の南西諸島、そして台湾は連動することになる。

米軍が北朝鮮を攻めた時、北朝鮮が日本に対してミサイルを打つかも知れないので、日本の海上自衛隊は日本海に移って迎撃態勢を取る。海上保安庁の船は在韓邦人を救出するために朝鮮半島周辺に集結する。その結果、尖閣・南西諸島の防衛はがら空きになる。その隙をついて中国が、海上民兵などを送り込んでくるかも知れない」

事実、二〇一四年の段階で、中国は、沖縄・尖閣に侵攻するために海上民兵部隊を組織し、侵攻計画を立案し、訓練まで実施してゐます。この海上民兵部隊は漁民の格好をした非正規軍で、国際法違反です。その部隊は漁船が二百隻で、総員は六千人とも言はれてゐます。

二〇一四年小笠原諸島周辺で、中国の漁船がサンゴ密漁騒ぎを起こしましたが、その漁船が海上民兵部隊で、小笠原で予行演習をしたのではないかと言はれてゐるのです。この部隊が、北朝鮮有事に際して、尖閣諸島に上陸したりして一気に占拠してくる恐れがある。

ところが、アメリカも日本もこの海上民兵部隊を阻止できるかどうか分からない。もち

ろん、こうした危機をよく理解してゐる安倍政権は、尖閣を守るために海上保安庁の部隊を七百人へと増員しましたが、中国は最低でも六千人です。数ではかなはない。

といふことは、北朝鮮有事で、米軍も自衛隊も北朝鮮対応で追はれてゐる隙に、中国が尖閣・沖縄・台湾に攻めた場合、どうするか。少なくとも北朝鮮と尖閣の二正面作戦を強ひられた時、日本には対応する軍事能力はありません。艦船も自衛官も圧倒的に足りないのです。よって、トランプ政権とすれば、北朝鮮を爆撃した結果、尖閣・沖縄をとられたとなると、アメリカではトランプ大統領は何をやつてゐるのか、といふことになる。尖閣を占拠されたら、台湾も危なくなる。だから今、トランプ政権は懸命に、台湾との関係を強化するとともに、空母を台湾周辺に派遣してゐるわけです。

日本のマスコミは、北朝鮮の核やミサイル危機しか見ないですが、国際社会はさうではない。特に中国は北朝鮮、尖閣・南西諸島・台湾を一つのもの、連動したものと見てゐる。北朝鮮有事が起きた時には、ロシアも北海道の方で何らかの行動を起こす可能性もある。このやうに、同時多発的にいろんな紛争が起こる可能性があるのに、日本は、自衛隊の人員や艦艇・戦闘機不足のため、複数の危機に対応できない。そのため、トランプ政権としても、北朝鮮への爆撃に踏み切れないといふ側面もあるのです。

日本を取り巻くアジア太平洋の状況は極めて深刻です。特に台湾に対する中国の軍事的圧力は深刻です。仮に尖閣を不法占拠されたら、台湾もかなり危険になる。

よってアメリカにとって北朝鮮は前哨戦で、本丸は中国だといふ認識なのです。そして、北朝鮮の核開発を阻止するためにも、中国をどう押へこむかが重要だと考へてゐるのです。

三、トランプ政権の世界戦略

二〇一八年五月にも、ハワイに行つて米軍といろいろと話をしてきましたが、話題の多くが経済と金融の話でした。なぜかといふと、トランプ政権の国際情勢に対する分析はダイム(DIME:…ティプロマシー、インテリジェンス、ミリタリー、エコノミー)なのです。外交、インテリジェンス、軍事、経済の四つを組合せて対外戦略を考へてゐるのです。

具体的にどのやうに考へてゐるのか。

中国はこの二十六年間で防衛費を四十倍に増やしました。一方、日本は全く増やしてゐません。

それでは、中国はどうしてそれほど防衛費を増やすことができたのか。

それは、アメリカを相手にした対米貿易で実に日本円で四十兆円もの黒字を稼いでゐるのです。この四十兆円ものドルに基づいて中国の中央銀行が人民元を発行し、その資金を防衛費や中国の経済成長に廻してゐるわけです。仮にドルの裏付けがないままに、人民元を発行したら、人民元は暴落してしまふが、対米貿易黒字でため込んだドルを裏付けにしてゐるから、多額の人民元を発行できてゐるわけです。

普通の自由主義経済の国ならば、貿易黒字が膨らめば、通貨高となり、輸出は減る一方で、外国から安く輸入できるやうになり、消費者は外国製品を安く買ふことができるやうになる。ところが、中国は共産主義の国で、いくら貿易黒字が増えても、通貨高にならないやう通貨操作をしてゐる。このため、中国の消費者はいつまで経っても輸入品を割高で買はないと行けないやうになってゐるわけです。

このやうな、中国の消費者に貿易黒字の利益を還元しない通貨操作のもとで、中国は大軍拡を進めてゐる。よつて、中国の軍拡の原資はアメリカが中国から巨額の輸入をしてゐるからであり、アメリカの消費者が中国の医薬や電化製品や食料を買つてゐるから、中国はあれほどの軍拡が可能になつてゐる、かう分析したのです。

そこでトランプは中国のやうな国に対しては、軍事力に対して軍事力で対抗するのでは

なく、軍事力に対して経済・金融で対抗しようとしたわけです。世界を脅かす中国の軍拡を阻止するために、中国の経済力を削らうといふ戦略です。それが、トランプ政権による米中貿易戦争の発動なのです。

具体的には、中国からの輸入品に対して関税をかけて対米貿易黒字を減らすとともに、貿易黒字を生み出すハイテク技術などを中国企業に渡さないやう、厳しく監視する体制を構築したのです。

トランプ政権による米中貿易戦争は、中国の侵略を抑止するための非常措置なのです。日本のマスコミや有識者たちは、トランプ政権は「保護主義だ」「自由貿易を理解してゐない」などと批判しますが、そんなことを言つてゐる場合ではない。

大切なことは、トランプ政権が何をしようとしてゐるのか、「正確に理解」することです。正確に理解せずに、あれこれと批判したところで、なんの解決にもならないからです。あれこれと憶測に基づいて批判するのではなく、正確に理解しようとする、このことの大切さは小柳先生、山田先生が一貫して言はれた事です。

私は、自分の名刺の肩書には「評論家」と書いてゐますが、英語で「Policy Analyst (政策分析家)」と書いてゐます。それは、安全保障や外交政策を調べ、分析し、その分析の上に

日本はどうやって国益を守っていくのかを考へることが大切だと考へてゐるからです。自分の思ひ込みや憶測で考へるのではなく、まづは、現実、実態をきちんと理解する。だから、北朝鮮のミサイル危機に際しても、自衛隊や米軍の幹部たちと話をする中で対策を考へるべきだと思つてきたわけです。

戦前の日本においても、政府や政治家、そして学者たちが「シナ事変は百年戦争だ」「世界史を変へる戦ひだ」など観念をもてあそんだ一方で、戦場ではいつ終るかも知れない戦ひが続き、武器弾薬も不足して兵隊たちは疲弊してゐた。それなのに戦争をやり続けると言ふ軍・政府に対してそんなことをやってたら日本はつぶれてしまふ、と反論したのが小田村先生たちでした。

今回の北朝鮮危機、米中貿易戦争でも同じことです。

北朝鮮を爆撃する米軍の実態はどうなつてゐるか。自衛隊の実態はどうなのか。米中貿易戦争をなぜトランプ政権は仕掛けたのか、その結果、アメリカ、中国、日本の貿易と経済はどうなつてゐるのか、その現実を把握し、分析した上で、外交や安全保障や日米同盟のことを考へることが必要とされてゐるのです。トランプ政権は「保護主義だ」などと勝手に批判したところで、なんの解決にもなりません。

ところが、日本のマスコミも政治家も、その多くが、トランプ政権が何をやらうとしてゐるかを正確に理解する、といふ基本ができてゐない。北朝鮮との首脳会談で一見、宥和的な合意が生まれた背景を正確に理解し、その上で我が国はどうしたらいいかを考へることが大切なのです。

なぜ、こんなことを強調するのかと言へば、日本のマスコミや野党の政治家を批判したり、揶揄することが日本を守ることだと勘違ひしてゐる人が多いからです。

確かに日本の偏向マスコミは困つたものですし、政府の揚げ足取りしかしない一部野党の政治家たちの行状は目に余ります。だが、偏向マスコミや野党の政治家を批判して、日本の政治は良くなりますか。北朝鮮や中国の脅威に対応できる日本にすることができますか。

偏向マスコミや野党の政治家たちを相手にする前に、トランプ政権の実情、米軍の現状、自衛隊の現状などを必死で調べて、どうすれば北朝鮮の核開発を阻止できるやうになるのか、どうすれば中国による尖閣侵攻を阻止できるやうになるのか、具体的な方向性を見出し、法律を整備し、予算をつけることが大切なのです。

他者を批判し、叩くのは簡単です。ですが、政治家やマスコミを説得し、日本をより良くするために一緒になって立ち上がらせることなくして、日本は良くなつていかないのです。

そしてそれこそが、小柳先生たちの教へでした。

さういふ発想でぜひともここにゐる若い人たちに勉強してもらひたい。自分達にそんなことできるか、と思はずに。皆さん、大丈夫です。小柳先生から、「お前は能力はないけれど、必死で先人の智慧を学べば少しは役に立つやうになるだらう」と言はれて、僕も今ここにゐるのです。学生時代に、小柳先生がそこまでおっしゃるのなら、自分も少しはお国の為に役立つかもしれないと思ひました。そして、少しはお役に立てるやうになったと思ひます。小柳先生や山田先生は一高校教師でありながら、綺羅星の如く人を育てられました。日本を支へる人材を作つてくれました。私など、小柳先生たちに比べれば足元にも及ばないのですが、逆に足元にも及ばないほどのすごい先生方、先輩方が日本にいらつしやるということは本当に恵まれてゐる事だと思ひます。素晴らしい先人、先生に恵まれた日本に生きてゐる幸せを是非とも実感してもらひたい。そのためにも、先人たちが残された文章や、先生たちに必死で食らひついてほしいと思ひます。

四、中国の軍拡を支へてコンドミニウムを招来するのか、

それとも日米連携でアジアの自由を守るのか

最後に、これからの日本について話をしておきたいと思ひます。

残念ながら、中国は本気で日本を支配しようと考えてゐます。それは、日本に戦争を仕掛けて軍事的に占領するといふことではありません。経済的に支配しようとしてゐるのです。

これは数年前に米軍の元幹部から聞いた話ですが、中国共産党幹部は「コンドミニウム」といふ対日戦略を検討してゐるのです。コンドミニウムとはアパートのやうに共同で使用するホテルの部屋みたいなもので、日本を中国とアメリカが共同で搾取する場にしようといふ事です。

具体的には、日本のメガバンクや一部上場の株を買つて、株主として日本に君臨しようといふものです。中国資本が北海道の土地を次々と買つてゐることが新聞でも報じられましたが、そんな生易しいものではありません。メガバンクの株主になれば、日本企業の多くが中国人の株主の指示に従はなければならなくなり、いづれ日本人の多くは、中国人の経営者のもとで、こき使はれることになるでせう。日本人は勤勉なので、軍事的に占領して支配するよりも、経済的に支配してこき使つた方がいいと考へてゐるわけです。

現に二〇一二年、民主党政権のとき、日本経団連が近未来予測レポートを出してゐます

が、このまま日本がデフレのまま、経済が低迷していくと、二〇五〇年の時点で日本のGDPは中国の八分の一になると予測してゐるのです。日本の経済力が中国の八分の一になれば、日本は先進国首脳サミット・メンバーではなくなり、アジアの小国として中国の顔色を窺つて生きていくことを余儀なくされるでせう。いくら憲法を改正しようが、防衛力を強化しようが、経済力が中国の八分の一になってしまへば、中国に対抗することは困難です。

よつて中国に飲み込まれないためにも、日本はデフレから脱却し、経済を成長させることが重要で、だからこそ二〇一二年十二月に発足した第二次安倍政権はアベノミクスと称して、まずデフレからの脱却、経済成長に取り組んだのです。そして中国から日本企業の株を買ひたたかれないやう、株価を上げる政策をとつたのです。

このやうにアベノミクスは中国の買収から日本を守るための政策なのですが、アベノミクスが最大の対中防衛政策であることを理解してゐる人は本当に少ない。それは、DIMEといふ国際政治の学問的枠組みを理解してゐる学者や政治家が、日本では少ないからなのです。特に防衛、安全保障の専門家たちが、インテリジェンスや経済の重要性をあまりよく理解できてゐない。そのため、消費税増税の問題点や日本銀行の金融政策の重要性に気付いてゐない人が多い。

日本ではどうしても安全保障、防衛といふと、自衛隊や憲法の話になってしまつてゐるわけですが、さうした視野の狭さだと、中国に飲み込まれてしまふ恐れがあります。

繰り返しますが、国際社会、特にアメリカや中国では、経済・金融もまた防衛政策なのです。よつて日本も、憲法改正や自衛隊の増強とともに、デフレ脱却、経済成長を必死で実現していく必要があるのです。

このDIMEといふ国際政治を理解する学問的枠組みを紹介するため、『知りたくないで済まされな』(KADOKAWA)といふ本を書きました。ご高覧賜れば幸いです。

講義

—古典講義—

日本のこころ 『古事記』

昭和音楽大学名誉教授

國武忠彦



『古事記』とは何か

「古への正実」まことを伝へてゐる

言辭コトバぞ主ムネには有ける

成りませる神

産巢日ひすびの神

葦牙あしかびの如ことく

神とは何か

奇靈くすしく微妙たへなる物

神代七代

国生み

死とは

禊つく

清あかく明あかき心

歌を詠む心

最近、気になる言葉がある。「グローバル化」といふ言葉である。ヒト、モノ、カネ、情報が国境を越えて拡張し、地球規模を標準にして、合理的で豊かな経済社会を作り出すといふのである。まさに科学技術の発展を基盤に、「グローバル化」の社会実現は現実味を帯びてきた。文化も当然この影響からまぬがれることは難しい。

「グローバル化」とは、何とも心地よい言葉である。世界が一つになる。何の拘束も感じさせない、自由な幸福感にみちた言葉である。しかし、これによって世界はどうなるのだろうか。文化は画一化され、均質化が進み、人は個人の集まりとなるのではないかと危惧される。

私は、「グローバル化」が進展するなかで、「私はだれなのか」「日本人とは何なのか」を、『古事記』を読みながら考へてみた。日本固有の文化のなかでしか私は生きていけないと思つたからです。

『古事記』とは何か

『古事記』とは、我が国最初の歴史書である。神代から推古天皇の時代までの歴史的伝承

が記されてゐる。天武天皇が稗田阿礼に誦習させた帝紀や旧辞をもとに太安万侶が書きあげたもので、序文には、和銅五年（七二二）に元明天皇に献上されたと記されてゐる。

帝紀とは、歴代天皇の系譜や業績。旧辞とは、古い言葉で昔から伝へられてきた神話、伝説、歌物語である。天武天皇は、それらの誤りを正して稗田阿礼に「誦習」、誦み習はせた。江戸時代に『古事記』の研究をし、綿密な注釈書『古事記伝』を遺した本居宣長は、次のやうに言つてゐる。

天武天皇が「大御口づから、此の旧辞を諷誦まして、其れを阿礼に聴取しめて、諷誦ます大御言のまゝを、誦うつし習はしめ賜へる…古語にしあれば、世にたぐひもなく、いとも貴き御典にぞありける」（『古事記伝』）。これは、極めて注目すべき解釈である。稗田阿礼は、天武天皇から口伝へに誦みを教はつた。天皇はみづから声を出して、「古言」のままに、言ひ伝へられたままに誦まれた文であるから、この上もなく貴い御典であると、率直にその喜びを表現してゐる。

「古への正実」を伝へてゐる



稗田阿礼が天武天皇から直接に誦み教はったものは「古言」であった。「古言」とは、日本人が古来から大切に語り伝へてきた美しく文のある言葉、母語である。これを大陸から文字文化（漢文表記）が入って来て広まる時代に、「古語」をそのまま文字に表現することは、とても困難であったと太安万侶は次のやうに言ふ。

「上古の時、言意並に朴にして、文を敷き句を構ふること、字に於いて即ち難し」

古代日本人の「言意」はとても「朴」であった。それは「朴」といふしかないほど素朴なのである。古代の日本人の言葉や心が、とても素朴で素直であるから、「言意」をそのまま漢字で文章にするのは

とても困難であつた。言葉と心がともに素直であるとは、自然のままの感情、飾るところのない、けがれのない、まことの「言意」であつたので、それに感動し、それをそのまま文字に表現するにはどうすればよいのかと苦心をしたといふ。

これを受けて宣長は言ふ。

「此文を以見れば、阿礼が誦る語のいと古かりけむほど知られて貴し」「字の文をもかざらずて、もはら古語をむねとはして古への実のありさまを失はじと勤めたること」「たゞ古への語言を失はぬを主とせり」

古い言葉が、古い言葉のままに記述されてゐる、そこが貴い。その点、同じ古い歴史書である『日本書紀』には飾りがある。漢文で書かれてゐるので、賢さうで美しく見える。しかし、『古事記』は「古語」が中心となつてゐるので、「古への実のありさま」が伝へられたるままに記述されてゐる。「古語」が失はれると「古への実のありさま」も失はれてしまふと、天武天皇はそこを悲しまれたのではないのかと宣長は拝察する。

言辭ぞ主には有ける

『古事記』は、「言辭ぞ主には有ける」と宣長は言ふ。

「言と事と心と、そのさま大抵相かなひて、似たる物にて」、「いさ、かもさかしらを加へずて、古より云ひ伝へたるま、に記されたれば、その意も事も言も相称へて、皆上つ代の実なり」。

言葉としわざと心とは、そのさまは大抵びつたりと合つてゐて、似ているものである。少しも賢ぶつたところがなく、「漢心」を捨てて清らかな「やまとことば」のままに、言ひ伝へられたままに記されてゐるので、その心もしわざも言葉もびつたりと合つてゐて、皆古代の真実である。だから、「古への心」を体得するには古の言葉、「古言」を理解せよ、これが学問の眼目である。

このやうに宣長は、古い言葉を遡り、辿ることによって、古い日本人のこころを知らうとした。六十九歳のとき、『古事記伝』が完成したが、そのとき次の歌を詠んだ。

フルコト
古事のふみをらよめばいにしへのてぶりこと、ひ聞見ることし

『古事記』の文を読めば、古への人々の手ぶりや言葉を交はし合つてゐる様子が、その場に居て聞いて見てゐるやうに、甦つてくる。生きた生活が眼前によみがへるといふ喜びである。これが学問をする核心にあつた。

成りませる神

天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神産巢日神。此の三柱の神は、並独神成り坐して、身を隠したまひき。

これは、『古事記』冒頭の本文である。

天地の初めるとき、高天原に「成りませる神」の「成る」について、宣長は「無りし物の生り出る」ことと言ひ、「人の産生を云も是なり」「神の成坐と云は是なり」と注釈する。神々は、おのづから自然に成れるもの、無かつたものが生まれ出るものであつた。

「天地の初発の時」と語るだけで、どのやうに天地が出来たのかについては語らぬ。中国の思想では、天地の始まりを「陰陽」の原理によつて創られたと説明するが、わが国では「天地が始まった時に」といふだけである。「旧約聖書」にみられるやうな絶対的な唯一神ヤハヴェがこの世を創つたものではない。イスラム教の唯一絶対の創造神アッラーでもない。「古事記」には、天地の初めのとき、天の世界である高天原はすでにそこにあつたと語る。神がそこに「成りませる」ところから語られてゐる。山川草木がおのづから生まれるやうに、おのづから「成りませる神」であつた。

産巢日の神

天之御中主神は、天の中心にあつて支配する神である。次の高御産巢日神、神産巢日神。この三柱の神は男女といふ性別はなく、一柱で働きをなさる神であり、身を隠して顕れなかつた。

「産巢日」とは何か。宣長は、「産巢は生なり。其は男子女子、又苔の牟須など云牟須にて、物の成出るを云」と解釈してゐる。「日は、書紀に産霊と書れたる、霊字よく當れり、

凡て物の靈威クシビなるを比ヒと云イふ。要するに、ムス（生成）ビ（靈力）である。生み出す力、生成の力にあふれてゐる不思議なる神であり、「凡て物を生成することの靈異クシビなる神靈ミタマ」である。

「世間ヨノナカに有アリとあることは、此天地コノあめつちを始め、万の物も事業コトも悉マシに皆、此二柱ふたはしら産巢日ムスビの産靈ムスビに資ヨリて成出ナリイデるものなり」。「物類モノノコトも事も成ナるは、みな此の神の産靈ムスビの御徳ミヅクミ」であると言ふ。確かに、国生みのときも、天あめの岩屋いはやから天照大御神あまてらすおほみかみを出イすときも、邇邇に芸命ぎのみことの天降りあまくだのときも、この神のすぐれた働きのお蔭である。天の岩屋で思慮深い働きをした思金神おもひかねのかみも、この神の子であるし、大国主神おほくにぬしのかみを助けて国作りをした少名毗古那神すくなびこなのかみもこの神の子である。産巢日神は、至るところで困ったときに立ち現れては、良き方向へと導いた神であつた。小林秀雄は、「神代の巻」について次のやうに語る。

これはすべて、神と呼ばれた人々の「事跡」である。「神々の事態」である。神代の生活にあつて、誰言ふとなく、「産巢日神」と言ひ初めて、この世で「物類モノノコトも事も成ナるは、みな此の神の産靈ムスビの御徳ミヅクミ」とされてゐた。誰も目のあたりにしてゐた、その靈の働きを疑ふわけにはいかなかつた。まさしくさういふ神々の端的な直知といふ事が語られてゐ

るのであつて、そこには、どんな形の教理も纏はる余地はない。(『本居宣長』)

天地あめつちも神々もこの世の万物も、ことごとく産靈ムスビの神の「しわざ」によつて生まれたのである。「しわざ」とは、「事跡」「事態」である。「事跡」とは、成し遂げられた事実や業績、「事態」とは、事の有りさまや成り行きを意味する。すべて、この世の万物は、この神の「靈異クシビなる神靈ミタマ」によるのである。私たちはこの神の神靈ミタマの御徳ミコトクを忘れてはならないのである。

葦牙あしかびの如くごと

次に国くに稚わかく浮脂うきあぶらの如くごとして、くらげなすただよへる時に、葦牙あしかびの如ごと萌もえ騰あがる物ものに因よりて、成なりませる神かみの名なは、宇麻志うまし阿斯訶あしかび備比古ひこちのかみ遲神かみ、次に天之常立あめのとこたちのかみ神かみ。

国(土地)は、まだ若く水に浮いた脂あぶらのやうであつた。くらげのやうにフワフワと漂つてゐた。その時、葦あしの芽が泥の中から萌もえ上るやうな物によつて、生まれ出た神の名は、宇う

麻志阿斯訶備比古遲神、次に天之常立神。春になると、葦が泥の中から芽をだす。白い鋭い芽が萌え上るやうに伸びてゆく。不思議だなあ、私たちの祖先は驚き見つめてゐる。葦牙の生命力に驚いてゐる。それが「宇麻志」といふ言葉である。「宇麻志は美稱なり、其は心にも目にも耳にも口にも美きをば、皆讚て云ふ言」であり、「今世にはたゞ、物の味の口に美きをのみいへど、古は然のみならず」と宣長は解釈する。私たちが事にふれて、心の感じ出る、「あ、」とため息をつく嘆息の声である。「あ、すばらしい」といふ感動が神となつてゐるのである。「比古」は、男性を表はす。

この葦の成長力になぞらへて、日本を「葦原の中つ国」（葦の生い茂った中の国）とか、「豊葦原の瑞穂国」（葦原のなかにあつて瑞々しい稲が沢山実っている国）と称して、ほめ讃へてゐる。以上、五柱の神を「天つ神」と称す。特別な神である。

神とは何か

さて、神とは何か。宣長は、「神」は「迦微」と読むべきだが、その意味や由来は解らない、「未だ思ひ得ず」といふ。しかし、「迦微とは、古御典等に見えたる天地の諸の神たち

を始めて、其を祀れる社に坐御霊をも申し、又人はさらにも云ず、鳥獸木草のたぐひ海山など、其餘何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迦微とは云ふなり」と記す。

雷も神である。「龍、木靈、狐などもすぐれてあやしき物にて可畏ければ神なり」「貴きもあり賤きもあり、強きもあり弱きもあり、善きもあり悪きもありて、心も行もそのさまさまに随ひて、とりどりにしあれば」といふ。

ここで、小林秀雄は、宣長が「迦微」の意味や由来を「未だ思ひ得ず」と言ったことについて、「思ひ得ても得なくても大した事ではなかつた」、「どんな具合に、語り合はれて生きてゐたか、その現場を見定めなければならなかつたのだ」といふ。神といふ言葉は、古代の生活のなかで生き生きと使はれてゐた。「上古の人々は、神に直かに触れてゐるといふ確かな感じを、誰でも心に抱いてゐたであらう」。私たちは、古人が生きた経験を現在の自分の心のうちに迎へ入れて、これを生きてみる事。「古人が生きた経験」を追体験して、己の心の中で生きてみることだ、といふ。

古代人の素朴なところが神を生む。神は、畏敬や畏怖の対象でもあり、「ありがたい」と思ふ感謝や恩恵の対象でもある。古代人は、人間の力を超えた「あるもの」に畏れを抱いた。

それは、「靈」と呼ばれるものか。「靈」とは、「いともいとも奇靈く微妙なる物」で、靈魂とも呼ばれた。靈力や威力に溢れてゐたが、その「靈」は万物に宿つてゐて、不思議な神性をもつてゐる。

奇靈く微妙なる物

私たちを取り囲むものに、天があり、地がある。さて、その天とは何か、地とは何か。男とは女とは、水とは火とは何か。物が物としてそこにある。それは、いともいとも「奇靈く微妙なる物」であると宣長はいふ。不思議で神秘的な物である。古代の人々は、この「奇靈く微妙なる」物を見て、聞いて、それに触れて生きてゐた。現代の私たちは、このやうな古代人の素直な驚きを失くしてゐるかもしれない。感じてはゐるが、真にわかつてはゐないのかも知れない。何でも了解できる世界に住んでゐるので、「奇靈く微妙なる」世界が目に見えないのかも知れない。宣長は、「神代の神は今こそ目に見え給はね、その代には目に見えたる物なり」といふ。

「神代の事の奇異くさいきは人の代の事と同じからざる故にあやしみ疑ふなれ共、実は人の代の事もしなこそかはれみな奇異くさいきを、それは今の現うつに見なれ聞なれて常に其中居る故に奇異くさいきことをおぼえざるなり。」（「くずばな」）

宣長にとっては、人間もまた万物と同じく「不思議な神性」をもつ存在であった。人間といふ物が現代にゐないと仮定して、神代に人間といふのがゐたと想像したとき、現代人は人間の存在を信じるだらうか、といふ問ひである。人間といふものには、頭かぶといふものがあり、その左右に耳といふものがある。目といふものが二つあって、物の色や形を見ることが出来る。鼻の下に口といふものがあり、奥より声が出る。手があり、足といふものがある。歩くことができる。そして、「胸の内に隠れて、心といふ物」がある。これがとりわけ「あやしき物」にて、さきの聞いたり見たり物を言ったり、手足の働くのも皆この心のしわざである。さて、現代人はこの人間といふものの存在を信じることができるであらうか。そんな不思議なことがあるはずがない。愚かな「寓言」、たとへ話だといつて、信じることはないであらう、と宣長はいふ。

小林秀雄は、「神とは、上代の人々が自分を取りまくあらゆるものを見たり、触れたり、

恐れたり、また日々の恩恵を受け取つたりするときの感じ様を、言葉に表はした名」と言つてゐる。

宣長にとつて、「靈」^{タマ}とは恩恵でもあつた。「何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迦徴とは云ふなり」と言つたが、「すぐれたる徳」の「徳」をメグミ、イキホヒとも読んでゐる。恩恵とは、メグミ、感謝、おかげである。小林は、「何々のおかげだからありがたいといふ、自分が生きてゐるのだといふ感謝がなければ靈といふものは存在しない」といふ。

神代七代

次に成りませる神の名は、国之常立神、次に豊雲野神、此の二柱の神も独神成り坐して、身を隠したまひき。

次に成りませる神の名は、宇比地邇神、次に妹須比智邇神、次に角杵神、次に妹活杵神、(二柱)次に意富斗能地神、次に妹大斗乃弁神、次に淤母陀流神、次に妹阿夜訶志古泥神、次に伊耶那岐神、次に妹伊耶那美神。

次に出現なさった神は、国土の永遠に存立する神、次に豊かな雲がおほふ野の神、この二柱の神も独り神で身を隠された。次に出現なさった神は、大地の泥土の神、次に砂土の女神、次に大地に打ち込まれた杭の神、次にその女神、次に大地の神、次にその女神、次に「淤母陀流神」が現はれる。「面の足と云は、不足處なく具りと、のへる」と宣長は解釈する。「神の御面の満足せる」とは、顔立ちや身体が綺麗に整ったことを意味する。そして、次に「妹阿夜訶志古泥神」が現はれる。「阿夜」は、あ、といふ驚き、賛嘆、溜息であり、「訶志古」とは、恐れつつしむ感動である。大地が見事に綺麗に完成したことへの賛嘆である。あ、恐れ多く、もつたいたいことよ。あ、といふ驚き、溜息が神となつてゐる。神々の登場によつて、大地が徐々に整ひ形成されていく様子がわかる。神代七代の最後は、伊耶那岐神、伊耶那美神である。「伊耶」は、さあといふ「誘語」で、「遣合（結婚）して国土を生成さむとして、互に誘ひ催し賜へる意」と解する。

国生み

天つ神は、伊耶那岐神、伊耶那美神に、「このただよへる国を整へ固めよ」といって「天

の沼矛ぬまこ」を授けた。二神にじんは、「天あめの浮橋うきはし」に立ち、その玉飾りのある矛で、ただよへるものをかき回したら、その矛先からしたたる塩が積もって「淤能碁呂島おのこころしま」と成った。二神は、この島に天降あまくだりして「天あめの御柱みはしら」を回まわって声をかけあつて結婚する。その時の声かけが、「あなにやし、えをとこを」である。あ、何てまあ、すばらしい男だらう。それに応へて、「あなにやし、え娘子わらめを」。あ、何てまあ、可愛らしい娘だらうと唱和する。宣長は、これは歌の始めであるといふ。あ、といふ感動にはじまる声が、美しい文あやある言葉になつてゐるからである。

生まれた子は、「水蛭子ひるこ」(ヒルのやうな不備な子)だった。二神にも、何故このやうな不備な子が生まれたのか解らない。そこで、天つ神に相談するが、天つ神も解らない。神にも解らないものがあるのだ。ここは、面白いところで、人智を超えた不可解なものに神々は素直である。そこで、天つ神は「ふとまにに占相うらなひ」をする。

死とは

二神は、国生みをし、さらに多くの神々を生み、最後に火の神を生んで妻の伊耶那美いざなみの

神は死ぬ。夫の伊耶那岐神は、「愛しき我がなに妹の命」と呼びかけて、枕もとに腹這ひ足もとに腹這つて泣く。泣いた涙は泣沢女神となる。「さめさめとなきたまふ」さまで、妻の死を「悼み惜みたまへるなり」と宣長はいふ。昔も今も変はらぬ、死の悲しさである。死の悲しみから逃れるには、たゞ泣くほかにすべの無きことを教へてゐるのか。

伊耶那岐神は、妻に会ひたいと思ひ、黄泉の国へ行く。そこで見たものは、「うじたかれころろきて」蛆のわく死体であつた。人間の死に向き合はせるこの場面は、まことに残酷な描写である。宣長は、死の安心を説く合理的な解釈を、すべて「虚説」と言つて退ける。「凡て神代の傳説は、みな實事にて、その然有る理は、さらに人の智のよく知べきかぎりに非れば、然るさかしら心を以て思ふべきに非ず」「貴きも賤きも善も悪も、死ぬればみな此夜見國に往くことぞ」、だから、「此世に死する程悲しきことは候はぬ也」といふ。生があれば死がある。生とは何か、死とは何か。死の悲しみなかで、生の意味を神代古人は問うてゐる。

禊

伊耶那岐神は、妻の異様な死体を見て驚く。その姿は「穢れ」にみちたものであつた。

恐ろしさに逃げ出して、「穢れ」を取り除くために身を水に沈めて「禊」を行ふ。けがれを水によってそそぎ、洗ひ清めた。この時に現はれた神が、「禍津日神」である。これは、身のけがれによって生まれた神である。この世の悪や禍は、みなこの神のみ心よることになる。

しかし、次にこの禍を直さうとする「直毗神」が現はれる。ここに宣長は、「何事も吉善より凶悪を生し、凶悪より吉善を生しつゝ、互にうつりもてゆく理りをさとるべく」といふ。たとへ、悪はあつてもそれは善へと変る悪である。人の世とおなじではないか。

伊邪那岐神は、「禊」の最後に清流で顔を洗つた。左の目を洗つた時に天照大神、右の目を洗つた時に月読命、鼻を洗つた時に須佐之男命が生まれた。天照大神は、光り輝く太陽のやうな女神。「高天原を治めなさい」と父から命じられ、月読命には「夜の国を」、須佐之男命には「海を治めよ」と命じられた。だが、須佐之男命だけは任命された海の国を治めないで泣いた。「八拳須心前に至るまで、啼きいさちき」。長いひげが伸びて、みぞおちに伸びるまで長い間泣いた。「其の泣く状は、青山は枯山如す泣き枯らし、河海は悉く泣き乾しき」。青山を枯れ木にするほど、河海を悉く涸らしてしまふほど激しく泣いた。父が、「おまえはなぜ泣くのか」と問ふと、「私は亡き母の国に行きたいので泣いてゐるのです」

と申した。父は、妻の死には腹這ひになつて泣き悲しんだが、その子もまた青山が枯山からやまになるまで泣くのである。

清く明き心あか

須佐之男命すさのをのみことは、父に追放されて姉の天照大御神あまてらすおのみかみに会ひに行く。「山川悉く動みやまかはる、国土皆震くにつちみなふるひぬ」。それを聞いて天照大御神あまてらすおのみかみは、弟は「善き心よ」ではなく、我が国を奪はうとするのではないかと疑ふ。弟は、「私には邪よこしまき心なし」と申す。それならば「汝の心の清く明あかき」をどう証明するのかと姉に問はれて、「誓約ちかひ」といふ誓ひを神に立てて子を生むことにする。三柱の女子ひめみこが生まれて、須佐之男命すさのをのみことの身の潔白が証明された。

「清く明あかき」心とは、清らかで素直な心である。「万葉集」でも、多く歌はれた言葉で、日本人が重んじた心である。それは、宣長のいふ「生れつるままの心」「まごゝろ」といつてもよい。純粹な心である。

歌を詠む心

明日、皆さんは歌を詠まれるといふ。歌は、素直な気持ちにならないと作れない。見たまま感じたままを言葉にすることは難しい。しかし、日本人は「生れつるままの心」になって、見たまま感じたままを重んじて歌を詠んできた。歌を詠むことは、感動をもつて生きることである。言葉を大切に、心情を整へて生きることである。これは、学問の基本といってもいい。私たちは、歌を詠むことが、日本の古来からの固有の文化であったことを忘れてはならない。

講義

聖徳太子「憲法十七条」に学ぶ

―人としての生き方―

元神奈川県立小田原高等学校教諭

原川 猛雄



はじめに

第一条について

第二条について

第三条について

第四条について

第五条について

第六条について

第七条について

第八条について

第九条について

第十条について

他者との共感の世界——「他と共なる生」——

はじめに

皆さんと一緒に、聖徳太子の憲法十七条を学びたいと思った理由は、千四百年経た現代の社会に於いても、太子の教へは生きてゐると考へるからです。実に学ぶところが多いのです。例へば、国会を舞台にしたモリ・カケ（森友・加計）問題などでの与野党間の挙げ足取りのやうな不毛な議論にはうんざりします。十七条憲法の第一条には、「上かみやわら和しむじつぎ下睦むつびて、事を論あひつらふに諧かなひぬるときは、即ち事理おのずか自ら通かよふ。何事か成らざらむ」とあります。対立する政党の立場を超えて太子の言ふやうに、穏やかな心で議論すれば、きつと道理に適った政策の方向性が見つかるのではないかと思ひます。また、医科大学の入試をめぐる文部省幹部の不正が話題になりましたが、憲法第五条には「餐いさはりを絶ち、欲すを棄すて、明らかに訴訟うったえを弁ただめよ」と、つまり、接待を受けるな、賄賂を貰ふな、公正に民の訴へを処理しなさいと、はっきりと説かれてゐます。今の政治家や官僚には十七条憲法をよく読んで欲しいと思ひます。私の孫は四歳ですが、とても物覚えが早いです。幼い時に十七条憲法を学んでおけば、成長して人生の岐路に立たされたとき、太子の教へが生きた言葉となつて導いてくれるのではな

いかと思ひます。

憲法十七条は『日本書紀』に載つてゐます。漢字四字の句を中心に対句を用ひながら、口に出して唱へやすく、然も簡明な表現です。主に、實際に政務を担当する官吏の心構へを説いたものですが、国のあるべき姿や、深い人間洞察に基づく教へが見られます。現代に生きる私たちにも示唆に富む教へが説かれてゐます。

それでは第一条から皆さんと読んで行きます。私がまづ原文（書き下し文）、次に訳文を読んで一通り意味を理解した上で解説して行きます。

第一条について

一に曰く、和を以て貴しと為し、忤ふこと無きを宗と為す。人皆党あり、亦達れる者少し。是を以て或は君父に順はず、乍ち隣里に違ふ。然れども、上和ぎ下睦びて、事を論ふに諧ひぬるときは、即ち事理自ら通ふ。何事か成らざらむ。

「和」といふ字の古い読み方は、「あまなひ」とか「やはらぎ」と言ひます。「あまなひ」とは、話し合ひをして納得するといふ意味です。ですからただ仲良くしようといふ意味では



ありません。お互ひの意見の違ひを議論した上で納得できる解決点を見つけようとしています。それには、まづ相手の気持ちや考へを正確に理解することから始まります。正しく聞く、正しく見るといふことが全ての基本になるわけですが、言ふは易く行ふは難しです。

また、「やはらぎ」とは、人と人の声が調和するといふ意味です。丁度、オーケストラで、それぞれの楽器のパートがばらばらに演奏したただの雑音に過ぎませんが、良い音楽を作らうと気持ちを合はせて演奏すれば、調和のとれた素晴らしい音楽となるでせう。

私たちは、家庭、サークル、学校、会社など様々な社会に属してゐます。それぞれの社会で、共通の価値や目標を共有できれば、お互ひに力を合はせる

ことができます。ところが、どんな社会でも派閥ができたり対立が生じます。「人皆党あり、亦達れる者少し。是を以て或は君父に順はず、乍ち隣里に違ふ」といふのが、いつも変はらぬ人間の姿です。太子は人間のありのままの姿を直視された上で、どうしたら良いかといふ教へを説きます。「上和ぎ下睦びて、事を論ふに諧ひぬるときは、即ち事理自ら通ふ。何事か成らざらむ」、上は高位の官吏、下は一般の官吏といふ意味ですが、今は会社の上司と部下とか、友だち同士など色々な場面に置き換へて読むことも可能です。お互ひに穏やかに親しい気持ちで話し合へば、きっと道理に適った解決の道が見つかるといふのです。しかし、対立したり、不信感があると、協力しようといふ気持ちにもならず、ましてや冷静に話し合ふことも困難です。どうしたらこだはりを捨てて、お互ひに謙虚な気持ちで事を論ずることができるのか。とても難しい課題です。

第二条について

二に曰く、篤く三宝を敬へ。三宝とは仏法僧なり。則ち四生の終帰、万国の極宗なり。何れの世、何れの人か、是の法を貴ばざる。人、尤だ悪しきもの鮮し。能く教ふれば之

に従ふ。其れ三宝に帰せずんば、何を以てか枉まがれるを直たださむ。

三宝とは、仏（悟りを得た人・釈迦牟尼仏）、法（仏の教へ・真理）、僧（仏の教へに従ひ修行してゐる人）です。四生とは、生物をその生まれ方から四種（胎生・卵生・湿生・化生）に分けたもので全ての生き物といふ意味です。「四生の終帰、万国の極宗なり」とは、生きとし生けるものの最後の拠り所であり、全ての国が尊ぶ最高の教へであるといふ意味です。

釈迦（紀元前五世紀のインドの人）は、人生は苦しみである。その苦しみの原因は煩惱（欲望）にある。その煩惱を滅した安らかな境地に至る方法として、八正道（何事も正しく見る正見などの八つの正しい道）を説かれました。太子も同じやうに、人間のありのままの姿をしつかり見つけた上で、どうしたら救はれるのかといふ教へを憲法十七条に分かりやすく説いてゐます。鎌倉時代の親鸞は、聖徳太子のことを「和国の教主」（日本の釈迦）と呼びましたが、まさにその通りだと思ひますし、日本の仏教の土台を築いた人であるといふ意味も含まれてゐると思ひます。

太子が学ばれた「大乘仏教」は、仏がこの世にお釈迦さまとなって現れた理由は、全ての衆生を苦しみから救ふ為である。大地をあまねく雨が潤すやうに、仏の慈悲のまなざしは差別なく全ての衆生に注がれてゐる。全ての人が救はれるといふ教へなのです。

明治天皇が「さまざまの虫の声にも知られけり生きとし生ける物の思ひは」と御詠みになつたやうに、古来より日本人は生きとし生けるものに心を通はせてきました。このやうな日本人の感性は、仏の慈悲は等しく衆生に注がれてゐるといふ大乘仏教の教へと基本的に相通ずるところがあると思ひます。

ところで、太子はどうして三宝即ち仏教に帰依する道を選んだのでせう。古代の日本人は、『古事記』に見られるやうに、自然に随順して生きてゐたと思ひます。祖先を初めとする神々を敬ひ、祈りを通して己の身を慎む。生き生きとした心で泣き、笑ひ、喜び、悲しむ。畏敬と感謝の心で人生を全うする。日本列島の豊かな自然に育まれた私たちの祖先は自づとこのやうな生き方を身に付けたと思ひます。その生き方には難しい教へも経典もありません。しかし、今から見ますと、日本人の生き方の原点であり、立派な生き方だと私は思ひます。ところが、太子の時代の世相は、救ひがたい混乱の中でありました。帰化人の増加に伴ふ大陸文化流入による思想的混乱、私利私欲に走る豪族の醜い権力争ひ、官吏の腐敗など、その混乱はとどまる所を知らずといふ有様でした。どうしたら世の乱れやまがった人の心を正すことができるのか。推古天皇と共に、摂政として人々を導く立場にあつた太子は、真剣に苦悩されたこととせう。

国を良くしていく為には、政策の実行も重要ですが、まづ、国民一人一人の心を内面から清らかにしていくことを思はれたのではないでせうか。幸ひにも仏の教へが伝はり、その深い教へを記した経典もあります。「人、尤はなはだあ悪しきもの鮮すくなし。能く教ふれば之に従ふ。其れ三宝に帰きせずんば、何を以てか枉まがれるを直たださむ」この部分を言葉を補って説明すると、「人は、はなはだ悪いものは稀である。人は本来人間らしい心を持つてゐる。しかし、己の欲や間違つたものの見方に惑はされてゐる。仏の教へによつて根氣よく導けば、本来の心を取り戻すことができる。仏の教へに帰依しなければ、どうしてまがつた心を正しくすることができらうか」となります。心がまがつてゐることは、自分ではなかなか分かりませんが、どのやうな縁に触れて、悪の道に染まってしまうかも知れない危ふさを人の心は持つてゐます。まがつた人の心を正していくには、仏の教へに縋すがるしかないと思はれたのです。太子の心の奥には、はなはだ悪しきものとして蘇我馬子そがのうまこ（太子の義理の父にあたる）のこともあつたと推測されます。権力の亡者であり、大悪人ともいふべき馬子が、仏の教へに導かれて目覚めてほしいと願はれたのだと思ひます。太子ご自身も、己の心の闇から目を逸らされることはありませんでした。厳しい内省と共に、人間の愚かさにしみじみと思ひを致されたのではないかと思ひます。度し難い人の心はどうしたら救はれるのか。憎しみや争ひのない

平和な世を実現するにはどうしたらよいのか。自他共に救はれる道を仏の教へに求められたのだと思ひます。太子の願ひの通り蘇我馬子は救はれたのでせうか。

なほ、憲法十七条には、神さまをお祭りすることに触れてゐないのは何故だらうと疑問を持たれる方もゐると思ひます。坂本太郎博士は、神祭りは日常の衣食住と同じやうに朝廷でも民間でも行はれてゐたに違ひない。太子も行つてゐたに違ひない。あたりまへの日常的事柄なので載せられなかつたのですと述べてゐます。私もさうではないかと思ひます。

第三条について

三に曰く、詔を承りては必ず謹め。君をば即ち天とし、臣をば即ち地とす。天覆ひ、地載せて、四時巡行し、万氣通ふことを得。地、天を覆はむと欲するときは、即ち壞るることを致さむのみ。是を以て、君言ふときは臣承る。上行へば下靡く。故に、詔を承りては必ず謹め。謹まずんば自ら敗れむ。

天皇とお仕へする臣下とのあるべき関係を大地の關係に例へて分かりやすく説いてゐます。地が天を覆はんとするやうな恐ろしい出来事、即ち崇峻天皇の暗殺が、五九二年に起きたの

です。権力を恣にする馬子を心よく思はれなかつた天皇は、献上された猪を指差して、「いつ、この猪の首を切るやうに、嫌ねたし（憎らしい）」と思ふ人の首を切ることが出来るだらう」と漏らされた。それを伝へ聞いた馬子が、東漢直駒あすまのあやのあたゐこまに命じて天皇を暗殺したのです。しかも、殯宮もりのみや（葬儀の時まで、柩を安置しておく仮の御殿）を設置せず、その日のうちに葬ってしまった。蘇我氏は天皇家を凌ぐやうな大きな権力をもつてゐたが、それがつひに行きつくところまで行きついたので、この事件と言へます。

ところで、六世紀の初め、武烈天皇に皇子が無かつたので、当時の実力者大伴金村おほとものかむらが、諸臣と相談して、応神天皇の五代の子孫男大迹王おおとのおうを越前の三国（福井県坂井市）から迎へました。これが太子の曾祖父にあたる継体天皇です。これは、当時の人が、天皇の位は、尊い血筋の人だけに許されるものであると考へてゐたことを表してゐます。このやうに大変苦心をしながら、天皇家の血筋が守られてきたといふ歴史の事実は知っておくべきことではないでせうか。葛城氏かつらぎや平群氏へぐりと同じく天皇家から分かれて出た家柄の蘇我氏としては、五代の子孫が天皇になるのなら、自分たちだつてなつてよからうといふ不遜な意識を持つてゐたのです。太子は、臣下が天皇を殺害するといふやうなことは二度とあつてはならないと思ひました。天皇の権威をしっかりと確立し、天皇・臣下、そして民によつて構成される秩序ある

国家、それは単に権力によって支配し、支配される国家といふのではなく、和の心を持ってお互ひを尊重し睦び合ふ国家を目指したのです。それにしても、蘇我馬子は、この第三条を読んで、どう思ったでせう。ああ、これは自分のことを言っているなと思つたでせう。余りにも恐れ多きことをしてしまつたと後悔の念を持って読んだのか、或は苦々しく思つて読んだのか、どちらでせう。

第四条について

四に曰く、群卿百寮ぐんけいひやくりやう、礼を以て本と為よもとせ。それ民を治むるの本は、要かならず礼にあり。上礼ならざれば、下斉したのはず、下礼無ければ、必ず罪あり。是を以て、群臣礼あるときは、位次いじ乱れず。百姓ひやくせい礼あるときは、国家自ら治まるおさ。

礼儀作法や言葉遣ひが整つてゐる人を見ると、奥ゆかしさを感じます。もし、挨拶や言葉遣ひが蔑ろにされ、守るべき常識も守られなくなつたら、どんな社会になるでせう。例へば電車の乗り降り考へて見ます。ホームに並ばず、ドアが開いたら降りる人を待たずに我先

に乗り込む。身体がぶつかっても「すみません」とも言はず席を奪ひ合ふ。お年寄りや体の不自由な人、妊婦さんにも席を譲らない。その光景は殺伐とした修羅の世界そのものです。

礼とは、挨拶や言葉遣ひなどの礼儀や作法、そして人として踏み行ふべき決まりを言ひます。長い年月の積み重ねの中で、人に対する気遣ひや思ひ遣りの心が、言葉となり、作法となり、社会のマナーとなったものです。人間らしく生きるための潤滑油であり知恵と言つてよいものです。また、言葉や動作によつて気持ちを表現しなければ、その人が何を考へてゐるかも分からず、お互ひに疑心暗鬼となり人間関係も円滑にゆきません。

礼の大切さを心に刻み、まづ官吏が人として踏み行ふべき道を実践することによつて民に模範を示す。そして、民の間にも礼が守られてゐれば、自然と国家は治まると言つてゐるのです。外国では、災害や暴動が起きた際に、商店から略奪する場面が報道されてゐるのを見ることがあります。しかし、日本では、阪神淡路大震災や東北大震災の際にも、暴動や略奪は起らず、整然と救助を待つ人々の姿は、世界の国々から称賛されたことは誇りにしてもよいと思ひます。

第五條について

五に曰く、むさぼり餐を絶ち、欲を棄て、明らかにうったえ訴訟を弁めよ。其れ百姓の訴は、一日に千事あり。一日すら尚なおしかり、況んや歳としを累ねてをや。頃このころ、訴を治むる者、利を得るを常となし、まいない賄を見てうったえ讞を聴く。便ち財あるものの訴は、石を水に投ずるが如く、乏とほしき者の訴は、水を石に投ずるに似たり。是を以て、貧しき民は、即ち由よるところを知らず。臣の道、またここに於いて闕く。

むさぼり餐といふ字は、音読みでは「さん」と読み、飲んだり食べることです。欲は何でも自分のものにしたいたいと思ふ心。ここでは物欲、特に財欲を指します。他の読み方では、「あぢはひのむさぼりを絶ち、たからのほしみを棄てて」と読むものもあります。訴訟は裁判のことだけではなく、色々な請願の意味もあります。官吏に対し、酒や御馳走の接待や賄賂を受け取るなど具体的に言つてゐます。「賄まいないを見てうったへを聴く」といふのは、賄賂を見てから優先的に取り扱つたり、有利な判決を下すことです。美味しいものは食べたいし、欲しいものは手に入れたいと誰もが思ひます。しかし、欲に支配されると人間らしい心を失つてしまひます。

先般、文部科学省の幹部の不正が話題になりました。最初は食事位と思つて誘ひに乗り次

第に深みにはまっていたものでせう。山口県で三日間も行方不明になった二歳の子供を発見した七十八歳のボランティア尾畠春夫おぼたさんとは大きな違ひです。幼児は帰省中の曾祖父の家の近くで行方不明になったのですが、その幼児を無事に見つけて家族に届けた際、お祖父さんじいから、夏の盛りでしたからお風呂に入りご飯を食べて行って下さいと誘ひを受けました。結構ですときっぱり辞退しました。さらにまた、雨が降ってきたので傘を持って行って下さいといふ勧めも断つてゐます。尾畠さんは、ボランティアは誰にも迷惑をかけない、自己責任で行動するのだといふ強い信念を実践してゐる人でした。

裁判や政治が公正に行はれなければ、弱い者が泣き寝入りする社会となり、政治に対する信頼は失はれてしまひます。役人は接待や賄賂をきっぱり断つて公正な立場で政治や裁判に取り組むことが、臣下としての務めであり道であるといふのです。十七条憲法では、君の道、臣下の道、民の道それぞれのあるべき姿を説いてゐます。私たちも、学生、会社員など仕事も立場も様々ですが、それぞれの道がどうあるべきかを一人一人が考へて実践していけば、自づと社会全体のために貢献することが出来ると思ひます。

第六條について

六に曰く、悪を懲し善を勸むるは、古の良典なり。是を以て、人の善を匿すことなく、悪を見ては必ず匡せ。其れ諂ひ詐る者は、即ち国家を覆す利器たり、人民を絶つ鋒劍たり。亦佞り媚ふる者は、上に対ひては即ち好んで下の過を説き、下に逢ひては即ち上の失を誹謗る。其れ此の如き人は、皆君に忠なく、民に仁なし。是れ大乱の本なり。

子供の教育で大切なことは、悪いことは間違つてゐるとしつかり教へ、善いことはとても良かったと褒めることです。それは官吏の仕事に取り組む姿勢を正す場合も同じです。この第六条は、官吏を監督する立場の高位の官吏に対しての言葉と思ひます。「諂ふ」のは相手の氣に入るようにこびること。「詐る」のは自分の立場を不利にしないため嘘をつくことです。その恐ろしい害悪は、国家を覆す利器（よく切れる刃物・武器）であり、人民を絶つ鋒劍だと最大級の表現で警告してゐます。「佞り媚ふる」の佞は口先ばかりでおもねること。媚は人の氣に入るやうに振る舞ふことです。

官吏の立場にある人が、心にもないお世辞を言つて上役の顔色を伺つたり、自己の保身のために平気で嘘をつくなど、信念のない無責任な姿勢で行政の仕事に当たつてゐたら国の乱れにつながつていくのは当然なことだと思ひます。私たちの周辺にも「上に対ひては即ち

好んで下の過あやまちを説き、下に逢あひては即ち上の失あやまちを誹そしる」、かういふ人をどこかで見たことがあるなど思はれる方もゐると思ひます。省みますと、自分も人に諂たつたり、思はず言ひ訳の為に嘘をついたりした経験があるなど思ひ当たります。ですから、この条に書かれてゐることは決して他人事ではなく、自身の問題でもあります。

先日テレビで面白いものを見ました。梟ふくろうが敵に会つた時、相手が自分よりも弱いと判断すると、目を見開き思ひ切り羽を広げて体を大きく見せ相手を威嚇します。相手が自分より強いと思ふと、体を斜めにして出来るだけ細くして敵意の無いことを示します。人間が諂たつたりおもねるのも、自己保身の動物的本能の名残かも知れません。人にお世辞を言つたり、ご機嫌を伺ふことも、世間を渡る際には時に必要な知恵だとも思ひます。しかし、公正であるべき官吏が保身に汲々として誠実さが無ければ心のこもつた行政はできません。官吏の善い行ひを見たら、皆に明らかにして善行を勧める。悪い行ひを見たら匡きよ正する。官吏の綱紀肅正を図ることは何時の時代に於いても肝要です。

ここでは直接的には官吏の心得を説いてゐますが、私たち誰しもが他者と交はりながらより良く生きて行かうと努める上で大切なことが説かれてゐます。

第七条について

七に曰く、人おのおの任あり、掌ること、宜しく濫れざるべし。其れ賢哲官に任ずるときは、頌音即ち起り、奸者官を有つときは、禍乱即ち繁し。世に生まれながら知るもの少し。尅く念ひて聖と作る。事、大少となく、人を得て必ず治まる。時、急緩となく、賢に遇へば自から寛なり。此れに因つて、国家永久にして、社稷危きことなし。故に古の聖王は、官の為に人を求め、人の為に官を求めず。

「官の為に人を求め、人の為に官を求めず」このことを実践したのが聖徳太子です。

太子は六〇三年に冠位十二階の制を定めました。それまでは官職は世襲で身分は固定してゐました。冠位は身分に関らず個人の才能や功績に応じて与へられ、昇進することもできました。冠は絹で作られ、儀式のときはそれに髻華（髪飾り）をつけました。冠の色で身分の高下を表し、同色の美しい衣服を整へました。色とりどりの冠をかぶり、同色の衣服に威儀を正した朝廷の人たちが居並ぶ有様はさぞ立派なものであったと思ひます。小野妹子は隋に遣ひしたときは大礼の位でしたが、帰国して功績を認められ、最高の大徳の位に上りました。冠の色は錦（または紫）でした。鞍作鳥は法興寺（飛鳥寺）の仏像（飛鳥大仏）をつく

り、金堂の中に巧みに安置した功績で大仁の位を授けられました。冠の色は青でした。この制度は人々に希望を与へ、飛鳥時代の推進力となったのです。

「尅よく念おもひて聖と作る」といふ言葉は、漠然と何か考へるといふことではなく、丁度今、私たちが憲法十七条の文章と一緒に読みながら、言葉に即して、太子の思想を学んでゐることとつながりがあります。「和を以て貴と為し」とは、どういふ意味か、皆さんとあれこれ考へてゐます。また、一人になれば、自問自答して考へます。このやうに偉人の書いた文章や語った言葉をもとにして、その意味するところはどいういふことだらうかと思案を重ねることが「尅よく念おもふ」といふことではないかと思ひます。それによつて色々なことに気付いて精神の深みを増して行くのだと思ひます。

太子の場合は、法華経などの仏典を学ぶことによつて「尅よく念おもふ」ことを重ねました。

それは、やがて宮中での法華経などの講義やお経の注釈書（法華義疏ほつげぎしよ、維摩経義疏ゆいまうぎしよ、勝鬘経義疏しょうまんぎしよ）となつて実を結びます。太子は身を以つて「尅よく念おもひて聖と作る」といふことを体現された方でした。かつてこの合宿教室で行はれた小林秀雄先生のご講義で私の心に残つてゐる言葉があります。それは「心を働かせなさい」といふ言葉です。日常の生活に流されてゐるだけでは駄目で、心を働かせて生きなさいと言はれたと思ひます。それは勝手に空想するこ

とと違ひ、感銘を受けた具体的言葉や体験に取り組み、その意味を知るために、自問自答を重ねることだと思ひます。「尅よく念おもふ」といふことと通じる言葉ではないでせうか。

「事、大少となく、人を得て必ず治まる。時、急きゆう緩かんとなく、賢あに遇あへば自ゆるから寛やかなり。此れに因つて、国家永久にして、社稷しやしやく危あきことなし」といふのは、小事はもとより大事に於いても、すぐれた人を得れば、必ず世の中もよく治まる。平時はもとより非常時に於いても、賢明な人が出て治めれば、困難な状況も自然に寛ゆるとなる。かういふ訳で、国家は永久に続き、危あふくなることはない、といふ意味です。「大少となく」の「少」は小の意味です。中国六朝時代（三世紀初頭から六世紀末）の通用字（双方のいずれにも通じて用ゐること）だったらしく、太子は三経義疏の中にも「少」の字を用ゐてゐます（花山信勝氏による）。

第八条について

八に曰く、群卿百寮、早く朝まいり晏おそく退まかでよ。公事いとしよ監まなし。終日ひねちすにも尽まくし難し。是を以て、遅まく朝まいるときは急おそに逮おはず、早く退まかるときは必ず事ま尽まさず。

群卿百寮とは全ての官吏といふ意味です。当時は官吏の制度も次第に整へられてゐた頃で

す。国家の仕事は多忙だから、早く朝廷に出仕し遅く退出せよ。遅刻や早退をしてゐたら、急な仕事に間に合はなかつたり仕事を終へることもできないと、官吏の心得を説いたのです。推古天皇の次の舒明天皇八年（六三六）のとき、大派皇子（敏達天皇の皇子）が「この頃、官吏たちが朝廷に出仕することを怠つてゐる、今より後は、卯の始め（午前五時）に出勤して、巳の後に（午前十一時）に退出することにしよう。その時刻は鐘で合図しよう」と、大臣の蘇我蝦夷に提案しました。今から見ると、当時は随分早い勤務時間であつたことに驚きます。蝦夷はこの提案に従ひませんでした。残念ながら太子の精神は忘れられ、朝廷の規律も乱れてゐたやうでした。

第九條について

九に曰く、信は是れ義の本なり。事毎に信あるべし。其れ善悪成敗は、要ず信にあり。群臣共に信あらば何事か成らざらむ。群臣信なきときは、万事悉く敗れむ。

信とは、言葉に偽りのないこと、まこと、まごころのことです。まことは、義、即ち人として踏み行ふべき道の根本である。いつも誠意をもって行動すべきである。善いことも悪い

ことも、成功も失敗も、その大事な点は、まごころを込めて行動したかどうかなのである。群臣が共にまごころをもつて事に当たれば、何事でもきつと成し遂げることが出来ると言ふのです。たとへ、事が成就しなくてもまごころを尽くした結果であれば悔いを残すこともありません。群臣は、今で言ふなら、政治家や官僚です。お互ひに真摯に政策の立案や実行に務めていけば、その場合、人々の反発や自分の立場が危ふくなることも覚悟することがあるかも知れない、しかし、公の為に勇氣をもつて事に当たれば、困難なことも成し遂げることが出来ると思ひます。しかし、自己の保身や利益に囚はれ、無責任な態度で取り組むならば全ての事柄は悉く駄目になるだらうと厳しく指摘されます。

第九条は短い文章ですが、実に大切なことを説いてゐます。何も政治家や官僚だけではなく、全ての人に取つて信の大切なことは言ふまでもありません。近頃、名だたる大企業が、製品のデータを偽つて販売してゐたことが次々と明るみに出ました。日本の製造業の信頼を根底から損なふやうな事態が起きてゐます。補償などに莫大な費用が生じて大きな打撃を受けます。それにも増して、一度失はれた信頼を回復することはとても困難な道のりです。社員一人ひとりが我が事と思つて、日々の仕事に向ひ、特に管理職や経営の立場にある人が、信の大切さを心に刻み不祥事を防止するしかないと思ひます。目先の利益や分からなければ

嘘をついても平氣だといふ心が判断を狂はせるのだと思ひます。物事のあるべき本質をしつかり見据ゑることが肝要ではないでせうか。

第十條について

十に曰く、忿を絶ち、曠を棄て、人の違ふを怒らざれ。人皆心あり。心各執有り。彼是とするときは即ち我は非とす。我是とするときは即ち彼は非とす。我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず、共に是れ凡夫のみ。是非の理、詎ぞ能く定むべき。相共に賢愚なること、鑿の端無きが如し。是を以て、彼の人曠ると雖も、還つて我が失を恐れよ。我独り得たりと雖も、衆に従ひて同じく挙へ。

皆さん、怒つた時には、自分の体はどのやうになりますか。体が強張り、息苦しくなり、血圧も上がります。怒ることは健康にも良くありません。忿は心の怒り、曠は目をむいて怒ることです。意見が違つて対立すると、喧嘩にもなりかねない。あとで振り返るとどうして自分の意見にこだはつてゐたのかと気付かされます。「我必ずしも聖にあらず、彼必ずしも愚にあらず、共に是れ凡夫のみ」といふ言葉が心に響いてきます。「共に」「是れ」「凡夫

のみ」と言葉が強めてゐる点に注意して欲しいのです。太子は、この世の中の人は、身分の高下、頭の賢愚に拘はらず「全ての人が凡夫である」と指摘されてゐます。そして誤つたものの見方にとらはれたり、欲に支配されると、人の道から外れてしまふ。だから、「忿ふんを絶ち、瞋しんを棄て、人の違たがふを怒らざれ」と実に大事なことを説かれてゐます。太子は、凡夫のままに救はれる道、つまり人間らしく生きる道を説かれたと思ひます。

聖人とは、凡夫に徹した人のことではないでせうか。己の足らはぬ姿を見つめ、自他の区別なく人々と共に救はれる道を実現したいと精進してゐる人こそ聖人だと思ひます。聖徳太子はまさにそのやうな方であつた。不遜な言ひ方になりますが、聖徳太子は、「大」がたかさんついた大凡夫、偉大な凡夫であつたとも言へます。人は死ぬまで凡夫であるといふどうすることもできない事実を見極められ、「共に是れ凡夫のみ」と仰しやられた意味は実に深く大きいものがあります。いつも人との間に心の垣根をつくつてゐる私たちですが、お互ひに、至らぬ凡夫であることに目覚めれば、そこに他者との広やかな共感の世界が開けてきます。お互ひに凡夫であるからこそ共に手を携へて人間らしくありたいといふ意欲も湧き、努力しようといふ気持ちも起きてくるのだと思ひます。

私たちが学生時代から多くを教へられて来た『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』とい

ふ本がありますが、著者の黒上正一郎先生（徳島の商業学校の御卒業で、阿波銀行に御勤務。独学で聖徳太子の御思想及び仏典の研究を重ねられ、上京してさらに諸家に学ばれた。旧制第一高等学校・高等師範学校の学生を指導された。昭和五年三十歳で亡くなる）は、他者との広やかな共感の世界を「他と共なる生」と表現されたのです。私自身もつまらないことにこだはる自分に嫌気がさすこともありましたが、太子の言葉に触れて救はれる思ひがしました。凡夫のまま太子の教へに導かれて人間らしい生活を心がけていけば良いのだと気付かされました。今まで自己の殻に閉ぢこもり息苦しかった世界から、伸びやかな世界に解き放たれた思ひがしたのです。

第十条を読んだときに、第一条の「上和ぎ下睦びて事あげつらを論ふ」ことが出来る為には、お互ひに凡夫であることに目覚め素直な気持ちになることが大切だといふことが分かりました。

個我の迷執から解き放たれて、お互ひ謙虚な気持ちで接することのできる世界、それこそが、太子の願はれた世界だと思ひます。そして、「共に是れ凡夫のみ」と強い口調で表現されたこの第十条はその後の日本の仏教の方向をしつかりと定めた言葉ではないかと私は思ひます。

他者との共感の世界——「他と共なる生」——

他者との共感の世界とは、どういふ世界かといふと、「朝の集ひ」で澤部壽孫としつぎ副理事長が、学徒出陣で二十二歳で戦死した松吉正資まさしさんの和歌三首を紹介されました。出征の直前に故里（山口県安下庄町）で詠まれたお歌でした。

ゆく身にはひとしほしむるふるさとの人のなさけのあたたきかな

数ならぬ身にはあれども吾を送る人の思ひにこたへざらめや

うつそみはよし砕くともはらからのなさけ忘れじ常世行くまで

私たちはこの歌に接したときに、出征を前にした一人の青年の心がすつと伝はってきて感動しました。この時、松吉さんの心と私たちの心が一つになるといふ貴重な体験が出来たのではないでせうか。

また、『万葉集』に載ってゐる「防人の歌」や「東歌」の真情溢れる歌を読みますと、不思議なことに千数百年も昔の人たちの心が生き生きと私たちの心に甦よみがえってきます。残された短歌や言葉を通じて、時間に関係なく他者の思ひを追体験できるわけです。「他と共なる生」とは、喜びも悲しみも苦しきも他者と共感できる世界だと思ひます。

この講義の次は「班別輪読」の時間ですが、これは皆さんにとって「他と共なる生」を実感する実践の場所となります。まづ、太子の文章に即して、太子の仰りたいことは何だらうかと、正確に理解するやうに心を合はせて輪読をして下さい。討論をする場合は、考への違ひを超えて、まづ班員同士がそれぞれいふ気持ちで語ってゐるかを正しく汲み取る事が大切になります。遠慮することなく自由に疑問点を話し合つて良いと思ひますが、太子の言葉の意味するところは何かといふ共通の意識をもつて話し合ふことが大事だと思ひます。

講義

日本の国柄

— 明治維新百五十年に思ふ —

三菱地所(株) 都市開発二部専門調査役

青山直幸



- 一、国柄とは何か
- 二、トルコ旅行で実感した日本の国柄
- 三、日本の国柄の特徴
- 四、明治維新にみる日本の国柄
- 五、近代的独立国家への道
- 六、昭和、平成へと連なる明治維新の精神
- 七、をはりに

一、国柄とは何か

皆さん、「国柄」といふことを考へたことがありますか。普段の生活の中では余り考へることはないと思ひます。あの人は、人柄が良いとは、よく言ひますね。「人柄」とは、性格、教養などが、自然に言行に現れたものです。「国柄」とは、辞書を引くと国の成り立ち、国家の性格、国が成立した事情と書かれてゐますが、ちょっと分かりにくい。私は、その国の国民が、大切にして来た価値に基づく特有の性格であると思ひます。

二、トルコ旅行で実感した日本の国柄

私は、七年前にトルコ旅行に行きました。アジアの西端にあつて、東西文明が交流した国に魅力を感じてゐたからです。トルコ人は、親日的だとは聞いてゐましたが、市場などに行くと、「私、日本人大好きです」とすり寄つて来る。ガイドさんに、なぜトルコ人は、非常に親日的なのか、聞いてみました。ガイドさんは、もちろん日露戦争に日本が勝つたこともあるが、それより前に「エルトゥールル号事件」といふ大事件があつたことを話してくれた

のです。明治二十三年（一八九〇）オスマン帝国海軍の軍艦エルトゥールル号がオスマン帝国皇帝からの親書を明治天皇に奉呈した後、帰国の途に就いたが、九月十六日夜半紀伊大島（現在の和歌山県串本町沖）の檜野崎かしのざきの東方海上で座礁・沈没し、五百八十七名の犠牲者を出した。野崎灯台に流れ着いた生存者が国際信号旗を使用してオスマン帝国海軍であることを伝達。それを知った檜野の住民達は総出で生存者の介抱に当たったのです。浴衣等の衣類や卵、サツマイモ、非常用の鶏肉等を供出、生存者の救護に努め、六十九名が生還。知らせを聞かれた明治天皇は政府に対し、可能な限りの援助を行ふやう指示されました。事故の二十日後、日本海軍の「比叡」「金剛」二隻の軍艦が品川港から生存者を乗せ、翌年一月二日に首都イスタンブールに送り届けたのです。

後に、トルコのネジャッティ・ウトカン駐日大使は、「勤勉な国民、原爆被爆国。若いころ、私はこんなイメージを日本に対してもっていた。中でも一番先に思い浮かべるのは軍艦エルトゥールル号だ。（中略）悲劇ではあったが、この事故は日本との民間レベルの友好関係の始まりでもあった。（中略）エルトゥールル号遭難はトルコの教科書にも掲載され、私も幼いころに学校で学んだ。子供でさえ知らないほど歴史上重要な出来事だ」と語りました（『産経新聞』平成七年一月九日付）。名も無き民の惻隱の情が、明治天皇にも伝はり、



君民一体となってトルコ軍人の救護に当たったことに、トルコ国民はどんなに感謝したことでせう。わたしは、これこそ、明治日本が誇るべき、日本の国柄だ」と実感したのです。

三、日本の国柄の特徴

(一) 日本の歴史の特徴

国史学の泰斗・坂本太郎博士は、日本歴史の特性として、第一に連続性、第二に躍進性、第三に中和性を上げられてゐます。日本の国柄もこの三つの性格で考へると理解し易い。連続性とは、古代からの伝統文化が長く続いてゐること。ことに万世一系の皇統、君民の信頼関係の継続はその基軸です。躍進性とは、主体的に外国文化を取り入れ、それによつ

て日本文化を豊かにし、質を高めていくこと。中和性（融和性と言っても良い）とは、様々な個性や特徴を持つ思想・宗教、文化、技術を咀嚼し、融合・熟成することです。修験道や隠れキリシタンなどは、その典型的な例でせう。この三つの特性が不可分に結びついてゐるのが日本の国柄であると言へるでせう。

(二) 天皇といふ御存在

日本の国柄の基軸となつてゐる万世一系の皇統を考へる時、知つておくべきことがあります。それは、天皇のまつりごとの本質とは何かといふことです。『古事記』の上つ巻「建御雷神と国譲り」といふ一節に次のやうな文章があります。

「是に天照大御神詔りたまはく『また曷れの神を遣はさば吉けむ』とのりたまふ。（中略）尔かして天鳥船神を建御雷神に副へて遣はす。是を以ち此の二の神、出雲国の伊邪佐の小濱に降り到りて十掬の劔を抜き逆に浪の穂に刺し立て、其の劔の前に踏み坐、其の大国主神を問ひて言はく、『天照大御神・高木神の命以ち問ひに使はせり。汝がうしはける葦原中国は、我が御子の知らず国と言依さし賜へり。故汝が心いかに』ととひたまふ。」

天照大御神は、水穂國みずほのくには御子・天忍穗耳命あめのおしほのみみことに治めさせたいといふ命を建御雷神と天鳥船神の二神に託されます。二神は、出雲國に降り、領主・大国主神に十掬の劔を抜き、波頭に刺し立てて、「あなたが領有する葦原中国は、天照大神の御子が治められる國であると委任された。あなたは、どう思ふか」と尋ねるのです。「うしはく」（領く）と「しらす」（知らず）言葉の使ひ分けに着目して下さい。生涯を古事記の研究に費やした江戸時代の有名な国学者・本居宣長がその著『古事記伝』に書いてゐる説明によれば、「・うしはく：或る地方の土地と人民を我が物として即ち我が私有物として領有支配する。・しらす：人が自己以外の外物と接する場合即ち、見るも聞くも、嗅ぐも、飲むも、食うも、知るも、みな自分以外にある他のものを、我が身の内にうけ入れて、気持ちの上で、他の物と我とが一つになること即ち自他の区別がなくなつて一つに溶けこんでしまふこと」（『皇室と国民』元侍従次長・木下道雄著）といふ意味内容になります。

天皇のまつりごとの本質は、政治的な権力を超越した「しらす」にあるのです。歴代の天皇は一貫して神々に国と民の平安を祈られ、「おほみたから」と民を慈しまれる。国民は父の如く敬ひお慕ひ申し上げる、この君民の絆こそ、天皇と国民の間柄といへるでせう。

四、明治維新にみる日本の国柄

(一) 明治維新をどう捉へるか

今年は、明治維新百五十年に当たります。百五十年前に起きた明治維新といふ一大変革に日本の国柄がどう現出したのか、皆さんと共に考へてみたいと思ひます。明治維新を「尊王攘夷派」と「開国佐幕派」の対立抗争として捉へたり、「市民革命」(ブルジョア革命)といふ西欧の政治概念を以つて適否を論じたりする見方では、明治維新の真相は見えて来ない。迫り来る西欧列強に対し、公家も武士も、全国の雄藩、国民すべてが力を合はせて、日本国の独立を守ることがを念願された、孝明天皇の御存在抜きに明治維新を語ることはできないと思ひます。内乱を起こすことなく諸外国の干渉を排し、近代的統一国家を創り上げること、この一大変革を伴つた独立運動の原動力になられたのが孝明天皇であつたのです。その独立不羈の御意志に全国の大名、志士達が奮ひ立つたのでした。

(二) 孝明天皇の御意志

○薩摩藩主・島津齊彬なりあきらに賜った御製

かの西郷隆盛が敬慕心酔した開明的な名君・島津齊彬に対し、孝明天皇はその御志を短歌に込めて、伝へんとされるのです。

安政二年正月九日、「主上御感の余り」（天皇は深くお感じになられて）、近衛右府うぶ（右大臣）に内旨を伝へられ、左の宸筆の御製を齊彬に賜ふべく右府にお授けになりました。

詠寄国祝 和歌

武士もののふも心あはせて秋津あきつすの国はうごかずともにをさめ舞

齊興朝臣なりおき齊彬朝臣が国政にあつき心ざしを叡慮朝からずつねづね仰こともありしに、こよひ武士も心あはしての御製を御懐紙に宸筆染られて伝へよとあつき仰ありしをかしこみて、

武士の心も君がめぐみもてげにいやましに国やをさめん

とつたなき筆ことの葉も後のしるしにもならむとかき添て侍るもの也

安政二とせの春

右大臣忠熙みだひろ

さつま宰相どの

中将どの

（『島津齊彬公伝』池田俊彦著）

孝明天皇はかねがね薩摩の島津斉興・斉彬父子が国政に熱き志を抱いてゐることを深く感受され、そのお気持ちに宸筆（天皇自ら筆を執つて書かれたもの）の御製に詠まれ、右府（右大臣）である近衛忠熙に、斉彬に手渡すやうお授けになつたのです。近衛右府は、自らの歌を添へて、文を書き、斉彬に手渡しました。

「詠寄国祝」と詞書に書かれた孝明天皇の御製をご覧ください。「秋津す」は、秋津洲のこととで日本のこと。「秋津すの国はうごかず」とは、日本の国はびくともしないの意。「ともにをさめ舞」とは朝廷と薩摩武士が力を合はせて国を治めていかうの意でせう。孝明天皇の熱い呼びかけに、斉彬はどんなに感激し、発奮したこととせう。

○長門藩主・毛利慶親よしちかに賜つた御製

維新の志士を多く輩出した長門（長州）藩の藩主・毛利慶親（別名敬親たからか）は、さうせい侯こうと言はれたやうに、家臣の進言に耳を傾け、有能な人材を引き上げた器の大きな人であつたやうです。

六月二日（文久元年）長門藩主・毛利慶親の臣・長井雅樂うたたを以て慶親へたまひたる

國の風ふきおこしてもあまつ日をもとの光にかへすをぞ待つ

孝明天皇は、長門藩の家老・長井雅樂を通して、御製を慶親に賜ったのです。「あまつ日」とは天の光のこと。「もとの光にかへす」とは、本来のあるべき国の姿のもどすといふことです。天皇の威光の元に、全国の大名が結集し、国民が一つにまとまる姿を念願されたのでせうか。この御製は、慶親を通して、多くの憂国の士に伝へられたこととせう。

○会津藩主・松平容保かたもりに送られた御宸翰

文久三年（一八六三）に起つた八月十八日の政変を主導したことを嘉よみして孝明天皇は、会津藩主・松平容保に御宸翰と御製を賜つたのです。八月十八日の改変とは、攘夷強硬論を唱へる長州藩を中心とした武士達と三条実美らの急進的公家が組んで、天皇の意向に反して大和への親征行幸を強行しようとした。これに天皇が激怒されたことを受け、京都守護職であつた松平容保が、薩摩の了解を得て、行幸を阻止、急進派の一掃を行った事件です（七卿落ち）。

松平容保は、賜つた御宸翰と御製を竹筒に入れ、それを首から下げて終生肌身離さず、その中身を誰にも見せることなく亡くなつたとのことです。

「堂上以下、暴論を疎つらね、不正の処置増長につき痛心堪え難く、内命を下せしところ速やかに領掌し、憂患掃攘ゆうかんそうじょう朕の存念貫徹の段、全くその方の忠誠にて深く感悦の余り、

右巻箱これを遣はすものなり。文久三年十月九日」

「文久三年十月九日、守護職・松平容保に宸筆の御製を賜ふ

たやすからざる世に武士ものぶの忠誠の心をよろこびてよめる

和らぐもたけき心も相生あひおひのまつおちばの落葉のあらず栄えむ

武士とこころあはしていはほをも貫きてまし世世の思ひで」

〔日本人の魂と新島八重〕桜井よしこ著

一首目の「和らぐもたけき心も」は穏やかな心も荒々しい心もといふ意味ですが、公家と武士のことを指してゐます。「相生のまつ」は、根本から二本の幹を出してゐる松のことです。「落葉のあらず栄えむ」とは枯れ葉になることなく、いつまでも栄えてほしいといふ意。公家と武士とが一体となつてこの国を守り立ててほしいといふことでせう。二首目も同様の御氣持が詠まれてゐますが、「いはほをも貫きてまし」にはより強い御意志が込められてゐるやうに感じます。盤石の巖のやうな国難をも公家と武士とが心を合はせて突破してほしいとの強い御願が溢れてゐる御言葉だと思ひます。

○將軍・家茂に与へられた御宸翰

元治元年（一八六四）一月二十一日徳川家茂は、征夷大將軍右大臣に任命されました。そ

の恩に謝する為、諸大名や高家四十四人を従へて孝明天皇に拜謁しました。

「其の危きこと実に累卵るいらんの如く、又眉を焼くが如し。朕之を思ふに夜も寝ぬる能はず、食喉を下る能はず。嗚呼、汝夫れ是れを如何と覩る。是れ則ち汝すなはの罪に非ず。朕が不徳の致す所、其の罪朕が躬みに在り。天地鬼神、夫れ朕を何とか伝はん。何を以て祖宗そそうに地下まみゆに見ることを得んや。由よつて思へらく汝は朕が赤子せし、朕、汝を愛すること子の如し。汝、朕を親しむこと、父の如くせよ。其親睦の厚薄、天下挽回ばんかいの成否に關係す。」

(『孝明天皇紀』平安神宮刊)

傲慢な列強から併呑されやうとして、国全体が瓦解寸前にある。その危機的状况を「累卵の如く、又眉を焼くが如し」(累卵とは積み重ねた卵)と表現されてゐます。この様を思ふと、私は夜も眠れないし、食事も喉を通らない。しかし、それは、貴方の罪ではなく、私の不徳の致す所である。そこで、孝明天皇は、家茂に心を込めて言はれるのです。「汝、朕を親しむこと、父の如くせよ」。そして、「其親睦の厚薄、天下挽回の成否に關係す」と述べられ、天皇と将軍が深く親しみ合ふことにより、公武が強い絆で結ばれ、君民一体となつてこそ国難を打開していけるのだと熱烈な思ひを表明されるのです。

同月二十七日孝明天皇は、さらに將軍家茂と徳川慶喜らを小御所に呼び、御宸筆の詔旨を

与へられたのです。

「然しかと雖も皆いこれ朕がが不徳の致す所にして、實かに悔慙げんに堪えず。(中略)嗚呼ああ汝なんじ將軍及び各國の大小名は、皆朕が赤子なり。今の天下の事、朕と共に一新せんことを欲す。」

(『孝明天皇紀』平安神宮刊)

さらに、孝明天皇は、將軍だけでなく、全国の大小名も皆御自分の大事な子供であると断言され、ともに手を携へて、此の世の中を一新していかうと切望されるのです。

○『御述懐一帖』に偲ぶ孝明天皇の御軫念

文久二年四月、孝明天皇がかうした内外の情勢を深く御憂慮になられて、書きとどめられたものを近臣にお示しになられた『御述懐一帖』の一節を読んでみませう。

「去年元げんを改め天下と共に更始す。皇妹既に尚めあし公武実じつに一和す。此時およに迫おんで、既往は咎とがめざるの教しゆに由り、天下に大赦し、三大臣の幽閉を免じ、列藩臣の禁錮を赦し、有志の士の連座せる者を放はなんことを、速すみに幕府に告つげて、以て此の挙おこを行はしめよ。是朕深く欲する所なり。爾後じこ天下心を合せ力を一にし、十年の内を限り、武備充実せしめ、断然として夷虜に論ろんすに、利害を以てし、一切に之を謝絶し、若し聴きかずば速すみに膺懲ようちやうの

師を拳あや、海内の全力を以て、入りては守り、出ては制せば、豈神州の元気を恢復せんに、難きこと有んや。若し然らずして惟ただに因循姑息旧套きゆうたうに従つて改めず、海内疲弊の極み、卒つひには戎虜の術中に陥り、坐しながら膝を犬羊に屈し、殷鑑遠からず印度の覆轍ふくてつを踏ふまば、朕実なほに何を以もつてか先皇在天の神靈に謝せんや。」（『御述懐一帖』）

一行目の「皇妹既に尚めあはし実に一和す」は、いはゆる「皇女和宮様の御降嫁」を指します。幕府は、難局を切り抜ける為には、朝廷との融和が必須であり、その有効な方策として、將軍家茂に皇女和宮を正室として迎へることを強く要請します。当初は、固辞されましたが、やむなく断腸の思ひで御降嫁をお許しになります。その折の心境を詠まれた和宮のお歌です。

惜しまじな君と民とのためならば身は武蔵野の露と消ゆとも

孝明天皇は、君と民の為に家茂に嫁いだ御妹和宮の心境を思はれ、どんなに心が痛まれたことでせう。しかし、これで公武が一体となり、国難に立ち向つていけるといふ安堵感が「実に一和す」といふ言葉に現れてゐます。

四行目の「爾後天下心を合せ力を一にし」以下は、孝明天皇の悲痛なまでの国家独立の御意志が表出してゐる文章です。孝明天皇は、観念的に排外的な攘夷を唱へられたのではな

かった。国民が心を合はせ、十年を限度として武備を充実させつつ、毅然として列強に対して、具体的な利害を以って説得し交渉しよう。若し、列強がこれを受け入れないならば、「膺懲の師」(討ちこらしめるための軍隊)を挙げて、軍事的行動に出ようではないか。天皇は実に現実的に列強に対峙していくことを考へてをられたのです。「殷鑑遠からず印度の覆轍を踏ば、朕実は何を以てか先皇在天の神靈に謝せんや」。遠い昔の話ではない、インドがイギリスに植民地化された事例の二の舞になれば、皇祖皇宗の神々になんとお詫びしたらよいであらうか。列強の侵略から、いかに国の独立を守るかを身命を賭して考へ抜かれたのです。

○孝明天皇の御製

孝明天皇のお気持ちの切実さは、次の御製からも拝察されます。

同年(安政元年)の御製とて子爵六角博通の叢書の中に見えた [安政元年…御年二十四歳]

あさゆふに民やすかれとおもふ身のこゝろにかゝる異國ことくわいの船

述懐 [元治元年…御年三十四歳]

天あめがした人といふ人こゝろあはせよろづのことにおもふどちなれ

(御詠年月、未詳の御製)

澄ましえぬ水に我が身は沈むともにごしはせじなよろづ國民くこたみ

一首目には、国民の平安をひたすら願はれる御心に、異国船の出没がいかに不気味な影を落としてゐたかが偲ばれる御歌です。二首目には、上下の差なくすべての国民が心を合はせてこそ、国難が打開できるのだとの御信念が偲ばれます。「おもふどちなれ」には、国の安危に心を寄せ、心を碎き合ふ同志であつて欲しいといふ願ひが込められてゐます。孝明天皇が、島津久光（薩摩藩主・島津斉彬の弟で、斉彬急逝後、藩政を主導した）への御宸翰の中で使はれた「和熟の治国」といふ言葉が思ひ起されます。三首目には、自分の身は水底に沈んでも、国民だけは絶対にその濁つた水の中で苦しませるわけにはゆかないといふ捨身の御覚悟が詠まれてゐます。

(三) 孝明天皇の崩御と御志の継承・発展

○御父君を亡くされた明治天皇の御悲歎

有力な公家や大名が天皇の御前で議論を交はす「国是会議」なども開かれ、孝明天皇の御志は少しづつ実を結んでゆくかに見えたが、慶応二年（一八六六）十二月 突然の病（痘瘡

か)で崩御されます。御年未だ十六歳であられた明治天皇の御悲歎はいかばかりであつたでせうか。明治天皇の御生母中山二位局は、書簡の中で、「ごく内々ながら、昨夜戌の刻すぎごろ御事切れ、何とも恐れ入り候。尤もはなはだ親王様御愁傷様、御悲歎何れも只落涙の外無く候。」と書いてゐる。又、中山二位局の父に当たる中山忠能の日記には、「先帝崩御後の宸詠見せ下さる。四十余首、御悲歎御追悼の叡情、玉吟の中、仰せ尽され、まことに以て感佩、思はず、落涙しをはんぬ。玉詠中三首、帝王の重き御儀詠ぜらる」とあり、明治天皇が御父君を亡くされた深い悲しみを四十余首もの短歌(紛失し、現存せず)に詠まれたことが記されてゐます。忠能はその連作を読み、痛切に心に感じ、落涙してしまつたのです。

○御父君を偲ばれる明治天皇の御製

父・孝明天皇は、幼少の明治天皇に短歌の手ほどきをされたり、神々への参拜に連れていかれたりしたと伝へられてゐます。後に、明治天皇は、御父君を偲ばれて、次のやうな御製を詠まれてをります。父と子の限りない交情と絆がしみじみと心に染みてきます。

月

〔明治三十八年〕

たらちねのみおやの宮にをさなくて見しよこひしき月のかけかな

親

〔明治四十年〕

たちねのみおやの教あらたまの年ふるまゝに身にぞしみける

古寺松

〔明治四十年〕

月の輪のみささぎまうでする袖に松の古葉もちりかかりつ、

どの歌にも、御父君を敬愛し追慕される明治天皇の心情が溢れてゐると思ひます。

五、近代的独立国家への道

○明治天皇の御決意

明治天皇は、御年十六歳で踐祚、御父君を亡くされた御悲歎の底から立ち上がられ、その御志を継がうと決意されるのです。時代は鳥羽伏見の戦ひ、戊辰戦争を経て、明治新政府が動き出さうとしてゐた時です。新時代の天皇として、若き天皇は、悲壮な覚悟を以て即位されたのです。

明治維新の宸翰

明治元年三月十四日

朕幼弱を以て猝に大統を紹ぎ、爾來何を以て萬國に對立し、列祖に事へ奉らんと朝夕
恐懼に堪へざるなり。竊に考るに、中葉朝政衰てより、武家權を専らにし、表は
朝廷を推尊して實は敬して是れを遠け、億兆の父母として絶て赤子の情を知ること
能はざる様計りなし、遂に億兆の君たるも唯名のみに成り果、其が為に今日朝廷の尊
重は古へに倍せしが如くにて、朝威は倍衰へ上下相離る、こと霄壤の如し。か、
る形勢にて何を以て天下に君臨せんや。今般、朝政一新の時に膺り、天下億兆一人も
其處を得ざる時は、皆朕が罪なれば、今日の事、朕身骨を勞し心志を苦しめ艱難の先に
立、古列祖の盡させ給ひし蹤を履み治績を勤めてこそ始て天職を奉じて億兆の君た
る所に背かざるべし。

〔明治天皇のみことのり〕 明治神宮編

一行目の「朝夕恐懼に堪へざるなり」といふ言葉には、未曾有の国の危機の時代にはか
に皇位を継がれることになり、重圧と不安に慄かれる明治天皇の御心痛を察することができ
ます。しかし、長き武家政権の中で、朝廷は敬して遠ざけられ、「赤子の情を知ること能は
ざる」状況になってしまった。国の政治を一心する時に当たって、国民一人一人の暮らしが
立たず、志望を遂げることができない者があるとすれば、「皆朕が罪なれば」と断言される

のです。なんといふ民への慈愛に満ち満ちた、厳しい御覚悟でせうか。

○近代国家・日本の国是：「五箇條の御誓文」

幕末から明治にかけての動乱の中で、時代精神として、次第に大きなうねりとなり、国民の中に覚醒されてきたものは、「二君万民」「公議輿論」「万国対峙」「開国進取」などの思想でした。かうした時代精神を背景に、横井小楠「国是十二条」、坂本龍馬「船中八策」等に影響を受けた由利公正が「議事之大意」をまとめ、福岡孝弟が手を加へた「諸侯会盟」が、近代国家・日本の「国是」の草案となりました。練られた草案を天皇が御父君の御遺志を胸に全身全霊を以て受けとめられ、御裁可になったものが「五箇條の御誓文」なのです。しかし、これを「御誓文」たらしめたのは、木戸孝允の建議に基づき、天皇が率先して臣民と共に、国是を天地の神々に誓はれたといふ事実です。

五箇條の御誓文

明治元年三月十四日

一 廣く會議を興し、萬機公論に決すべし。

一 上下心を一にして、盛に經綸を行ふべし。

一 官武一途庶民に至る迄、各其志を遂げ、人心をして倦ざらしめん事を要す。

一 舊來の陋習を破り、天地の公道に基くべし。

一 智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし。

我國未曾有の变革を爲んとし、朕躬を以て衆に先じ、天地神明に誓ひ、大に斯国是を定め、萬民保全の道を立んとす。衆亦此旨趣に基き協心努力せよ。

(「明治天皇のみことのり」明治神宮編)

「公論に決すべし」とは、私心を挟まず、公正な意見を出し合ひ、議論を尽くして結論を出すやうにしようといふことでせう。「経綸」とは、治国済民の方策のこと。「倦まざらしめん事」とは、人々を失意させず、各自の志望を達成させること。天地の公道とは、万国にも通用する道理。「皇基」とは、天皇が御治めになる日本国の基盤といふ意。日本の国柄をしつかりと踏まへつつ、近代の独立国家として世界に恥ぢることのない、活力に満ちた、堂々とした「国是」ではないでせうか。この国是を礎として、明治新政府は、次々と近代化政策を実行し、国家制度を整へていくのです。明治天皇は、この国是を以て、「萬民保全の道」を立てんと天地神明に誓はれたことを我々は深く心に留めたいものです。

明治天皇は、明治五年から十八年まで六回の全国御巡幸をなされ、その後も各地への行幸

を続けられました。それは、民の暮らしを直にご覧になって、民と心を通はせたいといふ、やみ難い大御心に発したことで拝せられます。まさに、しらすの具体的行動だったので。行幸での国民との交流の御喜びを歌に詠んでをられます。

旅

〔明治三十四年〕

旅やかたところかはれどわれをまつ民の心はひとつなりけり

旅

〔明治三十六年〕

まぢかくもたづねし民のなりはひをこよひ旅ねの夢にみしかな

六、昭和、平成へと連なる明治維新の精神

時代は、下って昭和となり、大東亜戦争に突入します。全国の都市への空襲や広島、長崎への原爆投下によって、夥しい数の国民が犠牲となります。昭和天皇の「ご聖断」により、昭和二十年八月十五日、終戦の玉音放送を迎えます。日本は、連合国側の占領下に入り、あらゆる分野で占領政策が実施されます。さうした中で、昭和天皇は、五ヶ月後の翌昭和二十一年の元旦にあたり、「新日本建設に関する詔書」を発せられます。占領軍総司令部の

様々な指示や圧力のある中で、天皇はこの詔書の冒頭に「五箇條の御誓文」を掲げ、強く望まれたのです。

新日本建設に関する詔書

昭和二十一年一月一日

茲ニ新年ヲ迎フ。顧ミレバ、明治天皇明治ノ初、国是トシテ五箇条ノ御誓文ヲ下シ給ヘリ。曰ク

一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スベシ。

一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フベシ。

一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ゲ、人心ヲシテ倦マザラシメンコトヲ要ス。

一、舊來ノ陋習ヲ破リ、天地ノ公道ニ基クベシ。

一、智識ヲ世界ニ求メ、大ニ皇基ヲ振起スベシ。

叡旨公明正大、又何ヲカ加ヘン。朕ハ茲に誓ヲ新ニシテ国運ヲ開カント欲ス。須ラク此ノ御趣旨ニ則リ、旧來ノ陋習ヲ去リ、民意ヲ暢達シ、官民拳ゲテ平和主義ニ徹シ、教養豊カニ文化ヲ築キ、以テ民生ノ向上ヲ図リ、新日本ヲ建設スベシ。」

「叡旨公明正大、又何ヲカ加ヘン」とは、五箇条の御誓文に窺はれる明治天皇の思召しおぼしめ（お考へ）は「公明正大」なものであつて、これに新たに加へるものは何もないといふことです。この事について、昭和天皇は、後に左記のやうに述べられてゐます（昭和五十二年八月二十三日 那須御用邸での記者会見）。

「民主主義を採用したのは、明治大帝の思召しである。しかも神に誓われた。そうして『五箇条の御誓文』を發して、それがもととなつて明治憲法ができたんで、民主主義というものは決して輸入のものではないということを示す必要が大いにあつたと思います」

「日本の誇りを日本国民が忘れると具合が悪いと思ひましたから。日本の国民が日本の誇りを忘れないように、ああいう立派な明治大帝のお考えがあつたということを示すために、あれを發表することを私は希望したのです」

（「陛下、お尋ね申し上げます」高橋紘、鈴木邦彦共著）

終戦直後、昭和天皇は、次のやうな御製をお詠みになりました。

國がらをただ守らむといばら道すすみゆくともいくさとめけり

また、今上天皇は、平成十四年の年頭に、明治天皇の御代に近代日本の礎が築かれたことを偲ばれて、次の御製を發表されました。

明治神宮御鎮座八十周年にあたり賜った御製

しろしめしし御代かへりみて日の本のもとみ成りたる様をしのびぬ

七、をはりに

「五箇條の御誓文」に込められた近代的統一国家独立の精神は、孝明・明治・大正・昭和・今上の五代の天皇方に一貫する御志と国民の敬慕の念によって守られて来ました。それは、まさに現在も生き続けてゐるのです。来年の四月三十日、今上陛下は、御退位になられます。この国はその基もととなつてゐる国柄は、必ずや次の天皇に継承されることと思ひます。我々国民は、日々の生業なりはひに追はれつつも、折に触れて天皇と国民の深い信頼関係を基軸とする国柄に思ひを致して、国是としての五箇條の御誓文に立ち返り、自分、家族、職場、国家のあり様を深く顧みて、正してゆくことが、大切なのではないでせうか。

講話

亡き師の御言葉

若築建設(株) 東京支店

池松 伸典



この合宿教室を主催してゐます国民文化研究会は昭和三十一年一月この名前で始まりましたが、その道統をたどっていくと昭和四年五月に旧制一高で発会された「一高昭信会」がその始まりとなります。後でも触れますが、「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」（以下「太子の御本」といふ国民文化研究会ではとても大切にしてゐます書物の著者、黒上正一郎先生が中心となつて一高生四名を含めた僅か六名の少人数で始められた集まりです。

この会が発会された年に旧制一高へ入学されて、この会につながつてこられた方のお一人に高木尚一先生がゐらっしゃいます。その後東京帝大に進まれ五十四年間、七十二歳で亡くなられるまでひたすら人としての道を求め続けてこられました。昭和四十四年に「日本民族の正念」と題して文章を書かれてゐます。

高木尚一先生

この年には東大安田講堂に学生が立てこもつて占拠する事件があるなど学生紛争が最も激しかった頃で、一方社会では高度経済成長の勢ひの中で、何かと慌ただしく動いてゐた時です。最初に次の様に書かれてゐます。

忙しいといふ時の「忙」といふ字は、「心が亡びる」と書く様に、仕事に追はれすぎると心の生長がなくなるとは、最近或人の講演速記の中で読んだ。日常の挨拶でも「お忙しいでせう」といふことは半ば相手を祝福してゐる場合が多いし「いや忙しくて仕方ありません」と答へる時には、半ば得意な時が多い。そして「心が亡びる」或は「心を亡ぼす」ことを嘆く人は少ない。

当時の世相を見つめられながら何か大事なものを忘れつつ足早に過ぎていつてゐる一般社会の有様に我が国の根本問題を感じられてゐます。現在でも「働き方改革」の議論の中で残業を減らすなどの工夫がなされてゐますが、ここでは単に「忙しい」こと自体を否定されてゐる訳ではなく、その結果「心が亡びる」或は「心を亡ぼす」ことを嘆く人は少ない」と知らず知らずの内に自分の心を蔑ろにしてしまつてゐる我々の姿に危機感を感じられてをられるのです。元々日本人はよく働くといはれるやうに家族や会社など世の為に我が身の苦勞は惜しまないといふ素養をもつた民族です。その真面目さがだんだんと忙しさに拍車をかけその状態を「半ば得意になつてゐる」、当たり前になつてゐる、自慢するやうになつてし



まってるといふ指摘です。「心を亡くすこと」がよくないとは誰もが時折頭を掠める思ひですが、それを心の底から嘆き悲しむことはなかなかないもので、かういふ言葉に触れるとそれに気づかないでゐた自分が見えてきます。昨日小柳雄平先生は短歌創作導入講義で次の明治天皇御製を紹介されました。

心

いかならむことあるときもうつそみの人の心
よ豊かならなむ
(明治四十五年)

激動の明治の御代を振り返られてどんなことが起こらうとも国民の心は豊かであってほしいとしみじみ御詠みになられた御製と拝誦させられます。ともすると心を亡くしがちになる日頃の生活の中で明治天皇がお示しになられる大御心には人として生きていく上での指標を感じさせられます。

さらに先の文章に続けて高木先生は次の様に書かれてゐます。

交通は日毎に便利になり、昔の人が想像もしなかつた様な交通機関の発達により人々が相接する機会はいくらでも数多く与へられ乍ら、心の交流、深い思ひ、精神の共鳴、心からなる対話は次第に少なくなつて、何百年か前に、不便な山野を大半歩いて布教してまはつた親鸞の言葉などが、今だに生きくと生命あふれるものとして我々の心を打つのはどういふ事であらうか。

この文章が書かれた当時と比べ現代の社会変化はますます早くなり、新しい電化製品も次々に出てきて生活もほとんど便利になり素晴らしい未来がすぐ近くまで来てゐるかのやうです。

しかし生活が便利になることと満ち足りた生活を送ることは異なります。「心の交流、深い思ひ、精神の共鳴、心からなる対話」との言葉を目にする、改めてさういふ経験が遠い昔の人々にはあつて、現在の私達にはなかなか体験できなくなつてゐる様に感じられてきます。短時間で遠くまで行けるやうになり、携帯電話でいつでもどこからでも会話やメール

ができ、SNSでは多くの人と一緒に連絡できるやうになりましたが、「心の交流、深い思ひ」は昔と比べ薄れてしまひ、さらには「精神の共鳴、心からなる対話」といふ経験も亡くなつてきてゐるやうにも思へます。昨日原川先生が聖徳太子の御言葉「和をもって尊しとなす」についてお話しされた時にオーケストラの話をされました。「精神の共鳴」といふ言葉も単に同じ意見になつてきて同感するといふ事ではなく、異なる欠陥多き者同士が互ひに相手のこと、全体のことを思ひやりながら自分の思ひも包み隠さず率直に表現する中で意見が異なつてゐても経験できてくる共感の世界であらうと思はれます。

さらに別の文章で高木先生は次のやうにも述べられてゐます。

小林秀雄先生が言つてをられるやうに、「感じとる」といふ気持ちが必要ならば、短歌は自分のものにはならない。同様に、日本文化などといふものも、いくら勉強して知識を殖しても、「感じとる」といふ気持ちが必要ならば、その真髄はつかめないと思ひます。私共国文研の運動も、ともすれば紙一重の差で概念的なものになつてしまふので、真実に触れ合ふといふ機会を失つたまま上すべりしていくと何の為の運動かわからなくなると思ひます。

(昭和五十三年「短歌創作のために」より)

「感じとる」といふ気持ちがあれば、つかめない真髓とは一体何なのでせうか。この合宿教室では講師の先生方の言葉、班員の言葉など心に響いてきたことがあったと思ひますが、その感動も時と共にだんだんと薄れていくもので、だんだんと概念化された言葉だけが残りがちになります。古来より我が国には短歌が詠まれ言葉を通じて自らの心を確かめ相手の心を感じ取ってきました。戦国武将や幕末の志士などの短歌にも素晴らしいものがあります。それらのことを考へると物事の判断が正しい考へであるか否かも大切ですが、それ以上に心で納得できるか否かを日本人は大切にしてきたのではないかと思ひます。感動がいかに大切なことなのか、心を亡くすことがいかに悲しむべきことなのか、振り返る必要があると思ひます。

黒上正一郎先生

続いて最初に少し触れました黒上正一郎先生の文章についてご紹介いたします。黒上先生は明治三十三年に徳島でお生まれになり、三十一歳の若さで亡くなられますが、聖徳太子

への信仰心が篤く、その御研究も太子の御心へ深く迫る独特なもので当時多くの人の注目を集め、徳島商業高校卒業の経歴ながら、旧制一高、東京帝大でも講演される程の実力を持たれてゐた方です。現在月に一度渋谷の国文研事務所で遺著の「太子の御本」を輪読してゐますが、何度読み返してみても新たな感動を得たり新たなことに気づかされたりしてゐます。いい本は何回読んでもいいもので難解ではありながら惹かれていくといふのはそれだけ深い思索がなされてゐる文章であるといふことです。

次の「太子の御本」の文章は、仏陀が衆生を救ふために起こす大悲心について説かれた法華經の言葉と聖徳太子が解説された法華義疏の言葉について黒上先生が説明された後に、全体的感想として述べられてゐる中のものです。

∴太子の御精神は常に個人家庭よりも寧ろ、國家の公に、蒼生の全體にかゝりたまふけれども、その根本に流るゝ廣大の大悲心は、痛切の家庭的情意をひそむるのである。それはまた憶良によつて表現されし如き日本家族生活の情調を内にたゞふるのである。我が國民生活には古代に孝の理論はなかつたけれども、支那の道德思想に生命をあたふべき内なるまことの力は國民生活の、底ひに流れてゐたのである。萬葉集に防人がその

家庭を離れて遠く任に赴くときによめりし歌、

忘らむと野ゆき山ゆきわれ來れどわが父母はわすれせぬかも

父母がかしらかきなで辛くあれていひし言葉ぞわすれかねつる

わが母の袖もちなで、わがからに泣きしこゝろを忘らえぬかも

〔聖徳太子の信仰思想と日本文化創業〕二二七、二二八頁〕

中国文化が入ってくる前に日本には「孝の理論」いはゆる仏教や儒教などの体系化された理論はなかったが、それらを生きたものとしてよみがへらせるだけの「内なるまことの力」が備はってゐた、それは万葉集を読めばそこに表現されてゐると言はれてゐます。体系化された中国大陸の文化は文字もなかった日本を飲み込んでしまふかのごとく伝はつてきたものと思はれますし、それをいかに批判摂取していくかは国家の存亡をかける重大な問題であつたものと思ひます。そして本国に於いてすでに衰退してしまつてゐる仏教の教へが日本において生きた形で残されてゐるのも古代人が培つてきた逞しい日本精神によるものと言はれるのです。

万葉集防人の歌が紹介されてゐますが、ここ駿河静岡県や上総千葉県など東国から多くの防人が北九州の地に国の守りの為に向かひました。長いこと帰つてこれない、無事に戻れないかもしれない中、故郷の父母への痛切な思ひが三十一文字の短歌の中に詠みこまれてゐます。

一首目は「自分の父母のことを忘れよう忘れよう」と野をゆき山をゆきここまで来たけれどどうしても父母のことが忘れられない」といふ歌です。父母のことを思ふと悲しさが込み上げて戦ひに向かふ猛き心も萎え公の務めもまともに果たせなくなつてしまふ、だから忘れよう」と野を眺め山をのほつてここまで来たがどうしても私のことを今も思つてゐるであらう父母の姿が浮かんできてしまふといふ思ひを表現されてゐます。古事記では須佐之男命が自分の務めを果たさずに母親伊弉諾尊いざなみのみことの国に行きたいと青山を枯山なす泣き叫んだ件くだりがありますが、それと相通じる短歌だと思ひます。

二首目は、「父母が私の頭を撫でながらこれからの長い旅路と防人としての務めの中でどうか達者であつてくれと言つたその言葉が忘れられない」といふ歌です。自分の頭を撫でながら語つた何気ないしぐさ、「幸くあれ」との短かい一言が作者にとつて何物にも代へがたいものだったのでせう。若い青年の純朴な心が私達の胸を打ち、一見平穩な日々の中で私達が

忘れてしまつてゐる親への痛切な思ひに改めて気づかされます。

三首目も「私の大切なお母さんが私の袖をとり身体をなでながら私のことを思つて泣いてゐたそのお母さんの真心が忘れられない」といふ歌です。

「太子の御本」にはこの後にも防人の歌が数首引用されてゐますが、どの歌も何気ないしぐさと親から声かけられた僅かな言葉の中に作者の深い思ひが直接的に伝はつてきます。何かとせわしく生きてゐる私達現代人は当たり前すぎることに満足できず、何か特殊なもの他と違ふものに興味をもちがちです。しかし言葉をよく味はつていくとかへつて当たり前のことには眞実が感じられたりするものです。「精神の共鳴」と高木先生の言葉にありましたが、これらの防人の歌には、遠く離れていても故郷の父や母への思ひが、多くの言葉を直接に交はさなくとも心の調べとなつて鳴り響いてゐます。美しい花の咲いてゐるのを見て、何だオホ花の花かと思つた瞬間にもう見るのをやめてしまふとは小林秀雄の「美を求める心」に出てくる話です。学生の時この話を初めて聞いてから随分と時が経ちますが、今でも時折思ひだされます。遠く離れてゐる人や亡くなつていった親や友人のことを思ひだす時にまづ浮かんでくるのは、説明や解釈などではなく何気ないしぐさ、何気ない言葉です。

小田村寅二郎先生

最後に本会理事長を発会から四十三年にわたって務めてこられた小田村寅二郎先生の文章を紹介いたします。二か月ほど前に本会会員の今村宏明氏が複写製本されたもので、冊子に次の説明書きを添へられてゐます。

本書は小田村寅二郎先生が開戦直前の昭和十六年十月に「大東亞皇化圈論」として講演されたものを精神科学研究所が編集、印刷して十二月八日の開戦の日より数日後に発行されたものです。戦前戦中に於いて、時の政府や社会主義的官僚、時流に乗るジャーナリズムや赤化思想の大学教授或は軍部と如何に戦われたかの記録です。（かな遣ひママ）

まさに風雲急を告げる時の文章であり、読んでいくと小田村先生の痛切な思ひが伝はってきます。

要するに時代の動きや、歴史の見方はいくらでもありますが、日本國民は日本國民と

して最も大切な問題を基準として、歴史を見、時代を見ること、そして、若しそれを誤るならば、それは即ち國家傳統の破壊の日であり、國家精神の百八十度轉換の時であり、國體は有名無實となる虞おそれを豫感すべき秋とよであるのであります。まことに物の考へ方、物の見方、云ひかへれば、思想は、實に實に國運を左右する重大な問題であります。

揺れ動く歴史の潮流の中で日本は「大東亞共榮圈」といふいつ終はると知れない戦ひを目指し動き國民はそれらのスローガンに踊らされていきます。さういふ時こそ常日頃における思想の鍛錬が試される時で何が大切かその真髓を感じとる眼力が必要とされるのです。小田村先生が「思想は、實に實に國運を左右する重大な問題」であると訴へられてゐることを目にするにつけ、我々がここに短歌を詠み、古文に触れ共に学んでゐることの大事さを感じさせられます。

短歌入門

短歌創作導入講義

伊佐ホームズ(株)

小柳雄平



一、短歌について

二、歌をつくるよろこび

三、短歌を創作する際の原則

短歌創作導入講義の時間を担当させていただく小柳雄平と申します。私は平成十八年に大学の建築学科を卒業して、現在住宅の設計、施工の仕事をしてをります。

さて、「短歌創作導入」といふ講義ですが、先ほど申しました通り、私は家づくりの仕事をしてをりまして、短歌をつくるプロフェッショナルでも短歌を教へる国語の教員でもありません。そして、短歌をつくれれば、先輩や友人から添削をされたり、間違ひを指摘されたりしてをります。褒められたりすることも時々あります。そのやうな私ですので、皆様に短歌を上手につくるテクニク、技法などを教へる、といふやうなことは出来ませんが、短歌をつくることで経験したこと、嬉しかったこと、などをお話させていただき、私なりに思ふ「歌をつくる姿勢」のやうものをお伝へして、皆様の短歌創作の参考にしていただければと思ひます。

その前に、先づ、短歌とは何かといふことについて申しますと「五・七・五・七・七」の三十一文字の音で表現される形式の日本古来の文芸、いはゆる和歌の一種で、古事記、万葉集の時代、またそのずっと前から日本人が身分や地位、男女を問はず親しんできたものです。「古事記」とは日本の国の誕生からの歴史をつづった「日本最初の歴史書」で元明天皇の命おののやすまろで太安万侶が和銅五年（西暦七十二年頃）に編纂したものです。「万葉集」とは奈良時代末期

頃に編纂された和歌の歌集で全二十卷、約四千五百首の、天皇、貴族から地方の官吏、農民、兵士などの歌、東歌などさまざまな地域の歌が収められてゐます。

一、短歌について

志貴皇子權御歌一首

石激いはげ。垂水之上乃たるみのうへの。左和良妣乃さわらびの。毛要出春爾もえづるはるに。成來鴨なりけるかも。

(石激る垂水の上のさ蕨の萌え出る春になりけるかも)

この短歌は「万葉集」の第八卷の冒頭に出てくるもので「春雜詠」(はるのくさぐさのうた)といふ題の箇所にとめられた短歌の中のひとつで、志貴皇子しきのみこのもので、志貴皇子は飛鳥時代末期から奈良時代初期に掛けての方で、天智天皇の第七皇子で、西暦でいふと六〇〇年代の半ば頃にお生まれになって七十六年に亡くなつてゐます。

一行目と二行目の漢字ばかりで記してあるのが万葉仮名といふものです。それを漢字と平仮名交じりにしたものがカッコ内のものです。石ばしるとは岩の上を水が激しくながれる



といふこと。垂水とは滝だとか水が流れ落ちていくこと。「さわらび」とは蕨のこと。「さ」は若々しいもの、幼いものなどを表す接頭語といはれたり強調の接頭語、さらには聖なるものを表す接頭語とのことです。最後の「ける」は詠嘆の助動詞「けり」の連体形、「かも」は詠嘆の終助詞。春になって雪がとけて増水した川を水が激しくさあーっと流れていく、その上に初々しい蕨が芽吹いて萌えてゐる、ああそのやうな春になったものだなあ、といふ美しい春が来たことへのよろこびの歌、短歌です。

このやうに「五・七・五・七・七」のリズムのなかに言葉を入れて、一つの感動を読み込む。これが短歌です。この春の漲るエネルギーが満ち満ちてとても爽やかな情景が、清らかな調べになってその情景を思はせる。山の中に見つけた春の喜びが見事に表

現された美しい短歌です。私はこの短歌が大好きで、特に三句目の「さ蕨の」の「さ」の音が好きなのです。「さ」といふ単語がなくても意味は通じますが、この「さ」がなければ全く違ふ歌に感じることでせう。この「さ」といふ音が歌全体を清々しく力強く爽やかにしてゐるやうに感じます。このやうな美しい日本語の響きも感じていただければと思ひます。

私のお話は、短歌をつくるといふことがどういふことかをこの時間で知っていただくのが趣旨ですが、短歌を詠むには、自分が良いと思ふ歌に親しむことが近道です。美しいな、かっこいいな、このやうに詠めるやうになりたいな、といふお手本になる歌は山ほどあります。そしてお気づきかもしれませんが、約一三〇〇年前に詠まれた志貴皇子の歌を、少し違ふが同じ日本語で読み味はふことができる喜び、わが国日本の永い永い歴史のなかに自分も生きてゐるといふ実感、意味のやうなものもそこから感じとつてもらへればと思ひます（知らない言葉があるからといって古語を苦手と思ふ必要はありません。短歌、古語に触れていくうちに身近に感じるやうになると思ひます）。

さて私が皆様に短歌をつくることを通してお伝えしたいこと、歌をつくることの意義は、副題に掲げたやうに「豊かな心を育てる」といふことです。豊かな心を育て鍛へることで、ものを見る目を養ひ、美しいものを美しく、悲しいものを悲しく、正しいものを正しいと感じ

じることのできるやうになることです。そのためには自分の心を正しく表現する。感動したそのことを、そのひとつに集中して正確に短歌の形にをさめる、といふことが必要になります。

二・歌をつくるよろこび

ここで私の経験をお話いたします。

私は富山県にお住ひの岸本弘先生と、ふとしたことをきっかけに、メールのやり取りをするやうになりました。岸本先生は工業高校に長くお勤めで、現在は歌だより「高志こしのうた」を編集発行されてゐます。「高志のうた」には地元の方々の歌だけでなく、全国各地から寄せられた歌が載つてゐます。その先生と約三ヶ月半の間ほぼ毎日のやうにメールのやり取りをしたのですが、この経験が私の中の短歌に対する思ひを変化させました。

先生からのメールには、いつも短歌がメールの最後やその途中に挿入してあるのです。その先生から突然メールをいただいた時、やはり歌が添へてありました。ありや、困ったな、お返事はしないといけなのだらうけど、歌は添へないといけなかな、などと思ひながら、

なんとか短歌をつくってお返事を書きました。そしたら、その翌日にそのメールに対してお返事が届きました。ここにもやはり短歌が添へてありました。これには正直困りましたが、短歌を添へずにお返事は出せないといふ義務感を覚えることになりました。そこからですが、歌をつくらなきゃ、といふ思ひから歌をつくる題材を探すやうな生活を送る日々が始まりました。

最初は題材など見つからない、どうしようなどと思つてゐたのですが、気づけば身の回りには感動が満ちてをりました。当然ですが美しい景色があったり、嬉しいことがあったりするので。そのことをその美しいものは何が美しいのだらう、嬉しかったことは、何によつてさう感じたのだらう、と考へて短歌をつくるやうになりました。ただつくるといつても感じただけでは歌にはなりません。「五・七・五・七・七」の三十一文字の音にまとめていけない。これもひと苦労いたします。説明しようとかくさんの言葉が出てくるが三十一文字には到底をさまらなかつたり、反対に感動したと思つても、「大屋根に積もりし雪の美しき」くらゐにしか表現できなかつたりします。そのために感動したものを整理してもう一度見つめなほします。最初にきれいと思つたものは何だったのか、さうか雪ではなくきらりと光つた雫ちくをきれいだと思つたのか、雫はさうか屋根の軒先から落ちてゐたのだな、ここ

では大屋根よりも軒先を詠みこまないと、といふ風に足したり引いたりしていきます。さうして

二月四日、窓の外を見にける折に

軒先ゆ滴りおちるさやかなる雪どけ水の美しきかも

といふ短歌をつくって先生に歌を送ります。「ゆ」とは「から」「from」の意味です。「さやかなる」とは「さはやかな」の意味。軒先から滴り落ちる屋根の雪どけ水がさはやかで美しいなあ、といふ歌です。そこでの先生からの返信では、「さやかなる」は、他にもさがせば言葉があるやうに思ひました。「滴る音の止まざりて」とでも、歌ひ変へますか？と、かう来ました。

二月四日、窓の外を見にける折に

軒先ゆ滴る音の止まざりて雪どけ水の美しきかも

なるほど、三十一文字の世界に自分の感動をつめるのであればより具体的に詠んだほうが良い。たしかに爽やかではあつたけれども雪解け水を修飾するもつと別の言葉をつめる。このご指摘によってさらにこのときの屋根から滴る水が美しかった事象がより具体的に私の心に活き活きと根付くのです。短歌をつくってみたらわかると思ひますが、短歌に詠み込んだ

感動は、長い時間が経つても読み返せばその情景がありありと蘇ります。日記などでも上手な人は出来るのでせうが、短歌はそれが顕著だと思ひます。きつとものごとをしつかりと見つけて自分の心と照らし合はせて三十一文字といふ形式に落とし込むからでせう。

さういふ日々を送つてゐましたら、いろいろなものが目に入ってくるやうになつたのです。といふよりも、心がいろいろなものを感じるやうになるのです。そして歌にするために見た瞬時、瞬時は大げさかもしれませんが、見て案外に直ぐにある程度短歌の形になります。おそらく感動の中心になるもの、ならないものを判断する力が付いてきたのだと思ひます。これは自分で経験したことです。が非常に大事なことだと思ひます。物事を見る目を鍛へるといふことにつながるのではないかと思ひます。

先ほども申し上げました通り、歌は先づは自分の中でお手本をつくつて詠むことが大事かと思ひます。お手本を知つてゐる数が多ければ多いほどいろいろな歌を詠めるやうになるかと思ひます。ただ形だけを真似てはいけません。これは、歌を数多く詠んでゐる人でも陥りがちなことかと思ひますが、好きな短歌の響きだけを真似してしまつて自分の心が表現できてゐないことになります。私は特に自分でも好きな短歌の言葉に振り回される傾向があるかと思ひます。

一度、ある先生にばつさりと切られたことがあります。熊本の折田豊生先生です。折田先生は熊本市役所に長らくお勤めでした。折々に歌を詠まれてをられて、「短歌通信」を發行されてみました（現在は澤部壽孫副理事長が「短歌通信」の發行を受け継いでみます。「短歌通信」とは国民文化研究会の会員や学生達が詠んだ短歌を集めて月に一度ほど発信發送してゐるものです。

短歌通信

大人うしら友ら離れ住むとも呼び交はし語らふごとしこの「短歌通信」に

「うし」とは立派な人、学者や師匠、先生などをさす言葉です。先生や友達と離れて住んでゐても呼び合つて、語らつてゐるやうだ、この「短歌通信」のなかで、といふ内容です。

この歌に「呼び交はし」は「もろともに」でもよろしいでせうか。をかしくなければ「もろともに」と訂正させていただきます。

といふ一文を添へて折田先生に添削を求めました。「もろともに」とは、「いっしょになつて」などの意味です。そして返つてきたお返事が次の言葉です。

「もろともに」でも問題ありません。でも、その違ひは何でせう。平板になりませんか。

「平板」とは「変化に乏しく単調」といふことです。「もろともに」といふ好きな短歌にあ

った言葉を安易に真似てしまつて、「語らう」といふ言葉にもとと「もろともに」といふ意味が含まれてゐるにも関らず「もろともに」といふ言葉を繰り返し使ふように用ひたので、「平板」変化に乏しく単調な印象をあたへたものと思はれます。そして改めて詠んだのが、

短歌通信

大人ら友ら離れ住むとも呼び交はし語らふがごとこの「短歌通信」に

といふ歌です。そこで折田さんから「言葉そのものが本来不完全なものですから、歌にも完成はありません。いい歌にするには、何度も推敲を重ね、よりよくしていくほかはありません」といふお便りを頂きましたが、まさにこのご指摘を念頭に感動を表現するための、より適切な言葉を選択する努力を継続しなければならぬと思ひます。このやうに形だけを真似てはダメで、良い短歌からは言葉を通して「心」を学んでください。

次は、御生涯で十万首近いお歌を詠まれた明治天皇の短歌です。天皇がつくられたお歌を御製ぎよせいと申します。

明治天皇御製

心（明治四十五年）

いかならむことある時もうつせみの人の心よゆたかならなむ

「心」と題されてゐます。「うつせみ」とは「生きてゐる人、この世に現に生きてゐる人」、または「この世」。最後の「ならなむ」は状態を表す助動詞「なり」の未然形に他に対する願望を表す終助詞「なむ」です。

いかなること、どのやうなことがあつてもこの世に生きてゐる人びと皆のころよ、豊かであつてほしいものだな、といふ意味になります。明治四十五年といへば明治時代最後の年です。最期まで国民の豊かな心を祈られたことが痛切に感じられる御歌です。「人の心よ」と呼びかけられる御言葉は日本国民全体のころよに向けられたものです。天皇陛下といふ御存在をいただく一国民として有難いお歌です。

三、短歌を創作する際の原則

最後に短歌をつくるにあつたての原則をいくつかをお話します。

① 短歌の形式上の原則—「一首一文」といふこと

短歌の原則として一首の歌は一つの文、センテンスで詠むといふことを覚えてください。原則としてこのことを言ふことは他ではあまり無いとのこと。つまり、歴史上のほとん

どの短歌が一首一文で詠まれてゐるからです。だから原則にあげないのですが、それはをかしいので、この合宿必携書『短歌のすすめ』では、原則に挙げてゐます。まづは次の歌を見てください。

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にぞ富士の高嶺に雪は降りける（山部赤人）

万葉集におさめられてゐる有名な歌ですね。田子の浦とは御殿場のこの地から南の駿河湾の浜辺一体を指します。

「ゆう」は先ほども出ました「どこどこから」の意。「うち出でてみれば」の「うち」は次の「出づ」の語調を整へる接頭語、「ぞ」は強調の副助詞、「ける」は詠嘆の助動詞「けり」の連体形。古文のルールとして係り結びといふものがあります。前に「ぞ」が来るとそれに続く単語は連体形になる、といふものです。そこで、ここは最後が「ける」となつてをります。田子の浦を通つて景色のひらけたところに出てみれば、真つ白に富士山、富士の高嶺に雪が降つてゐることよ、といふ歌です。山部赤人がいつ詠んだ歌かはわかつてゐないやうですが、上総の国、今の千葉県の方に官吏として派遣されてゐる時期があつたやうですので、奈良の都からの道中に、田子の浦で詠んだ短歌なのでせう。ぱつと目の前に広がつた景色に噂に名高い富士の嶺を真つ白に覆ふやうに雪が積もつてゐる、荘厳だな、美しいな、といふ喜びや

感嘆の歌でせう。とても美しく、雄大な歌に感じませんか。そしてこの歌は一文で構成されてゐます。一文で詠むといふことは、一息で詠み上げる、心を一気に詠みこむといふことです。例へば「見れば」のあとに句点の「。」を入れてみます。

(田子の浦ゆうち出でて見つ。真白にぞ富士の高嶺に雪はふりける。)

なるほど五七七七七の調べがブツリと切れてしまひますね。このやうにならないやうに短歌は詠んでください。

ここでもう一つ。気づいた方も多いでせうが、この歌は五・七・五・七・七ではなく六・八・五・七・七です。いはゆる「字あまり」です。五・七・五・七・七は基本で原則ですが、少々の字余りは気にされなくて結構です。ただ、数が少ない「字足らず」これはいけません。字足らずはしないやうにしてください。

大海の磯もとどろによする波われてくださいと散るかも(源実朝)

鎌倉幕府の三代將軍の源実朝の歌です。彼は將軍でありながら歌人でもありました。金槐和歌集といふ歌集に収められてゐます。音の響きだけでもとても力強くリズムカルに感じられませんか。「とどろ」とは「こうこう」と打ち寄せる波の様子です。轟く、といふ言葉と語源は同じなのでせうね。意味は分かりやすいかと思ひます。大海の磯をも轟かすやうに打ち

寄せる波は割れて、砕けて、裂けて、散るものだ。といふことでせう。ただ同じ景色をみてもこのやうに歌に詠む人はさうはみないことでせう。このやうにダイナミックにリズムミカルに畳み掛けるやうにぶつかってくるやうな歌を詠めるやうになりたいですね。

さて、この短歌も一首一文です。「よする波」を「波よする」と変へて読んでみて下さい。

(大海の磯もとどろに波よする。われてただけてさけて散るかも。)

さらに最後の動詞をすべて終止形にしてみるともう何がなんだか、全く言葉遊びのやうなものに成り下がってしまひますね。

このやうに、短歌を詠むその心を歌の中で分裂させないやうに、詠むやうに努めてください。

また短歌を文字として書くときに二行に分けて、体裁を整へるためか段違ひにして書いてゐるものを時々見かけますが、それも忘れて、一行で書ききってください。紙に入りきらなくなつて二行にするのはもちろんかまひません。これも先ほどの話と同様に一貫した心を表現するための心の訓練だと思つてください。すつとまっすぐ美しい一筋のやうに心を表現して欲しいと思ひます。

他の原則ですが、

② 題材と用語について

題材はなんでも結構です。恋愛も自然の風景も、失敗も成功も喜びも悲しみも、ただいきいきと大胆に、現実的に詠んでください。用語については文語体で詠んで下さい。普段話してゐるやうな口語ではなく文語で詠むやうに心がけてください（短歌はもともと文語定型詩なのです）。

③ 深い感動をよむ

深い感動とありますが、まづは小さな感動でも結構です。ただその感動をしっかりとみつめてみてください。今まで同じやうに感じてゐた事柄でも、その時だからこそ強く感じた事情や条件などがあつたことに気がつけばそれが大きな感動に膨らんで行くかもしれません。この後の散策（短歌創作）の時間では、何か一つでもいいですから心に感じたものをしっかりと見つめるやうにしてください。

④ 詞書について

歌を詠んだ日時や背景などを前もって説明するために付けるものです。読む人にも内容が伝はりやすいでせうし、あとで作者が振り返った時にも詠んだ事情がすぐに分かります。

⑤ 連作短歌について

連作短歌とは一つの体験を一首で詠みきるのではなく、何首かに分けて詠むことです。実際に歌を詠んでみれば皆さんも感じるようになると思ひますが、一つの体験を一首に詠もうとするのはなかなか難しいものです。一つの体験のなかでさまざまに動いた心の一つ一つをそれぞれ一首一首に詠むのが連作短歌です。ただし、先づは一首を大事につくるといふことは心がけてください。

ご清聴ありがとうございました。

短歌入門

創作短歌全体批評

(公社) 国民文化研究会副理事長

澤部 壽 孫

第一班

Chenkae's Cat 1 新三年 田原 永明

雨降られ 雲ナリお山は雲隠れ不眠ながらも 羅明の心し

信州大学経済学部一年 渡辺 手祐

秋晴れに紅色うゴアシラ美ゴフゴツとしたが、こよさあり

明治大学政経学部四年 江崎 光太郎

一燈り永清夏せて輝きし薄紅の夕まじりかな

東京大学農学部一年 江上 隆介

巧紙王心にかかず詠りうも中々秋めなげ短歌かな

広島大学文化教育学部四年 藤近 晃久

江崎光太郎くんへ 佐賀大学文化教育学部四年 藤近 晃久

磁りて笑レキノコ見せワフヲ 樹井たけしヲクラゲカキ左ハレ

働工H工エアロ

レクレーションにマ

コアシラ木あるとふ声に追寄れ

わづか々間晴れし青豆皆たうけ

元富山県立富山

小柳麗子さんう寝歌導

糸はしき前代若さ夏なつかしき

所りなく言葉王状公踏クやく居

地別新修へ男子学生一

清々しくひかきまると若きら

第63回全国学生青年台歌教室(東日本)

歌 稿

(第一回)

昭和34年学生青年台歌教室(東日本) 編輯委員会

- 一 はじめに
- 二 批評と添削
- 三 国民文化研究会会員の歌から
- 四 をはりに

一 はじめに

皆さん、おはやうございます。合宿も最終日になりました。さぞかしお疲れのことと存じますが、今しばらく私の話に耳を傾けて下さい。

時間の関係でこの全体批評では私が触れられない歌、あるいは壇上からの一方通行ゆゑに私の批評が当たってゐない場合もありますので、班別の相互批評の時間では、全員の歌を讀み味はって作者の思ひに最もふさはしい言葉を皆さんで選んであげて下さい。

昨日の夕方、皆さんが提出された歌を一人一首以上は「歌稿」に載せるといふことで、国文研の先生方が夜、選歌し清書して、印刷されて出来上がったのが、お手元に配られた「歌稿」であることもお心に留めて下さい。

皆さんのお歌を、深夜から今朝にかけて、じっくりと拝見しましたが、一所懸命に歌を詠まうとされたことが偲ばれ大変心強い気持ちにさせられました。日本の将来は明るいと思ひました。

二 批評と添削

それでは第一斑から始めます。

○ 雨降られ、富士のお山は雲隠れ不服ながらも植物探し

昨日の短歌創作の時間に配られた写真付き資料に載ってゐる植物を探しながら全員が散策した時の歌ですね。「雨降られ、」となつて居りますが、先づ短歌には句読点を使はず、字と字の間のスペースも空けないのが原則です。「不服ながらも」は「口惜しい」あるいは「悔しいと」具体的に詠んだ方が良いと思はれます。次のやうに直してみました。

○ 花探す折に仰げば富士山は雲にかくれて見えぬ悔しき

○ 秋晴れに紅色のコブシの実ゴツゴツとしたかっこよさあり

昨日、短歌創作（散策）の時間に、学生さんが一塊ひとかたまりのコブシの実を手を持って居るのを私も見ました。この歌の主題は「ゴツゴツしたコブシの実」にあると思はれますので、それを活かして次のやうにしてみました。

○ 手に取れば紅色くれないいろのコブシの実ゴツゴツなれども形良きかな



○ 一粒の水滴乗せて輝きし薄花色の美しきかな
薄花色とは漠然としてどんな色か伝はって来
ないですね。歌は客観的に詠むのが重要なので
具体的な色を表現することです。紅の色だと想
像して次のやうにしてみました。

葉の上に乗りし玉露輝けば薄紅の花美しき

たまつゆ

うすくれなゐ

○ 巧拙を心にかけず詠もうとも中々詠めない
短歌かな

初めて短歌を詠む時の気持ちがよく表れていま
す。「巧拙を心にかけず」とは「巧みな歌を詠まう
とは思はないけれども」といふ意味ですね。結句
の「短歌かな」は五音で字足らずです。字余りは
思ひが余ってゐるので良いのですが、字足らずは

駄目です。

思ひはあつてもその思ひにふさはしい言葉が見つからないことは誰でも経験することですが、歌を詠み続けてゐるとふさはしい言葉が出て来るやうになります。継続して歌を詠まれることを勧めます。次のやうにしてみました。

巧き歌をと思はざれどもふさはしき言葉出で来ず詠み難きかな

撮りて来しキノコ見せつつ「桃みたい」「クラゲみたい」と君は笑ひぬ

この歌はそのまま良いと思ひます。「撮りて来し」は「写真」でも良いと思はれますが、「撮りて来し」の方が実感がこもつてゐる感じがします。最後の句は、写真を撮った友に焦点が当つてゐるので、「笑ふ君はも」でも良い。

撮りて来しキノコ見せつつ「桃みたい」「クラゲみたい」と君は笑ひぬ

初に会ふ友と語らひ始むれば話の弾み夜も更けゆく

合宿で初めて出会った友との語らひを詠んだお心のこもる良い歌ですね。次のやうにしてみました。

初に会ふ友と語れば時は過ぎ話弾みて小夜更けにけり

覆われし苔の下より一輪の小さき花は健気にも咲く

作者の優しい心が表れたお歌です。「覆われ」は「覆はれ」です。「覆はれし」は不正確で「覆ひたる」が正しい。

覆ひたる苔の中より一輪の小さき花の健気にも咲く

木々の上に真白く広がる花の葛阿漕な様に吾もなりたし

皆さん笑はないのですか（笑）。皆さんが黙ってみると批評が間違っているのではないかと不安になります（笑）。この歌の作者は批評をする私のために格好の題材を提供してくれただのではないかと思はれます（笑）。「阿漕あこぎな」とは「厚かましい」といふ意味ですから、温厚な作者の気持ちも分らぬではありませんが、不正確です。「阿漕」ではなく「逞たくましく」が正確であると思はれます。

木々の上に真白く広がるたくましき鳶の如くに我も生きたし

ふかみどりの蔦延びる中に一本のツルリンドウは凜として立ちたる

「ふかみどり」は不要ですね。「立ちたる」は連体形なので「立ちたり」です。一本は「ひと本」とも言ひます。次のやうにしたらどうでせうか。

蔦葛広がる中にひと本のツルリンドウの凜として立つ

○
ツルリンドウあれかこれかと探し求め皆と歩けば足取りは弾む

昨日の散策・短歌創作の時間に、資料の写真にある花をあちこち捜し歩きましたね。あの時の模様が良く表現されてゐます。「あれかこれか」よりも「何処にありや」の方が客観的であると思はれます。

○
ツルリンドウ何処にありやと探しつつ友らと歩めば足取り弾む

食らひつく気持ち高めて日の本の未来見据えて学び続けむ

「見据え」は「見据ゑ」です。「植ゑ」と「飢ゑ」も同じくワ行活用です。「くらひつく」の意味が良く分りません。短い学生時代に「何としても自分のものにする」といふ飽くなき向上心のことだと思はれますが、もう少し具体的に詠んだ方が良いと思ひます。

学び舎の時を惜しみて日本の本の未来を見据ゑ学び続けむ

○ 班別研修での質疑応答の折に

焦らずとも少しづつでも学びゆけばそれでよしとぞ言ひ給ひける

「言ひ給ひける」の終止形は「言ひ給ひけり」ですね。「言ひ給ふ」は「のたまふ」とも言ひます。次のやうにしてみました。

○ 焦らずにしかも撓たわまず少しづつ学べば良きと師はのたまひぬ

赤き実の見つけし富士の麓にて古へ人の心思ひて

○ この歌には終りがありません。短歌は一首一文ですからどこかで終ることが必要です。倒置法でも良い。

○ 富士山の麓に見つけし赤き実に我らが祖先みおやの心偲おもはゆ

雲なびき青空見ゆるつかの間に富士の山肌しるけく見ゆる

「雲なびき」ではなく、「雲流れ」の方が良いと思はれます。次のやうにしてみました。

雲流れつかの間見ゆる青空に富士の山肌しるけく見ゆる

○

國武忠彦先生の講義を聞いて

学問に対する思ひ語り合ふ友らの姿まぶしかりける

「まぶしかりける」は体言止めで終止形は「まぶしかりけり」となります。

学問に対する思ひを語り合ふ友らの姿まぶしかりけり

三 国民文化研究会会員の歌から

次に国民文化研究会の会員の短歌をいくつかご紹介いたします。お若い時から詠んで来てゐますから、お読みいただくお分りになると思ひますが、読むだけですぐに意味が通るお歌ですね。理屈を詠むのではなくて、心に感じたことをそのまま適切な言葉を選んで表現することが大切であるといふことが理解してもらへると思ひます。

国民文化研究会理事長 今林賢郁

時の間に青空見えて雨雲は這ふが如くに流れゆくなり
ひとすぢの光射しきて雲流れ富士の高嶺の裾野見えくる

国民文化研究会事務局長 磯貝保博

雨風の吹きつくる音強まりて眠りも浅く朝を迎へり
時折に雨止みたればこの後は晴れのちにかはれと願ふしばしば

澤部壽孫大兄の短歌鑑賞（「朝のつどひ」にて）

合宿運営委員長 池松伸典

「ふるさとの人のなさけ」と御歌読む先輩とものみ声の心に響くも
亡き学徒ひとの清きまことの伝はりて涙こぼる先輩とものみ声に

元小田原市立矢作小学校校長 岩越豊雄

万葉に一番多く歌はれし山萩の花見つけて嬉しき

班別研修

元富山県立富山工業高校教諭 岸本 弘

清々しくひびき来るなり若きらのつつまず語る言葉を聞けば

「分らず」と問へば直ちに「かく思ふ」と応ふる言葉もあたたかきかな

合宿指揮班長 最知浩一

吾の願ひ天に届きしかいつのまに雨も降り止み青空も見ゆ

最知浩一 指揮班長

国民文化研究会副理事長 小柳志乃夫

大雨の予報続くも奇しくも雲晴れてゆく君が願ひに

國武忠彦先輩のご講義

学門の喜びあふるる先輩のお話ともしく耳傾けつ

長き日をうまずたゆまず学ばれし足跡偲びつつご講義を聴く

伊佐ホームズ(株) 小柳雄平

「おお」と言へば「おお」応へし我が友は我が講義をば聞きに来しとふ

懐かしき友と語れば講義前の緊張ほぐれゆく心地すも

江崎道朗先生の御講義を聴きて

元神奈川県立小田原高校教諭 原川猛雄

他人語る思ひに耳をかたむけし大人の姿のたふとく見ゆる

考への違ひをこえて人々と心通はすみ姿たふと

原川猛雄さんの御講義をお聞きして

山梨大学名誉教授 前田秀一郎

憲法いづれいんぽうの御言を明らめむと思ひのままに友語りゆく

思ふまま語れる友の言の葉に聖徳王の御教みせしへ学ぶ

皆人にたやすき例ためしをひき給ひ人の踏むべき道説みちせつかれたり

四 をはりに

このあとに班別の相互批評の時間がありますが、短歌の批評とは他人の歌をじろじろ見るのではなく、歌の作者の心は何処にあるのか、何を言はんとしてゐるのかを読み味はひ、作者の思ひに最もふさはしい言葉を皆で探すといふことです。一首の歌を班の全員で読み合ふうちに得も言へぬ共感の世界がかもし出されることを皆さんが経験されるのではないかと思ひます。

私達の祖先は文字が大陸から伝へられるずっと前から、音（声）で意志の伝達を図ってき

ました。無限の思ひを声で伝達するために一番日本人に合ってるたのが短歌だったと思はれられます。何千年にも亘り高度の精神文明を築いてゐた祖先の情意の豊かさに驚嘆するばかりです。それこそ漢字伝来以前からの古い古い「やまとことば」に根ざす短歌ならではの世界なのです。ぜひとも、さうした共感の世界を体験して欲しいと思ひます。

一年の歩み

—第六十三回合宿教室までの一年—

(株) 寺子屋モデル

廣木 寧

若築建設(株) 東京支店

池松 伸典



第六十三回全国学生青年合宿教室（西日本）までの歩み（合宿運営委員長 廣木寧記）

平成二十九年八月十一日から十三日まで福岡市東区香椎浜の「さわやかトレーニングセンター福岡」で開催された第六十二回全国学生青年合宿教室の終了後、翌年（平成三十年）は平成二十八年の第六十一回と同じく東日本と西日本に分かれて開催されることに決まった。

第六十三回合宿教室（西日本）の運営委員長は種々検討の結果、福岡のわたくし廣木が引き受けた。平成二十九年九月六日のことである。合宿地は「さわやかトレーニングセンター福岡」に内定してゐたが、正式には平成三十年二月に決定されることであつた。

ここ数年、運営委員を各地区から少なくとも一名は出してゐたこともあつて、次回の合宿教室までに数回の運営委員会を設ける必要はない状態になつてゐるから、大阪以西の各地区に「地区協力委員」（関西は北村公一氏、熊本は久保田真氏、鹿児島は京田清人氏）をお願ひして、電話やメールで連絡をとりあふことにした。運営委員長のわたしと同じく福岡の古川広治氏が副運営委員長兼指揮班長となつて、各地区協力委員にサポートしてもらつた。

古川氏とわたしは月に一度は、其儘会きじんといふ福岡の若手会員との勉強会で会つてゐるし、わたしが六年ほど前から週に一度は通つた福岡大学の学生との勉強会である福大寺子屋塾の

指導を古川氏に願ひしてゐるから、連絡は日々取り合つてをり、毎日が電話を通しての運営委員会のやうなものであつた。また、もう二十五年以上も続いてゐる福岡、熊本、鹿児島在住の会員たちとの勉強会である。早月会さつきの会員が熊本、鹿児島地区協力委員を承諾してくれたので意思の疎通は比較的スムーズであつた。

十月二十五日に、わたくしから各地区協力委員に「第六十三回全国学生青年合宿教室（西日本）開催に向けての各地区協力委員への報告とお願ひ」と題する文書をおくり、標語は「今を意味あるものにするために（仮）」とし、それまでに、合宿日程を作成し、講師陣も「創作短歌全体批評」担当講師以外は決まつてゐたから、合宿日程表も添付して、それぞれの現在の活動状況と合宿教室に向けての新たな活動を、それに来年四月以降の学生青年の勧誘計画を地区で協議して、十一月十日までに報告してくれるやうに依頼した。各地区においていくつもの定例の勉強会が開催されてゐる（それは本書の後記「各地区の定例的な研修活動」の項をご覧ください）。

二月になつて合宿地を決定するために、「さわやかトレイニングセンター福岡」を訪ねると、施設使用予定の二ヶ月前にならないとお貸しできるかどうか判らないといふことであつた。これでは八月開催予定の合宿教室（西日本）の開催地としてパンフレットなどに、開催

地を明記することが不可能となったため、新たに合宿地を探す必要に迫られた。

急ぎ福岡市及び近郊で合宿地を探すと、福岡市に東接する篠栗町にある「福岡県立社会教育総合センター」といふ県の施設が見つかった。二月二十四日と三月三日に、古川氏と一緒に当該施設を訪ねて、施設内部を見せてもらひ、施設の方とも打ち合はせ、いくつかの気になること（消灯時間、空調使用時間など）はあるもののおほむね大丈夫と判断できた。合宿日程は八月二十四日（金）から二十六日（日）までの二泊三日と決まった。初日の始まりは第六十一回と同様、遠方からの参加者を考慮して十九時開会とし、そのため最終日は遅めの十七時までに閉会式を終へる日程とした。

新入生を迎へる新年度四月を控へて各地に四月以降の活動の予定と勧誘の計画を問ふた。関西地区は京都大学、京都産業大学の学生が勉強会に参加してゐるので、学内の勧誘が検討されたが、適はなかつた。

福岡地区は福岡大生の福大寺子屋塾があるので新入生の加入が見込まれた。古川氏と福大寺子屋塾卒業生の小林拓海氏が現役の三年生と打ち合はせをして勧誘のための「ちらし」の作成などに当つた。学内での講演会も計画された。八、九年前は講演会を開くと学生は二十人ほどは来たが、昨今は残念ながら学生はほとんど来ない。合宿の標語は「現代いまをより善く生

きるために」と変更したが、前に考へた「今を意味あるものにするために」も趣旨は同じで、学生青年が歴史にほとんど関心がなく、現在のみに興味関心が集注してゐるので、その学生青年を引き入れるために考へた標語であつた。

今回の合宿教室（西日本）では、学生勧誘に苦戦したが、寺子屋モデルの山口秀範氏、熊本の折田豊生氏、白濱裕氏、福岡の藤新成信氏などの会員による社会人への参加勧誘があつて、合宿は成立した。

第六十三回全国学生青年合宿教室（東日本）までの歩み（合宿運営委員長池松伸典記）

福岡市で開催された第六十二回全国学生青年合宿教室は参加者に感動を与へて平成二十九年八月十三日に閉会し、時を同じくして翌年の第六十三回合宿教室（東日本）は運営委員長を池松が、副委員長を北濱道氏が務めることになった。本来全国の学生青年が一堂に会して一ヶ所で行ひたい合宿教室ではあつたが、一人でも多くの方々にこの合宿教室を体験してほしいとの願ひから平成二十八年の六十一回と同じく東日本と西日本に分かれての開催が決まつた。

九月には指揮班長の最知浩一氏と運営委員の佐川友一氏が決まり、さらに十月上旬には合宿地の「国立中央青少年交流の家」（静岡県御殿場市）と、開催日程（平成三十年九月七日から九日までの二泊三日間）が決定し、いよいよ運営委員会が動き出すことになった。第一回運営委員会を十月十五日に開き、合宿教室のテーマ、講師、日程、参加者勧誘について今後決めていくべき事項の確認と今後の方針について話し合った。

参加呼び掛けの標語については、この合宿教室開催地を一般の人に印象づける上からも、明けて二月にやうやく「富士の麓で学び合おう日本の心」と決定した。霊峰富士を仰ぎながら「日本の心」をしみじみと味はふといふ実感が持てればといふ思ひからであった。

その後、運営委員会は毎月第四土曜日の四土会（黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読会）終了後の午後五時から行った。渋谷の国文研事務所での四土会のために茨城県から参加の佐川運営委員にとっても勉強会に参加できるといふことからこの日を選んだ。この折の打ち合せを基本として足りないところは日頃から運営委員間でメールでのやり取りを行ふなどして合宿教室の準備が進められていった。

合宿日程に関しては特に二泊三日の短い合宿の中で外来講師の講義時間を入れるといふ厳しい条件があった。合宿教室で行ふべき「短歌創作導入講義・創作短歌相互批評」「古典輪読」

「レクレーション」を実施するだけでも時間が不足すると考へられてゐたため何度も検討を行った。最終的に開会式終了後すぐに外来講師のご講義を行ふことに決まつた。外来講師の江崎道朗先生は学生時代に合宿教室に参加されてをり、その折の経験を御講義の中でお話いただけるといふことになつたからであつた。

短歌創作をかねたレクレーションについても、従來のやうに貸切バス利用の箱根神社参拜、富士五合目登山などの時間がかかるものをやめて、開催地近辺でふさはしい場所はないかと考へて、四月十五日の最初の現地見で施設側の意見も参考にして近場の散策候補地も見つて回つたが、結局は各種の植物が多く見られる敷地内の散策を行ふことで決定した。さらに合宿教室開催直前の八月十九日には第二回目の現地視察を行なつて、敷地内散策をどのやうに行ふかを実際に施設周辺を見て回り確認した。いろんな植物や蝶々などの昆虫が目にとまり、身近なところに素晴らしい自然があることに気づかされた。

合宿教室の準備はこのやうにして開会式直前まで進められていつたが、同時に合宿教室への参加呼び掛けにもつながる催しも行はれた。その主要なものを紹介する。

一、東京地区春季日帰り研修会

春分の日の三月二十一日に北濱運営副委員長による「春季日帰り研修会」が「国立オリン

ピック記念青少年総合センター」で開催された（参加者学生五名含む参加者十五名）。二名の学生発表、國武忠彦先生の「本居宣長と『古事記』」と題する御講義が行はれた（この研修会の内容は三十五頁にわたる記録集として北濱氏を中心にまとめられた）。

二、第二十一期第三十回国民文化講座

六月二十四日、千代田区立日比谷図書文化館において国文研主催「第三十回国民文化講座」が開催され、文芸評論家の小川榮太郎先生が「今、国民が目覚めるべきこと・水戸学・象山・松陰」といふ演題で話された。論壇で大いに活躍されてゐる小川先生のご講演といふこともあり百六十一名と多数の参加者を得た。吉田松陰の留魂録の原文を丁寧にとりつつ松陰の思ひを偲んで行かれた。またこの機会を活用して、合宿教室のパンフが配られ、内容の説明と参加の呼び掛けがなされた。

三、東京短歌の会による吟詠会

毎月第四土曜日に渋谷の国文研事務所で行はれてゐる「東京短歌の会」では、秋の平成二十九年十月二八日（土）と春の平成三十年五月二六日（土）だけは場所を移して市川市万葉植物園で開催された。庭園には万葉集に歌はれた植物が植ゑられてをり、詠草のあと植物園の一室で相互批評が行はれた。御殿場での合宿教室で短歌創作を敷地内の植物を見て回る

ことになったきっかけも市川市万葉植物園での吟詠会の経験が影響してゐた。

各地区と同様に関東地区においてもいくつかの定例的な勉強会が続けられてゐて、その都度御殿場合宿への取り組みが話し合はれた。これらに参加すると何か心に残る言葉が出てくることが多く、その後で気づいたことをメールで互ひに意見交換していき、そのうちにだんだんとそれらの問題が深まっていくといふこともあった。さうした生きた学問に触れ合宿教室の意義を確かめつつ、新たな力を得ながら合宿教室（東日本）の開催へと向かっていった。

各地区の定例的な研修活動

【関東地区】

『短歌通信』の発行

日時 原則月一回発行（平成三十年八月末現在、第四百四十二号）

内容 富山・長崎・大阪・熊本・東京などでの短歌会での詠草や各地から直接寄せられた短歌を編集して発信発送

世話人 澤部壽孫

小林秀雄著『本居宣長』読書会

日時 月一回（水曜日または木曜日）十八時半～二十時

場所 国文研東京事務所

内容 國武忠彦参与指導による小林秀雄著『本居宣長』の講読

世話人 北濱 道

東京短歌の会

日時 毎月第四土曜日十時～十二時

場所 国文研東京事務所

内容 各自創作の短歌についての相互批評

世話人 佐野宣志

四土会

日時 毎月第四土曜日十四時～十七時

場所 国文研東京事務所

内容 黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の輪読

主宰 内海勝彦

柴田会

日時 毎月第三土曜日十四時～十八時
場所 国文研東京事務所
内容 小林秀雄著『本居宣長』の輪読
主宰 柴田悌輔

日本の国柄と皇室に関する研究会

日時 隔月一回土曜日十時半～十三時
場所 国文研東京事務所
内容 御製・詔勅の輪読及び日本の国柄と皇室に関する研究発表
主宰 大岡 弘

北鎌倉輪読会

日時 ①毎月第四日曜日十三時～十五時半
②奇数月の第三日曜日十三時～十五時半
場所 鎌倉円覚寺の如意庵、臥龍庵

内容 ①日本思想研究家・佐藤健二先生による小林秀雄著『本居宣長』の講読

②小柳陽太郎他編著『名歌でたどる日本の心』の輪読

主宰 関口靖枝

湘南会

日時 毎月一回（第三土曜日）

場所 平塚市中央図書館

内容 新潮古典集成『本居宣長』の「紫文要領」の輪読

主宰 小幡道男

調つぎの会

日時 毎月一回（不定）十九時～二十一時

場所 さいたま市浦和区岸町公民館

内容 本居宣長著『古事記伝』の輪読

主宰 飯島隆史、岸野克己

【北陸地区】

かたかこの会

日時 毎週第一土曜日

場所 高志の国文学館(富山市)

内容 ①黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』、『朗読のための古訓

古事記』の輪読、短歌の創作と相互批評。

②「かたかこの会」の活動を主軸に、短歌通信『高志のうた』の発行(平成

三十年八月現在、第三十四号)

世話役 岸本 弘

【関西地区】

関西信和会

日時 毎月一回 午後十四時～十七時

場所 吹田市又は神戸市の公共施設

内容 短歌の創作と相互批評、長谷川三千子著『神やぶれたまはず』の輪読

世話役 北村公一

【福岡地区】

福大寺子屋塾(福岡大学)

日時 毎週火曜日十八時～二十時

場所 福岡大学二号館六階

内容 平泉澄著『物語日本史』の輪読

世話役 小林拓海、古川広治

太子会

日時 毎月一回日曜日九時～十一時

場所 日章工業(株)会議室

内容 黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』、黒上正一郎先生のう

たと消息』の輪読

主宰 藤新成信

小柳陽太郎先生に学ぶ勉強会

日時 毎月第二火曜日十九時～

場所 石村萬盛堂本店

内容 『日本への回帰』第二五集の輪読(平成三十年二月まで)

小柳陽太郎著『日本のいのちに至る道』の輪読(三十年三月から)

世話役 石村僖悟 山口秀範

眞木和泉守研究会

日時 毎月一回不定期十三時～十六時

場所 水天宮社務所（久留米市）

内容 眞木和泉守直筆「南畧日録」の読み合せ

世話役 志賀建一郎

其儘会

（学生青年のための勉強会）

日時 毎月一回土曜または日曜日の午後二時間

場所 水鏡天満宮社務所二階

内容 ①『国民同胞』最新号読後感想の発表

②勝海舟『氷川清話』（江藤淳・松浦玲編）の通読

主宰 廣木寧

筑紫短歌の会

日時 毎月一回（中旬もしくは下旬の土曜日または日曜日、三時間）

場所 （スカイプを使って）

内容 創作短歌の相互批評

主宰 小野吉宣

【佐賀地区】

鳥の郷古典素読会

日時 毎月一回火曜日十九時～二十一時

場所 鳥栖北地区公民館

内容 日本古典（『平家物語』など）の素読

主宰 西山八郎

【長崎地区】

長崎短歌の会

日時 毎月第三水曜日十二時～十五時

場所 さくら荘（長崎市）

内容 創作短歌の相互批評

主宰 内田英賢

【熊本地区】

三士会

日時 毎月第三土曜日

場所 熊本市民会館シアーズホーム夢ホーム

内容 黒上正一郎著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の通読

世話役 久保田真

熊本短歌の会

日時 月一回

場所 瑞穂恒産会議室

内容 各自創作の短歌についての相互批評

世話役 今村武人

【鹿児島地区】

輪読と和史研究会

日時 毎月一回

場所 鹿児島市勤労会館

内容 昭和史の研究、櫻井よしこ著『真相箱』の呪縛を解く』の通読

世話役 野間口俊行

合宿教室のあらまし

第六十三回合宿教室（西日本）

第六十三回合宿教室（東日本）



第六十三回全国学生青年合宿教室（後援・産経新聞社）は、先づ福岡県糟屋郡篠栗町（ささぐり）の「福岡県立社会教育総合センター」において、八月二十四日（金）から二十六日（日）までの日程で「合宿教室」（西日本）として開催され、北は東京、南は九州の各県からの参加者が集った。次いで九月七日（金）から九日（日）にかけて、北は関東の茨城県から南は九州の佐賀県、長崎県などからの参加者を得て「合宿教室」（東日本）が静岡県御殿場市の「国立中央青少年交流の家」で開催された。

合宿教室（西日本）のあらまし

第一日目（八月二十四日・金曜日）

合宿教室（西日本）は、開会式での福岡大学経済学部二年・笠原康嗣君の開会宣言を以て幕を開けた。

主催者を代表した開会挨拶で今林賢郁国文研理事長は、「古典を繙くと私たちの先人がどのやうなことに生きがひを覚えて、どんな事柄に価値を見出してきたのかといふことが分る。日本の思想に触れることになる。古典の言葉や先人の生き方には、日本人らしい日本人

になるためには、どのやうなことを心がければ良いのかといふことが示されてゐる。この合宿で先人の言葉に触れることによつて、今後の生き方を考へる契機として欲しい。大いに学び、かつ楽しい三日間にしてもらひたい」と述べた。

次いで、来賓の福岡県議會議員・古川忠先生からは、「読書が人生を豊かにし、書くことで確実な人生を歩むことができる。友と本当に腹を割つて話をすれば、そこに新し信頼が生れる。そのやうな勉強をこの合宿を通してやっていたきたい」との激励の御挨拶をいただいた。

開会式に続いて、合宿導入講義「自分を知りたいあなたへ―歴史が教へてくれるもの―」が福岡県立筑紫中央高等学校教諭・與島誠央氏によつて行はれた。



教師初任の頃、「先生、こんな昔のことを勉強して何の役に立つん？（何の役に立つのか）」と生徒から問はれたといふ。この質問は教師生活三十年間、折々に脳裡に浮んで来た、今日はこの質問への答へのつもりで語りたいと述べて、先の大戦で満洲に出征した父の敗戦時の体験を語り、復員後、結婚して自分が生れた。「歴史は命のつながりである」として、さらに吉田松陰の『講孟餘話』に触れながら、自らの学生時代の輪読会の読書体験の学びから得たことなどを語った。

講義終了後、参加者は各班室に戻って、講義についての感想などを述べ合ふ班別研修が行はれた。講師の最も伝へたかったことは何かを確かめ合ひ、その上で各々の思ふところを話し合った。なほこの班別での研修は、以後の講義の後にも繰返し実施された。

第二日目（八月二十五日・土曜日）

合宿教室の日程は「朝の集ひ」から始まる。清々しい朝の空気を胸いっぱい吸ひながら、ラジオ体操で身体をほぐした。その後、森田仁土氏の指揮で、唱歌「村の鍛冶屋」を歌って、身心のコーディネーションを整へた。翌三日目の「朝の集ひ」では、「埴生の宿」を斉唱し

た。

二日目の午前の最初の講義は、(株)寺子屋モデル・廣木寧氏による「人はいつも過去に励まされてゐる——記憶^ゞがあるから生きていける——」であつた。

先ごろ、ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロ氏は五歳で英国に渡つてゐるが、あの時に突如、蘇つたのは一度も帰国したことがない。日本^ゞの記憶であつたといふ。そして、洋学受容に苦闘した福沢諭吉を語る中で、過去現在未来のかかはりを述べた。そして諭吉は『瘠我慢の説』で、幕臣の勝海舟が明治新政府の高官になつたことへの疑念を示したが、人の誤つた記憶も明らかにした。さらにイシグロ氏の作品の中の「過去を語り合うことに意味が見出されない」といふ一節を取り上げて、それは「人が記憶をなくしている」ことから生じてゐるはずで、それ故に、今日は過去をかたる喜び、そして過去を記憶しておくといふ使命ある、と語つた。

次いで午後の短歌創作を兼ねたレクレーションを控へて「短歌創作導入講義」が税理士法人あおぞら・北村公一氏によつて行はれた。

短歌を詠むことは「心情、感情の洗練」、言ひ換へれば心を磨くことである。自分の心を見つめ、それにふさはしい正確で適切な言葉を探すことが心を磨くことにつながると語り、

富山県立図書館長を務められた廣瀬誠先生が闘病生活の中で詠まれたお歌を紹介しながら、短歌は手慰みものではなく、自らの心を見つめるところから詠まれるものであると語った。

短歌創作を兼ねたレクレーションの最初の見学地は、飯塚市の旧伊藤伝右衛門邸であった。明治から昭和にかけて、石炭は殖産興業の礎となったが、その産出地の筑豊で炭鉱王と呼ばれた人物の邸宅である。和風ながらも一部に洋室も取り入れた和洋折衷の屋敷を巡った。

次に篠栗町の南蔵院を訪ねた。篠栗の地は、四国霊場に修行した僧がこの地の疫病退散の祈禱を行って以来、霊場となった所である。近年、プロンズ製の巨大な釈迦涅槃像が開眼され、この地のシンボルとなつてゐる。初めて訪れた我々は、像の巨大さと不思議な明るい印象に驚きながら、楽しい一時を過した。夕食までに全参加者の短歌が提出された。

夜は、国民文化研究会参与・折田豊生氏による古典講義「改革者の使命―芭蕉と子規―」が行はれた。

和歌、連歌、俳諧連歌、発句、俳句の歴史を踏まへて、なぜ芭蕉は俳諧連歌を選んだのか、また正岡子規の俳句・短歌革新は、西欧化一辺倒の時代だったが、なぜ伝統文化の再構築を課題としたのかを語り、芭蕉と子規は共に高い理想を抱いて無欲で権威に盲従せず、絶命の間際まで細き一筋の「ミチ」を追求したと述べた。その過酷な使命はいつたい誰が与へ

たものなのか。また今日の情意が枯渇した時代に、風雅の道に生きる意味とは何かを問はねばならないと述べて、「文化の戦士たれ」と呼びかけたいと語った

第三日目（八月二十六日・日曜日）

午前は、先づ前日のレクレーション（短歌創作）の時間に参加者によって詠まれた短歌について講義する「創作短歌全体批評」が国民文化研究会副理事長・小柳志乃夫氏によって行はれた。

短歌の相互批評は、作者の気持ちを憶念し、皆で協力してその心に沿った表現を求める作業であると述べて、心と言葉が一致した時に湧いてくる喜びを是非とも体験して欲しいものと思ふと語った。この後、具体的に各班から一名づつ参加者の作品を取り上げ、作者の感動のポイントを押さへるとともに、一首一文といふ原則に照らしつつ表現を整へていった。

全体批評のあと、班別短歌相互批評が二時間十五分と時間をたつぷりとって行はれた。各班では、班員の歌について、作者は何を詠もうとしてゐるのか、それが正確な言葉で表現されてゐるか。大袈裟な表現になつてゐないか等々について、詠者の気持を察しながら、適

合宿教室のあらまし

	8月24日(金)	8月25日(土)	8月26日(日)	
6 00	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; writing-mode: vertical-rl;"> 第六十三回合宿教室(西日本) </div>			
30				
7 00			起床・洗面	起床・洗面
			朝の集ひ	朝の集ひ
8 00			朝 食	朝 食
30				
9 00			講 義 「人はいつも過去に動まされている」 廣木寧氏	創作短歌全体批評 小柳志乃夫氏
10 00			班別研修	班別相互批評
11 00				
30				
12 00			短歌創作導入講義 北村公一氏	昼 食
13 00			(写真撮影) 車中昼食(弁当)	講 義 「人がら、家がら、国がら」 山口秀範氏
14 00				
15 00			レクレーション	班別研修
		(短歌創作)		
16 00		[短歌提出]	講話 小野吉宣氏	
			感想文	
			閉会式	
17 15			解 散	
		夕べの集い		
18 00	(18:00受付開始)			
	(各班室にて待機)	夕 食		
19 00		入 浴		
30	開会式	休 憩		
20 00	合宿導入講義 「自分を知りたいあなたへ」 與島誠央氏	古典講義 「改革者の使命－芭蕉と子規－」 折田豊生氏		
30				
21 00	班別研修			
22 00		班別研修		
	(入浴)			
22 30	就寝	就寝		

切な表現を求めて班員が思ひを一つにして話し合った。

午後は(株)寺子屋モデル代表・山口秀範氏による「人から・家から・国から」と題する講義が行はれた。

江戸末期に生きた三人、二宮尊徳の道歌からは「人から」、飯田新七(高島屋の創業者)の家訓からは「家から」、そして藤田東湖の「回天詩史」からは「人から、家から」のみならず「国から」をも窺ひ知ることができると述べて、西洋諸国の「国から」の典型はアメリカ合衆国の「独立宣言」であって、アメリカ人が最も大切だとする「生命、自由、および幸福追求の権利」は「Creator」——創造主、全知全能のGOD——によって保証されてゐるものであると指摘した。二十一世紀のグローバル化した世界にあつても、各民族の千年、二千年前の歴史が各々の「国から」を決定してゐると語り、我が国では「天壤無窮の神勅」と「神武天皇の建国の詔」に「国から」が示されてゐて、歴代の天皇のお歌(御製)にそのご精神を仰ぐことができるかと語った。

その後、「筑豊炭田と朝鮮人炭坑夫たち——頌徳碑と謝恩碑について——」と題する講話が元福岡県立直方高等学校教諭・小野吉宣氏によって行はれた。

宮若市内に建つ二つの碑、「俵口和一郎頌徳碑」と「謝恩碑」を例に、歪んだ歴史認識の

誤謬を指摘した。これらは地元の貝島炭鉱で働いてゐた朝鮮人労働者がお世話になつたとして仲間呼び掛けて建てられたもので、炭坑で働いた人達の善意が結晶した記念の碑である。ことに近年の強制労働説が謬論であることは明白だと語つた。

予定の日程を全て終了して迎へた閉会式では、主催者を代表して小柳志乃夫国文研副理事長が、今次の合宿教室（西日本）を振り返つて、「自分の素直な気持ちや思ひをきちんと言葉にすることは大切なことであるが、普段の生活では中々気付く機会が少ない。参加者の皆さんには、この合宿教室が言葉を大切にしてゐるこの意味合ひを感じ取つて頂けたのではないかと思ふ。学問といふ一つの道に連なりたいと願つてゐる一人して、これからも皆さんと共に精進して行きたい」と挨拶した。

福岡大学経済学部三年・西田忠正君の閉会宣言で、合宿教室（西日本）は幕を閉ぢた。

合宿教室（東日本）のあらまし

第一日目（九月七日・金曜日）

合宿教室（東日本）は、開会式冒頭の筑波大学大学院二年・横川翔君による開会宣言で始まった。

主催者代表の開会挨拶で今林賢郁国文研理事長は「今年は明治百五十年で、戦後は七十三年である。明治百五十年の半分が戦後といふことになるが、明治の先人たちの自主独立の気概を受継いできたのだらうかと思ふと、内心忸怩たるものがある。自分の周辺のことしか関心を示さず、国防も米国任せといふ他者依存の風潮から脱却し真に独立国家として日本を再建しなければならぬ。その為には我が国の文化伝統を知らねばならないが、その道標となるのが古典だ。それは民族の記憶であり先人が何に生きがひや価値を置いてきたか、日本の思想に触れることができる。それが蘇れば自国と自分に対する誇りが生れる。この合宿でその手掛りを掴んでほしい」と述べた。

開会式に続いて、招聘講師の評論家・江崎道朗先生による「日米同盟の行方と中国への姿勢」と題する講義が行はれた。

大学時代にこの合宿教室に参加して、生涯の師となる小柳陽太郎先生、山田輝彦先生と出会って、お二人から日本をより良くする「学問」の存在に気付かされたといはれた。その

学問とは、知識を増やし見聞を広めるだけでなく、自己自身を磨けば磨くほどいかに自分が未熟であるかを痛感するやうになる学問で、他人の心の動きを「正確に理解し受け止める力」を養ふといふものであったとも仰有った。日本を良くしたいならば、政治家や官僚を説得する力に身に着けること、自分がどのやうな見識を持たねばならないかを勉強することだと教へられたと語られた。

そして現下の国際情勢の厳しさを具体的に指摘されて、ことに北朝鮮の「核・ミサイル」をめぐるトランプ米国防政権の外交軍事方針について、生々しい国家間の駆引きを具体的に述べられた。さらには海洋進出を企図する中国の軍拡や韓国での北寄り政権の登場、中台情勢の変化などに日本はどう対処したらいいのか。軍事には経済とインテリジェ



ンスが重要であるが、メディアの流す情報は真相を伝えてゐるのか。デフレを脱却して日米の連携で「アジアの自由」をどう守るのかを日本は迫られてゐる等々を語られた。

講義後、質疑応答が行はれ、先生はこの直後の班別研修の際、班を廻られ、さらに質問にお答へになった。

講義終了後、参加者は各班に分かれて、講義についての感想などを述べ合った。講師の真意はどこにあったのか、最も伝へたかつたことは何だったのかを確かめ合ひながら、各々の思ふところを話し合った。なほこの班別研修は、以後の講義の後にも繰返し実施された。

夜は「日本のこころ『古事記』」と題する講義が本会参与で昭和音楽大学名誉教授・國武忠彦氏によって行はれた。

いまの日本で当然のことのやうに叫ばれてゐる「グローバル化」とはヒト・モノ・カネ・情報が容易に国境を越えることであり、さらにはAI（人工知能）の活用が云々されてゐる。かうした時代なればこそ日本固有の文化の根本について自覚することが不可欠であると語つた。『古事記』の成立は、七世紀の漢字漢文の表記が広がる時代にあつて、天武天皇は古語が失はれれば「古の実のありさま」も失はれるとの憂慮からのものであり、古き口伝が筆録されたことは大変な偉業であつたと述べて、江戸時代の本居宣長による『古事記』研究に

よって、古語（大和言葉）が明らかになり、そこに籠められてゐた「日本のこころ」も見えて来るやうになったと古語の訓みを例示しつつ、神話は「古代人のこころの経験である」と述べた。

第二日目（九月八日・土曜日）

合宿教室の日程は「朝の集ひ」から始まる。この日はあいにくの雨天のため、講義室に集まって、ラジオ体操で体をほぐした後、澤部壽孫副理事長による短歌鑑賞が行はれた。昭和十八年十二月、学徒出陣で入営して、昭和二十年五月に戦死された松吉正資海軍中尉（二十二歳）が出征の前に、故郷で詠まれた左の三首が紹介され、参加者で朗誦して詠者の心を偲んだ。

ゆく身にはひとしほしむるふるさとの人のなさけのありがたきかな

数ならぬ身にあれども吾を送る人の思ひにこたへざらめや

うつそみはよし砕くともはらからのなさけ忘れじ常世行くまで

午前の最初は、元神奈川県立小田原高校教諭・原川猛雄氏による「聖徳太子」「憲法十七

『**条**』に学ぶ―人としての生き方―と題する講義であった。

今から千四百年前の聖徳太子の憲法十七条には、現在でも通用する教へが説かれてゐるとして、第一条から第十条までを具体的な条文に添つて、太子の精神を語った。太子は現実の人間の姿をすっかり見つめた上で、どうしたらよいのかといふ解決の道をお示しになつたと述べて、聖人とは凡夫に徹した人のことではなからうか。聖人とは己の足らはぬ姿を見つめて、自他の区別なく人々と共に救はれる道を実現したいと精進してゐる人のことだと思ふ。聖徳太子はまさにそのやうな方であつたと語り、個我の迷執から解き放たれ、お互ひ謙虚な気持ちで接することのできる世界、それこそが、太子の願はれた世界だと思ふと語った。午後は短歌創作をかねた散策を前にして、「**短歌創作導入講義**」が伊佐ホームズ(株)・小柳雄平氏によつて行はれた。

短歌を創作するといふことは、「豊かな心を育てる」ための修練であり、物事をみつめ、その事象の中核を的確に見出して、短歌の定型に正確な言葉で表現するものだと思ふ。この一連の作業を繰り返すことで、物事を見る目が養はれ、人の心のこまやかな動きなどにも気づくやうになるのではないかと、自らの作歌体験をふり返りながら語った。そして先人の秀歌を読み味はふとも大切なことで、それらによつて日本人が古代から培ってきた心の動

きを感知することが出来ると思ふと語った。

「交流の家」の敷地内を散策する中で短歌創作は行はれた。御殿場の地は海拔七百メートル余であつて、秋の訪れがかなり早い感じであつた。「交流の家」の広い敷地には万葉植物を初めとして、さまざまな植物が生ひ繁つてゐて、秋の草花がそこかしこに可憐な姿を見せてゐた。あいにくの曇天で、さらには時折は小雨が降るかと思へば、陽が射して、また小雨に見舞はれるといふ天候ではあつたが、夏の名残りで吹き来る風は心地良かった。各々洋傘を片手に短歌の創作に取り組んだ。

夜は、三菱地所(株) 都市開発二部専門調査役・青山直幸氏によつて、講義「日本の国柄——明治維新百五十年に思ふ——」が行はれた。

坂本太郎博士は日本歴史の特性の第一に「連綿性」を上げてゐて、その「連綿性」の中核となつてゐるものは万世一系の天皇であるとしてゐるが、まさにそれが日本の国柄があると語つた。今年には明治維新百五十年に当るが、明治維新とは、西欧列強が迫り来る中で独立を守つて、近代的統一国家を作つたといふことであると語つた。そして、この一大変革の精神的原動力になられたのは孝明天皇であつたとして、天皇を中心に公武が強い絆で結ばれてゐたことを具体的に述べた。さらに次の明治天皇にも、父帝の君民一体のお心が受け継がれ

たことを「五箇條の御誓文」にたどって、さらに終戦後の昭和二十一年元旦に出された「新日本建設に関する詔書」の冒頭に、「五箇條の御誓文」が掲げられたことを指摘して一貫する「日本の国柄」が語られた。

第三日目（九月九日・日曜日）

この日の「朝の集ひ」は何とか天候に恵まれて、予定通り屋外で実施された。国旗掲揚、ラジオ体操に続いて、山梨大学名誉教授・前田秀一郎氏によって短歌鑑賞が行はれた。富士山にちなむ短歌などが紹介され、左の歌を一同で唱和した。

遠山霞

本居宣長

心あての霞はかりにきのふ見しふしのねたとる東路の空

（都から東国へ行く途中、あいにく富士山は霞に覆はれて見えないので、昨日見た富士の嶺があると思はれる辺りの空を眺め、富士の姿を慕はしく思ひ量りながら旅行くことである）。

本居宣長は江戸時代の国学者、寛政三年（一七九二）六十三歳の時の作。

三井甲之

みんなみにそびゆる富士は雲立ちて見えずもゆかしそのあるあたり

○
ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを

三井甲之は山梨県の出身で明治・大正・昭和時代の歌人、思想家。昭和二十八年歿。

三日目の午前には、前日の雨模様の中の散策で詠まれた短歌について述べる「創作短歌全体批評」が国民文化研究会副理事長・澤部壽孫氏によって行はれた。

短歌の批評とは他人の歌をじろじろ見て批判するのではなく、作者の気持ちになってその歌を味はひ、作者の気持ちに最もふさはしいと思はれる言葉を選ぶことであると述べて、作者の気持ちに寄り添ひながら適切な言葉をさがすことは、一人が詠んだ歌を全員でまづ味はふことであり、正確な表現を探究する中で、得難い共感の世界が生れると語った。参加者の歌がいくつかかり上げられて、対象を正確に詠むとはどういふことなのか、適切な言葉をさがすとは如何なることなのか具体的に示された。

このあと、班に分れて各班員の詠んだ歌について言葉遣ひは適切か、作者の気持ちが正確な表現となつてゐるか、などについて率直に批評し合った。

午後には、若築建設(株)東京支店・池松伸典氏によって講話「亡き師の御言葉」が行はれた。

	9月7日(金)	9月8日(土)	9月9日(日)
6 00	第六十三回合宿教室(東日本)	起床・洗面	起床・洗面
7 00		朝の集ひ	朝の集ひ
		朝の集ひ(交流の家主催)	朝の集ひ(交流の家主催)
8 00		朝食	朝食
9 00		講義 「聖徳太子の御言葉に惹かれて -憲法十七条を中心に-」 原川猛雄氏	清掃
			創作短歌全体批評 澤部壽孫氏
10 00		班別研修	班別相互批評
11 00			
12 00		昼食	昼食
13 00		短歌創作導入講義 小柳雄平氏	講話 池松伸典氏
14 00	開会式・オリエンテーション	散策 短歌創作 (短歌提出) タペの集い(交流の家主催)	全体感想自由発表
15 00	準備		感想文執筆
16 00	講義 「日米同盟の行方と中国への姿勢」 江崎道朗先生		閉会式
	質疑応答・全体研修		15:30 解散
17 00	写真撮影		
18 00	夕食 入浴 休憩	夕食 入浴 休憩	
19 00			
20 00	講義 「日本のこころ」古事記」 國武忠彦氏	講義 「日本の国柄-明治百五十年に思ふ-」 青山直幸氏	
21 00			
22 00	班別研修	班別研修	
23 00	就寝	就寝	
	消灯	消灯	

国民文化研究会の源流、旧制一高「昭信会」の頃から長く活動を続けられた高木尚一先生の遺稿集にあった「仕事に追はれ忙しすぎるために心の生長をなくしてしまひ、さういふ自分を半ば得意になつてゐる場合が多い」「心が亡びる」ことを嘆く人は少ない」との箇所、これまで多く考へさせられて来たと述べて、さらに黒上正一郎先生の御著書『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』の一節や小田村寅二郎先生のお言葉を引きながら、概念に惑はされることなく真実を見抜く学問がいかに大切であるかを体験的に語つた。

合宿教室の閉会を前に、参加者が登壇して感想を語る「全体感想自由発表」が行はれて、左のやうな言葉が次々に発せられた。

・「合宿で生きる力を貰つた。日本に生れた幸せを感じた」・「正確に聞くことの大切さを教へられた」・「御父の孝明帝を十六歳で喪くして皇位を踐まれた若き明治天皇の御決意」を知つた。かうした先人の努力によつて現在の日本があると思つた」・「五箇条の御誓文の深い意味合ひを知つて良かった」・「言葉では知つてゐたが『うしはく』と『しらす』の相違の深意を実感できた」・「教員を志望してゐるが、日本に生れた幸せを感じさせられる先生になりたい」・「原典に触れることの重要性を再認識した」・「学問するとは、日本の国を学ぶとは、どうといふことなのかを合宿中に何度も自分に問ふた」・「短歌の相互批評

で、自分の気持ちにぴったりの表現にたどり着いた時はすっきりした」。

滞りなく日程が進み、閉会式を迎へた。主催者を代表して元富山県立富山工業高等学校教諭・岸本弘氏は、「昼食の後、雲が切れて富士山が目の前に雄姿を見せてくれた。そこで合宿の終るまぎわに富士の嶺はしるく立ちたりなんとうれしき」と詠んだ。合宿に何を求めてやってきたのか、合宿から何をつかんで家路に就かうとしてゐるのか。それを富士に向つて問ひかけ、富士から答へをいただく思ひである。班別研修の中で、講義内容を咀嚼し、自分の勘違ひしてゐるところを友から正してもらつた体験は、生活のどの場にあつても一番大切な人と人の付き合ひ方だと思ふ。皆さんとともに有意義な時間をもたせていただいたことにお礼申し上げたい」と挨拶した。

信州大学繊維学部一年・渡辺平祐君の閉会宣言で、合宿教室(東日本)の幕は閉ぢられた。

◎第六十三回全国学生青年合宿教室の参加者

(西日本) 八月二十四日～二十六日 参加者五十三名

(東日本) 九月 七日～九日 参加者六十三名

合計百十六名

合宿詠草抄



◎第六十三回合宿教室（西日本）——福岡県篠栗町——

学生・社会人

合宿の夜の暑さがすさまじく止まることなきベタつく汗よ

福岡大 経一 桃崎善希

若杉の山のふもとで汗流しともに学べる友を得しかな

福岡大 経一 平川龍也

合宿で古典に学び歌にふれ先人たちを誇りに思ふ

福岡工業大 短期大学一 井野口祐樹

レクリエーションで出かけし折

福岡大 経二 笠原康嗣

振り返り心の熱を思ひ出し車窓で感じる風がひんやり

神奈川大 人間科学三 中尾創哉

よく学びよく笑ひたる友たちとまた会ふ日まで日々励まなむ

福岡大 経三 西田忠正

篠栗ささぐりに集ふ友らの学舎まなびやで頭悩ます短歌創作

南蔵院の「防人像」の碑文を見し折に

国がため命尽くしし人々を忘るるなかれと碑文は教ふ

広島修道大 法四 田中壯卓

中村学園大 教三 日野ゆかり

先人の大和魂これ学び我振り返り心に刻む

(株)カウテレビジョン 小川雅裕

先人の教へに学び我気付く幸せの種は足下にありと

(学)中村学園 松村沙織

講義聴き班で深めたこの学び心に刻み明日に繋げん

(株)グランドビジョン 河野晟之

先人の使命にふれる合宿で新たな夢をふくらませたり

(一社)福岡中小企業経営者協会 大慈彌祐子

先人の思ひを友と語り合ひ我人生の糧とするべし

(株)グランドビジョン 川西潤

言の葉にしたためゆけば深まりて此の生更に彩やかならん

汗かくを忘るるばかりに友皆とひとつ心になるは楽しき

元小学校校長 猪部敬彦

合宿をやり終へ安堵のひとつときに自らに課すテーマ楽しき

元会社員 細谷真人

六十路むそぢすぎ学びの合宿やどの楽しみは歴史に和歌に班別研修

華泉書道会 坂本和代

大きな石と芝なる庭園にたくみのわざの深さを思ふ

福正会 中島保博

集ひ来て「より善く生きむ」と学びたるこの日生かして日々を過さむ

寺子屋モデル講師 内山慶子

大学教官有志協議会・国民文化研究会

閉会式の前に

国民文化研究会理事長 今林賢郁

一年を努めきたれるみ友らの西の集ひは今終らむとす

東ひしがしの集ひもはたまた近づきぬ心奮ひて努めゆかなむ
次々と起る課題ことごと打ち砕く力は友らの支へなりけり

「極まればまたよみがへる道」ありと思ひ定めて行かむとぞ思ふ（川出麻須美氏の歌）

伊藤伝右衛門邸にて

国民文化研究会副理事長 小柳 志乃夫

飯塚の暑き日盛り伝右衛門の広壯の屋敷を友らとめぐる
新妻の為に贅をば尽しけむ炭鋤王と呼ばれし主人は
木々の緑夏空に映え石組みゆ噴き上ぐる水の涼しげに見ゆ

小野吉宣先輩のお話を聞きて

久し振りに聞く先輩のお話に喝を入れらる心地するかな
おほらかに若き友らに語ります姿昔に変わりましたはず

旧友に会ひて

国民文化研究会事務局長 磯貝 保博

久しくも会はねど今のみ姿を見れば昔の君と変らじ
こころざし変らずであり合宿に集ひ加はりし姿を見れば

運営委員長廣木寧兄登壇

（株）寺子屋モデル 山口 秀範

一年をかけて備へし合宿を迎へて君いま壇上に立つ

ノーベル賞作家の境遇たどりつつ日本なるものを問ひ直すかな

西洋に翻弄され来し近代の見直し迫る口ぶり強し

若きらへ託す思ひは自づから囁んで含むる語りににじむ

体調の万全ならずも一年を努め来し君の功称へむ

朝の集ひの折に

元福岡県立直方高等学校教諭

小野吉宣

日の丸を掲揚すれば吹きわたる風は涼しも秋も近づく

レクレーションにて

熊本大学非常勤講師

白濱裕

くねくねとカーブ続きで緑濃き八木山峠をバス登りゆく

八木山と聞けば懐かしこの地にて集ひを持ちしゆ四十年よせとせ余りか

迷ひもて参加したるも今に続く心定めし集ひとなりぬ

元熊本市役所

折田豊生

篠栗の学びのつどひになつかしき友らと会へば胸のたかぶる

久々にまみえし友に久しくも会はざる友のあけくれを聞く

窓の外は夏の名残りの陽の光あふれてけやきの風に踊れる

青々と木々繁りたる山見れば友らもかくと偲ばるるかな

閉会式を前にして

(株) 寺子屋モデル (合宿運営委員長)

廣木 寧

かにかくも一つ一つの日程が進みて終ふるに安堵の思ひす
指揮班長古川広治氏をま中にして森田北濱岡部氏らが助く
ここ一年動かんとして動き得ず運営委員長の職に慚ぢいる

朝の集ひにて

原土井病院

小柳 左門

むら雲は若杉山の空をゆき風やや涼し朝の広場は

むし暑さいまだ残れど篠栗せうりの山の上より法師蟬なく

木々の葉はもみぢをおびて秋近き山辺の道を友と歩みぬ

年ゆかぬ子供らもともに日の丸を仰あしたく朝の集ひはうれし

南蔵院にて

元マツダ(株)

久々宮 章

木々に陰る坂道に入ればせせらぎの音の聞えく涼風吹きて
聞きしより造りの太き涅槃仏微かに笑みておはしますかな

合宿を終へるに当つて

みどりヶ丘保育園

西山 八郎

それぞれにさかりゆくとも学びたることを留めて深め合はなむ
をちこちに住まひすれどもあけくれの便り交して励みゆかなむ

篠栗南蔵院の釈迦涅槃像に詣でて

熊本市記念館

末次直人

友どちと汗をかきつつ参り来て休む日陰に風吹きわたる

北村公一さんの短歌創作導入講義を聞きて

元大村郵便局

橋本公明

とつとつと話されゆくも心から出づる言葉の力強しも

小野吉宣先輩の御講話をお聴きして

医療法人豊司会新門司病院

森田仁士

若さらに元氣与へむとふるひたち語りかけゆく先輩ともありがたし

「蘭学事始」復刻に関する話を聴きて

福岡県立博多青松高等学校教諭

藤寛明

西洋の學術撰取の苦心をば古人に偲びし論吉かしこし

今もなほ西洋思想の中にある我らの苦境を示し給へり

旧伊藤伝右衛門邸

上天草総合病院

福田誠

庭園や邸の粹に筑豊の炭鉱産業の栄華偲ばゆ

短歌創作導入講義を担当す

税理士法人あおぞら

北村公一

廣瀬（誠）大人のみ歌の数々誦みゆけり聴きたる友らの心に届けと

拙かる我れの話の顔上げて聞き給ひたる友ら有難し

短歌創作で南蔵院の釈迦涅槃像を訪ねて

折尾愛真短期大学准教授

松田隆

今は亡き母への思ひ蘇る釈迦涅槃像の姿麗しうるは

與島誠史君の講義を聞きて

元(株)アルバック

北濱 道

みぞとせ三十年を心にあたたため来りたる君の思ひを聞きまつりけり
歴史をば学びて何にならんとの生徒の間ひに応へ来にしと
松陰の「阿ねらず」とは開講の言にありきと君のたまひぬ

「死する」とは「死する」とき」にあらざると身を省みて説き給ひけり

亡き大日方学兄を偲びて

(株)ミユキコーポレーション

吉村 浩之

白雲の流るる空を仰ぎつつ南蔵院の小道を辿る

横たはる釈迦涅槃像に手を合せ友の御霊に唯々祈る

班員と一緒に食事をとる

熊本県立熊本高等学校教諭

久保田 真

テーブルを囲みて語れば心和み古き友らと過ごす心地す

大日方学先輩を思ふ

朝倉公共職業安定所(合宿指揮班長)

古川 広治

幾度も指揮班長つとめし先輩のみ声み姿よみがへりくる

(株)ラック

高橋 俊太郎

古の記憶いにしへを学ぶ楽しさを気づきなほしてまた学ばんとす

南蔵院にて「防人像」の前に立ちて

H u b a x (株)

岡部智哉

炎暑にて防人像の目にとまり熱を覚えしは肉体からだのみにあらし

合宿地に寄せられたお歌

合宿教室（西日本）に集へる友らへ

富山県

岸本

弘

日の本の民とし生くるよろこびを心ゆくまで語りませ友ら

◎第六十三回合宿教室

（東日本）——静岡県御殿場市——

学生・社会人

強靱なところをもちて目指すべき我が学問を深めていきまし

英国 Charterhouse School 三

柏原永明

東京大 教養一

江上隆介

合宿で学びしことの多きこと頭は疲れ心は嬉し

信州大 繊維一

渡辺平祐

班別の皆との会話盛り上がり心の深まる合宿教室

明治大 政経四 江崎 光太郎

合宿で心を込めて語りひし仲間と別れる時の悲しき

佐賀大 文化教育四 藤近 晃久

学問を日々重ねつつ日の本を正しく導く学生とならむ
しきしまの道を踏むこそ難しき時代を拓く力を信する

江崎道朗先生のご講義を聞きて 福岡教育大 教四 堤 正史

師の言葉しかと噛みしめ行動する大人うしの生き方まねて生きなむ

皇學館大 文三 小野寺 崇良

御殿場で語り学びしふることの教へを糧に学び続けむ

散策（短歌創作）から戻りし折 佐賀大 理工一 衛藤 良太

雨は上がり富士をば見むと振り向けど見ゆるは麓の岩肌ばかり

筑波大 大学院二 横川 翔

秋雨のぼつりぼつりと降るなかを吾れは来にけり御殿場の地に

國武忠彦先生のご講義を受けて 福岡教育大 教二 中島 朋子

国がらを守り給ひし先人の思ひ受け止むる学問を積まむ

うるはしき大和言葉をつむぎゆきしきしまの道を踏み続けたし

長崎大 教四 津田真木

「感じ取る」気持ち忘れず事に触れ向き合ひつづくる我でありたし

長崎大 教四 桑原由夏

先人^{うし}たちも仰ぎし富士に見守られ日本の心を学ぶはうれしき

雲の上がりて富士山の全景を仰ぐ

晴れ空に雄々しく立ちぬ富士山を三日目にして見るはうれしき

友と学びて (株)ミラボ 増田慎一

日本の歴史文化を語りける友との時はあに忘るまじ

元私立高校副校長 永井敏勝

防人の歌を残せしみおやらの直き心をしのびゆきたし

交流の家の周りを短歌創作で散策して 渡邊裕子

珍しき小さき蝶の舞ふを見て名を問ひただしつつ友らと歩む

最終日の昼、富士山の全容見えたり 全日本学生文化会議 清川信彦

皆々の願ひ届くか雲一つかからぬ富士をつひに仰ぎぬ

短歌創作で散策

谷藤伸子

春に食むいたどりの花今咲きて母が作りし山菜想ふ

奈良県明日香村議会議員

柳谷信子

うるはしき大和の言葉ことば読みゆけば古いにしへ人の心しのばゆ

日本生命保険相互会社

野々村美紀子

あふれたる日の本に生ふる喜びを述ぶる若人まぶしかりける

大学教官有志協議会・国民文化研究会

合宿最終日の朝

国民文化研究会理事長

今林賢郁

雨雲は流れてみ空青くして富士の頂あらはれにけり

吹く風に誘はれはためく日の丸のあなたに富士を仰ぎ見るかな

友（九月八日）

元日商岩井（株）エネルギー本部副本部長

澤部壽孫

合宿に縁えんじを得たる友らとの交はり五十余年経にけり

友らとの固ききづなのあればこそ誤れる思想とたたかひ生きる
会はずとも歌詠み交はし限りあるいのち通はせ生きつらぬかむ

原川猛雄先輩ご講義

I B J L 東芝リース(株) 監査役

小柳 志乃夫

飾らざる人柄のままに語ります太子のご講義楽しく聴きゆく
凡夫のままに共に生きゆく広き道を強き言葉に説きたまひけり

最終日

青空の広がりがて今日は富士の嶺の大き姿を仰ぎ見るかな
畏怖の情を覚ゆるといふわが甥の言葉思はるみ山仰ぎて

国民文化研究会事務局長

磯貝 保博

雨風の吹きつくる音強まりて眠りも浅く朝を迎へり

時折りに雨やみたればこの後は晴のちにかはれと願ふしばしば

元拓殖大学日本文化研究所客員教授

山内 健生

若きらの求める姿を羨としとも思ひつつ胸に鞭を打つなり

原川猛雄兄の講義

常日頃のみ心がけのしのばるる太子の御講義つつしみて聞く

元東急建設(株) 奥富修一

繁りたるヤマボウシの葉に雨降りて赤き実しるく目に見ゆるかな

夏草の可憐な花の蜜を吸ふ小さき蝶は羽はねすり合す

寺子屋石塾主宰 岩越豊雄

広き富士の裾野が宿で皆と共に国旗に向ひ君が代歌ふ

ひのもと日本に生きてゐるのが幸せと語りたまへる女性ひとすばらしき

子供らに国柄のよさ伝へんと涙ながらに語る女性ひとはも

富士を仰ぐ 元川崎重工業(株) 山本博資

富士が嶺を裾野に來り仰ぐときいよよ氣高き山にぞありける

晴れわたる富士の高嶺の白雲は見る見るうちにかたちをかふる

元富山県立富山工業高等学校教諭 岸本弘

小柳雄平さんの短歌導入講義

慕はしきわが若き友はなつかしき思ひ出こめて今語りゆく

飾りなく言葉を扱ひ語りゆく君が講義に耳傾くる

○

合宿の終る間に富士の嶺はしるく立ちたり何とうれしき

班別研修で明治天皇の御製「月」を讀みて

元三菱重工業(株)

島津正數

御父君ちぢぎみを偲ばるる歌身に染みておもはず吾がほほ濡れにけるかな

日本大学名誉教授

夜久竹夫

そびえ立つ富士のふもとで日の本の国柄につき学ぶ楽しさ

ひたひたと内と外から迫り来る災ひに勝つ心を育てむ

元富士通(株)

古賀智

晴れぬかとあきらめをれば雲切れて森のこずゑに雫かがやく

元神奈川県立小田原高等学校教諭

原川猛雄

ひるがへる国旗はたの向うにあざやかに富士山見えて心すがし

朝の集ひにて

三菱地所(株)都市開発第二部

青山直幸

おほひたる雲切れ初めて富士山のうす青き峯現はれて来ぬ

朝まだき吹きくる風に山すその雲は静かに流れゆくなり

流れゆく白雲見ればみ友らと今日は別れとの思ひ浮かびく

班別研修で聖徳太子の憲法十七条を讀む

山梨大学名誉教授

前田秀一郎

憲法けいぽうの御言みことを明らめむと友みな思ひのまま語りゆく

思ふまま語れる友の言の葉に聖徳王みとしの御教みをしへ偲しのぶ

皆人にたやすき例ためしひき給ひ人の踏むべき道説みちづかれたり

東京駅前クリニツク

北崎伸一

赤き尾根形変へつつ伸びてゆく夜明けの空の開きゆくまま

ピーク五つ頂きに並び白雲の前にいでたり御殿場の富士

白旗雲かかれる峰の山すその闇の深さのうすれゆくかな

うすれゆく闇の深さよその奥の沈む緑に胸とどろきぬ

残雪をふところに抱く尾根すぢの三つ走りぬ頂き向きて

元(株)講談社

藤井 貢

秋の野に群れ咲き匂ふ山萩を友に教はり心に止めむ

原川猛雄先輩のお話をお聴きして

(二社)日本港運協会

久米秀俊

ユーモアを交へ話さるる先輩の話にをのづと引き込まれけり

生活に聖徳太子みとしの言葉の活きしこと感ぜらるるかも氏のお話に

元座間市立中原小学校教諭

松本洋治

雨音に目覚むる朝富士合宿窓の外暗きに木の葉ゆれる見ゆ

埼玉県庁企業立地課

飯島隆史

輪になりてはじめて会ひし友どちと語り交すは樂しかりけり

富士の峰姿はみせず雲低く雨まじりにて東に飛ぶ

朝の集ひにて

筑波大学非常勤講師

布瀬雅義

やうやくに姿を見せし富士を背に日の丸上がり君が代流る

数多なる若き友らと声合はせ歌ふ君が代響きわたれり

若築建築(株)(合宿運営委員長)

池松伸典

富士の嶺の雄々しき姿ながめつつ学びの集ひふりかへりみる

池松伸典運営委員長の講話を聴きて

(株)IHIEアロスペース

内海勝彦

忙しき合間の中にも歌を詠む時を作れと友は語りぬ

閉会式

元(株)アルバック

北濱道

人々のかしこき思ひに支へられ合宿教室今終らむとする

IMSグループ本部事務局(合宿指揮班長)

最知浩一

無事レクリエーションを行ふことが出来て

吾の願ひ天に届きしかいつのまに雨も降り止み青空も見ゆ

合宿最終日の早朝、集ひの広場にて

さしのほるあさひに映えてそそりたつ富士の高嶺のなんと雄々しき
いただきにかかりてありし雲もはれ雄々しき姿に言葉も出でず

厳かに聳ゆる姿を真向かひに見ればこころの清しかりけり

学生の感想発表を聴きて

茨城新聞社

佐川友一

合宿で得しこと各々真心を込めて語らんとする姿尊し
我もまた直き心を忘れじと交はりの縁かみしめ思ふ

アサヒ飲料(株)

澤部和道

富士山の麓の空気澄みわたり夜道歩くもいと清々し

合宿に穴井宏明兄、高木雅史兄来たる

伊佐ホームズ(株)

小柳雄平

「おお」と言へば「おお」と応へし友どちは我が講義をば聞きに来しとふ
懐かしき友と語れば講義前の緊張ほぐれゆく心地すも

あとがき

第六十三回「合宿教室」は、「西」（福岡県篠栗町）と「東」（静岡県御殿場市）に分けて開催された。大学生をはじめ多様な職種にわたる社会人も加はった計百十六名の参加者によって例年と同じく、学問・人生・祖国の一体的把握のための真剣な研鑽が行はれた。本冊子は、その折なされた各講義を中心に研修の要旨を収録したものである。藤井貢会員には、校正でご協力を願った。合宿参加者各位には、この合宿記録をあらためて味読いただいて、研修の日々を思ひ起していただくとともに、日本の国のあるべき姿を求めるための学びの指針として活用されんことを願ふ次第である。

さて、今年の第六十四回の「合宿教室」は「熊本県立あしきた青少年の家」での合宿（五月二十五日から一泊二日）と、千葉県柏市の「公益財団法人モラロジー研究所・柏生涯学習センター」での合宿（八月三十日から二泊三日）を合せた形で開催される。

今年も例年と同様の、それ以上の実りある研修合宿にしたいものと準備してゐる。全国各地からの学生、青年諸氏のご参加を願ひつつ「あとがき」とする。

平成三十一年三月二日

編集委員 山内 健生

磯貝 保博

——日本への回帰——
(第54集)

平成三十一年三月十日発行 頒価 九〇〇円

編 者 大学教官有志協議会

公益社団法人 国民文化研究会

編集委員代表 今 林 賢 郁

発 行 所 公益社団法人 国民文化研究会

〒一五〇—〇〇—一 東京都渋谷区東

一—一三一—四〇二

TEL (〇三) 五四六八—六二三〇

振替 〇〇—一七〇—一—六〇五〇七

落丁・乱丁のものはお取り替へいたします。

大学教官有志協議会
編
國民文化研究会

